

**2019年度
大学院社会学研究科
講義概要 (シラバス)**



法政大学

科目一覽

最新版のシラバスは、法政大学 Web シラバス (<https://syllabus.hosei.ac.jp/>) で確認してください。

| | | |
|---------|--|----|
| [X6000] | 社会学基礎演習 1 [鈴木 智道] 春学期授業/Spring | 1 |
| [X6001] | 社会学基礎演習 2 [鈴木 宗徳] 秋学期授業/Fall | 1 |
| [X6002] | 社会学基礎演習 3 [鈴木 智道] 春学期授業/Spring | 2 |
| [X6003] | 理論社会学 1 (比較社会学の方法) [多喜 弘文] 秋学期授業/Fall | 2 |
| [X6004] | 理論社会学 2 (文化の社会学) [鈴木 智之] 秋学期授業/Fall | 3 |
| [X6005] | 理論社会学 3 (ナショナリズム論) [佐藤 成基] 春学期授業/Spring | 3 |
| [X6006] | 理論社会学 4 (ベーシックインカム研究方法論の探求) [岡野内 正] 秋学期授業/Fall | 4 |
| [X6007] | 理論社会学 5 (個人化理論の射程) [鈴木 宗徳] 春学期授業/Spring | 5 |
| [X6008] | 理論社会学基礎 1 [徳安 彰] 春学期授業/Spring | 6 |
| [X6009] | 理論社会学基礎 2 [徳安 彰] 秋学期授業/Fall | 7 |
| [X6010] | 社会学特殊研究 1 (国際移住の社会学) [田嶋 淳子] 秋学期授業/Fall | 8 |
| [X6011] | 社会学特殊研究 1 (移民政策研究) [上林 千恵子] 春学期授業/Spring | 9 |
| [X6012] | 社会学特殊研究 2 (若者政策の現状と課題) [樋口 明彦] 春学期授業/Spring | 10 |
| [X6013] | 社会学特殊研究 2 (批判的社会政策論) [堅田 香緒里] 秋学期授業/Fall | 11 |
| [X6014] | 社会学特殊研究 3 (変化/不変化の社会学) [堀川 三郎] 春学期授業/Spring | 11 |
| [X6015] | 社会学特殊研究 3 (家族社会学) [菊澤 佐江子] 春学期授業/Spring | 12 |
| [X6016] | 社会学特殊研究 4 (歴史社会学) [鈴木 智道] 春学期授業/Spring | 13 |
| [X6017] | 社会学特殊研究 4 (社会運動としての成人教育運動) [荒井 容子] 春学期授業/Spring | 13 |
| [X6018] | 社会学特殊研究 5 [村井 重樹] 秋学期集中/Intensive(Fall) | 14 |
| [X6019] | 社会学特殊研究 6 [山腰 修三] 春学期集中/Intensive(Spring) | 15 |
| [X6020] | 統計分析法 [斎藤 友里子] 秋学期授業/Fall | 16 |
| [X6021] | 社会調査実習 [田嶋 淳子] 年間授業/Yearly | 17 |
| [X6022] | 調査研究法 [中筋 直哉] 春学期前半/Spring(1st half) | 18 |
| [X6023] | 質的資料分析法 [三井 さよ] 春学期後半/Spring(2nd half) | 18 |
| [X6024] | メディア社会学基礎演習 1 [津田 正太郎] 春学期授業/Spring | 19 |
| [X6025] | メディア社会学基礎演習 2 [小林 直毅] 秋学期授業/Fall | 19 |
| [X6026] | メディア社会学基礎演習 3 [津田 正太郎] 春学期授業/Spring | 20 |
| [X6027] | メディア理論 1 (メディアの歴史と思想) [小林 直毅] 秋学期授業/Fall | 21 |
| [X6028] | メディア理論 2 (映画理論) [高 美都] 春学期授業/Spring | 22 |
| [X6029] | メディア理論 3 (ジャーナリズム論) [別府 三奈子] 秋学期授業/Fall | 23 |
| [X6030] | メディア理論 4 (メディア・コミュニケーションの諸相～現状と今後～) [北原 利行] 春学期授業/Spring | 23 |
| [X6031] | メディア特殊研究 1 (ブランド広告の意味研究) [青木 貞茂] 春学期授業/Spring | 24 |
| [X6032] | メディア特殊研究 2 (メディアとデータリテラシー) [萩原 雅之] 春学期授業/Spring | 25 |
| [X6033] | メディア特殊研究 3 (知的財産権法) [白田 秀彰] 秋学期授業/Fall | 26 |
| [X6034] | メディア特殊研究 4 (ソーシャルメディア論) [藤代 裕之] 春学期授業/Spring | 27 |
| [X6035] | メディア社会学特殊研究 1 (消費者行動分析) [諸上 茂光] 秋学期授業/Fall | 27 |
| [X6036] | メディア社会学特殊研究 2 (ネット世論) [稲増 龍夫] 秋学期授業/Fall | 28 |
| [X6037] | 取材文章実習 [高瀬 文人] 春学期授業/Spring | 28 |
| [X6038] | 調査報道実習 2 [川島 浩誉] 春学期集中/Intensive(Spring) | 29 |
| [X6039] | オーディエンス調査実習 [土橋 臣吾] 春学期授業/Spring | 30 |
| [X6040] | 学際研究 1 (平和構築と移行期正義) [二村 まどか] 春学期授業/Spring | 31 |
| [X6041] | 学際研究 2 (認知科学・人工知能) [金井 明人] 秋学期授業/Fall | 31 |
| [X6042] | 学際研究 4 (社会ネットワークと組織) [宇野 齊] 春学期授業/Spring | 32 |
| [X6043] | 社会科学研究法 1 [大崎 雄二] 春学期授業/Spring | 33 |
| [X6044] | 社会科学研究法 2 [大崎 雄二] 秋学期授業/Fall | 33 |
| [X6045] | 外国書講読 1 (英語) [上林 千恵子] 春学期授業/Spring | 34 |
| [X6046] | 外国書講読 2 (英語) [上林 千恵子] 秋学期授業/Fall | 34 |
| [X6047] | 外国書講読 1 (英語) [土倉 英志] 春学期授業/Spring | 35 |
| [X6048] | 外国書講読 2 (英語) [土倉 英志] 秋学期授業/Fall | 35 |
| [X6049] | 外国書講読 1 (英語) [鈴木 宗徳] 春学期授業/Spring | 36 |
| [X6050] | 外国書講読 2 (英語) [鈴木 宗徳] 秋学期授業/Fall | 36 |
| [X6051] | 外国書講読 1 (仏語) [高橋 愛] 春学期授業/Spring | 37 |
| [X6052] | 外国書講読 2 (仏語) [高橋 愛] 秋学期授業/Fall | 37 |

| | | |
|---------|---|----|
| 【X6053】 | 外国書講読1 (独語) [西出 佳詩子] 春学期授業/Spring | 38 |
| 【X6054】 | 外国書講読2 (独語) [西出 佳詩子] 秋学期授業/Fall | 38 |
| 【X6055】 | 外国書講読1 (中国語) [篠田 幸夫] 春学期授業/Spring | 39 |
| 【X6056】 | 外国書講読2 (中国語) [篠田 幸夫] 秋学期授業/Fall | 39 |
| 【X6057】 | 社会学原典講読 [徳安 彰] 春学期授業/Spring | 40 |
| 【X6058】 | 社会学原典講読 [小林 直毅] 春学期授業/Spring | 40 |
| 【X6059】 | 論文指導1 [専任教員] 年間授業/Yearly | 41 |
| 【X6060】 | 論文指導2 [専任教員] 年間授業/Yearly | 42 |
| 【X6300】 | 博士論文指導ⅠA [専任教員] 春学期授業/Spring | 42 |
| 【X6301】 | 博士論文指導ⅠB [専任教員] 秋学期授業/Fall | 43 |
| 【X6302】 | 博士論文指導ⅡA [専任教員] 春学期授業/Spring | 43 |
| 【X6303】 | 博士論文指導ⅡB [専任教員] 秋学期授業/Fall | 44 |
| 【X6304】 | 博士論文指導ⅢA [専任教員] 春学期授業/Spring | 44 |
| 【X6305】 | 博士論文指導ⅢB [専任教員] 秋学期授業/Fall | 45 |
| 【X6306】 | 社会学総合演習A [専任教員] 春学期集中/Intensive(Spring) | 45 |
| 【X6307】 | 社会学総合演習B [専任教員] 秋学期集中/Intensive(Fall) | 46 |
| 【X6308】 | 社会学研究1 [ジョナサン ブラウン] 秋学期授業/Fall | 46 |
| 【X6309】 | 社会学研究2 [村井 重樹] 秋学期集中/Intensive(Fall) | 47 |
| 【X6310】 | 社会学研究3 [山腰 修三] 春学期集中/Intensive(Spring) | 48 |
| 【X6311】 | 社会調査法1 [中筋 直哉] 春学期前半/Spring(1st half) | 49 |
| 【X6312】 | 社会調査法2 [斎藤 友里子] 秋学期授業/Fall | 49 |
| 【X6313】 | 社会調査法3 [三井 さよ] 春学期後半/Spring(2nd half) | 50 |
| 【X6314】 | 社会学原典研究1 [徳安 彰] 春学期授業/Spring | 51 |
| 【X6315】 | 社会学原典研究2 [小林 直毅] 春学期授業/Spring | 51 |

SOC600E1 - 1100

社会学基礎演習 1

鈴木 智道

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「社会学基礎演習 1」では、修士課程 1 年生を対象に、大学院での研究の進め方、修士論文のテーマ設定、論文の構成の仕方を修得し、各自が修士課程における研究の計画・論文の構想を立てるまでを支援する。

【到達目標】

各自の問題関心と論文テーマを確定し、研究の方法を模索すると同時に具体的な研究計画を立てるところまでを課題とする。

「研究」とは何か、「論文を書く」とはどのようなことか、についての基本的な考え方を理解し、春学期末までに、修士論文のテーマ設定、ならびに研究対象と研究方法の選択を行えるようにすることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回 1 人～複数名の報告者を決め、それぞれの「研究計画」「論文構想」について報告し、出席者全員での討議を重ねる。

なお、本演習は「社会学基礎演習 3」（修士課程 2 年生対象）と合同で開講する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|--------------------|-------------|
| 第 1 回 | ガイダンス | この演習の目的と進め方 |
| 第 2 回 | 修士課程 1 年による報告 | 問題関心報告 |
| 第 3 回 | 修士課程 2 年による報告 ① | 修論構想報告 |
| 第 4 回 | 修士課程 2 年による報告 ② | 修論構想報告 |
| 第 5 回 | 修士課程 2 年による報告 ③ | 修論構想報告 |
| 第 6 回 | 修士課程 1 年による報告 ① | 研究計画報告 |
| 第 7 回 | 修士課程 1 年による報告 ② | 研究計画報告 |
| 第 8 回 | 修士課程 1 年による報告 ③ | 研究計画報告 |
| 第 9 回 | 修士課程 2 年による報告 ① | 修論中間報告 |
| 第 10 回 | 修士課程 2 年による報告 ② | 修論中間報告 |
| 第 11 回 | 修士課程 2 年による報告 ③ | 修論中間報告 |
| 第 12 回 | 修士課程 1 年による報告 ① | 修論構想報告 |
| 第 13 回 | 修士課程 1 年による報告 ② | 修論構想報告 |
| 第 14 回 | 修士課程 1 年による報告 ③ | 修論構想報告 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究テーマ・研究構想に沿って、報告の準備を行う。

【テキスト（教科書）】

とくに使用しない。

【参考書】

とくに指定しない。

【成績評価の方法と基準】

担当回の報告内容（50%）と毎回の議論への参加（50%）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史社会学、教育社会学
<研究テーマ> 家族表象の歴史政治学的分析、歴史の物語論
<主要研究業績>
『職業と選抜の歴史社会学』（共著、世織書房）、『近代教育』の社会学論』（共著、勁草書房）、『近代の親子問題』（日本図書センター）

【Outline and objectives】

The main aim of this seminar is to work out the details of each individual research plan for writing a master's thesis.

SOC600E1 - 1101

社会学基礎演習 2

鈴木 宗徳

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、社会学コースの修士課程 1 年生を対象とした必修科目である。ここでは、修士論文の作成・執筆に向けて、研究主題の明確化と、これに伴う方法論の選択に照準化して、研究デザインの構築をめざす。併せて、学術論文作成に必要な文章の書き方を学ぶことも目標とする。

【到達目標】

それぞれが執筆する修士論文の「主題」を明確化し、これを具体的に回答可能な「問い」として定式化する。同時に、その研究目的に照らして適切な方法と研究対象（素材・データ）を選択し、先行研究の整理を行う。最終的に、修士論文の序章に相当する文章を作成する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

はじめに、過去の修士論文の中から数編を選んで、その「序論」を読む。序論として必要な条件とは何かを確認した後、受講生各自の報告を行う。授業計画は概ね以下を予定している（ただし、受講者の人数や授業の展開等により、若干の変更があり得る）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|--------------|----------------|
| 第 1 回 | 演習の狙い | 演習の目的と進め方を説明する |
| 第 2 回 | 論文の主題と方法（1） | 過去の修士論文に学ぶ（1） |
| 第 3 回 | 論文の主題と方法（2） | 過去の修士論文に学ぶ（2） |
| 第 4 回 | 論文の主題と方法（3） | 過去の修士論文に学ぶ（3） |
| 第 5 回 | 論文の主題と方法（4） | 過去の修士論文に学ぶ（4） |
| 第 6 回 | 修士論文の構想報告（1） | 論文構想の報告と検討（1） |
| 第 7 回 | 修士論文の構想報告（2） | 論文構想の報告と検討（2） |
| 第 8 回 | 修士論文の構想報告（3） | 論文構想の報告と検討（3） |
| 第 9 回 | 修士論文の構想報告（4） | 論文構想の報告と検討（4） |
| 第 10 回 | 修士論文序章の作成（1） | 論文序章の文章化と検討（1） |
| 第 11 回 | 修士論文序章の作成（2） | 論文序章の文章化と検討（2） |
| 第 12 回 | 修士論文序章の作成（3） | 論文序章の文章化と検討（3） |
| 第 13 回 | 修士論文序章の作成（4） | 論文序章の文章化と検討（4） |
| 第 14 回 | まとめ | レポートの提出と総評 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

それぞれの研究課題の明確化、先行研究の整理等を計画的に進めることが求められる

【テキスト（教科書）】

適宜、授業内で指示する

【参考書】

適宜、授業内で指示する

【成績評価の方法と基準】

演習での報告（30%）、議論への参加（30%）、レポート（40%）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【学生が準備すべき機器他】

適宜指示する

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 社会学理論
<研究テーマ> 現代における批判的 sociology の課題
<主要研究業績>
『危機に対峙する思考』（共編著、梓出版社、2016）
『個人化するリスクと社会——ベック理論と現代日本』（編著、勁草書房、2015）
『私』をひらく社会学——若者のための社会学入門（共著、大月書店、2014）
『リスク化する日本社会——ウルリッヒ・ベックとの対話』（共編、岩波書店、2011）

【Outline and objectives】

This is a required course for first-year Master's degree students of sociology. This course helps students to design study plan for writing a master thesis.

SOC600E1 - 1102

社会学基礎演習3

鈴木 智道

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「社会学基礎演習3」では、修士課程2年生を対象に、修士論文の構想、研究の進め方、完成までの筋道の立て方を、受講者全員の議論を通じて考えていく。

【到達目標】

春学期末までに、修士論文の章立て、ならびに最終的な研究計画を確定することを旨とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

各回1人～複数名の報告者を決め、それぞれの「研究計画」「論文構想」について報告し、出席者全員での討議を重ねる。

なお、本演習は「社会学基礎演習1」（修士課程1年対象）と合同で開講する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-------------|-------------|
| 第1回 | ガイダンス | この演習の目的と進め方 |
| 第2回 | 修士課程1年による報告 | 問題関心報告 |
| 第3回 | 修士課程2年による報告 | 修論構想報告 |
| ① | | |
| 第4回 | 修士課程2年による報告 | 修論構想報告 |
| ② | | |
| 第5回 | 修士課程2年による報告 | 修論構想報告 |
| ③ | | |
| 第6回 | 修士課程1年による報告 | 研究計画報告 |
| ① | | |
| 第7回 | 修士課程1年による報告 | 研究計画報告 |
| ② | | |
| 第8回 | 修士課程1年による報告 | 研究計画報告 |
| ③ | | |
| 第9回 | 修士課程2年による報告 | 修論中間報告 |
| ① | | |
| 第10回 | 修士課程2年による報告 | 修論中間報告 |
| ② | | |
| 第11回 | 修士課程2年による報告 | 修論中間報告 |
| ③ | | |
| 第12回 | 修士課程1年による報告 | 修論構想報告 |
| ① | | |
| 第13回 | 修士課程1年による報告 | 修論構想報告 |
| ② | | |
| 第14回 | 修士課程1年による報告 | 修論構想報告 |
| ③ | | |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究テーマ・研究構想に沿って、報告の準備を行う。

【テキスト（教科書）】

とくに使用しない。

【参考書】

とくに指定しない。

【成績評価の方法と基準】

担当回の報告内容（50%）と毎回の議論への参加（50%）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>歴史社会学、教育社会学

<研究テーマ>家族表象の歴史政治学的分析、歴史の物語論

<主要研究業績>

『職業と選抜の歴史社会学』（共著、世織書房）、『近代教育の社会理論』（共著、勁草書房）、『近代の親子問題』（日本図書センター）

【Outline and objectives】

The main aim of this seminar is to work out the details of each individual research plan for writing a master's thesis.

SOC500E1 - 1200

理論社会学1（比較社会学の方法）

多喜 弘文

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会学という学問分野において、日本やアジアと欧米との様々なコンテクストの違いを踏まえてどのように研究していくべきかについて、比較に関するさまざまな先行研究を通じて学んでいく

【到達目標】

この授業では、これまで欧米を中心に進められてきた社会学領域において、日本や東アジアを対象とした研究が、どのように理論というものを考えていくべきかを議論する。西洋を分析するために開発された概念枠組みをそのまま機械的に適用するのではない形で、日本や東アジア社会をうまく説明できるような理論枠組みを構築するとはどういうことなのかについて、受講生が考えることができるようになることが目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

受講生が担当回の文献について作成したレジュメをもとに報告し、それについて全員で議論する

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|----------------------------|----------------------------------|
| 第1回 | 社会学における理論とは どのようなものか(1) | 自然科学と社会科学 |
| 第2回 | 社会学における理論とは どのようなものか(2) | 社会学と経済学 |
| 第3回 | 日本社会の独自性について(1) | 教育社会学を事例にして(1) |
| 第4回 | 日本社会の独自性について(2) | 日本社会論を事例にして(2) |
| 第5回 | 異質性のディレンマ(1) | 「ローカルで、オリジナルな理論」はなぜダメか |
| 第6回 | 異質性のディレンマ(2) | 日本と中国のソーシャルキャピタル概念 |
| 第7回 | 比較社会学の文献(1) | 統制された比較法 |
| 第8回 | 比較社会学の文献(2) | 特殊性—普遍性—特殊性戦略 |
| 第9回 | 比較社会学の文献(3) | 認識枠組み自体を変える(epistemic challenge) |
| 第10回 | 比較社会学の文献(4) | 認識枠組みを変数化する |
| 第11回 | 地域研究・歴史研究(1) | 地域研究とは何か |
| 第12回 | 地域研究・歴史研究(2) | ボバーを読む |
| 第13回 | 地域研究・歴史研究(3) | 保城を読む |
| 第14回 | 総括 | まとめ |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

担当回はレジュメを作成し、受講生は毎回事前にその文献を読んで授業に臨むことを要求する

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない

【参考書】

スメルサー、1976=1996、『社会科学における比較の方法——比較文化論の基礎』玉川大学出版部。その他、授業中に指示する

【成績評価の方法と基準】

平常点(40%)、期末レポート(60%)

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究テーマやアプローチによって取り上げる文献に多少の変更を加えた方が良さそうなので、初回に相談することで文献の順序や場合によっては内容を入れ替えることがある

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会階層論、教育社会学、比較社会学

<研究テーマ>教育と不平等の比較社会学

<主要研究業績> “Upper Secondary Education in East Asia: A Quantitative Comparison with Western Countries,” in High School for All in East Asia, edited by Shinichi Aizawa, Mei Kagawa, and Jeremy Rappleye, Routledge (2018) ほか

【Outline and objectives】

This class focuses on methods and approaches in comparative social sciences. It will draw on the literature of various fields in social sciences in order to consider various key issues of inequality research in modern societies.

SOC500E1 - 1201

理論社会学2（文化の社会学）

鈴木 智之

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「探偵小説」という物語形式を社会学的視点から読み解いていく視点を探求する。

【到達目標】

リュック・ボルトンスキーの探偵小説論『謎と共謀 捜査についての調査』（2012年）を、仏文または英訳で読む。ボルトンスキー社会学の基本的な視点を学ぶと共に、探偵小説という文学形式を社会的に対象化する視点を模索していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

英文または仏文のテキストを、2週に1章のペースで読み進め、解釈と議論を重ねる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|------------|-------------------|
| 第1回 | 問題設定 | 探偵小説の社会学とは何か |
| 第2回 | 『謎と共謀』（1） | 講読第1回目 第1章前半 |
| 第3回 | 『謎と共謀』（2） | 講読第2回目 第1章後半 |
| 第4回 | 『謎と共謀』（3） | 講読第3回目 第2章前半 |
| 第5回 | 『謎と共謀』（4） | 講読第4回目 第2章後半 |
| 第6回 | 『謎と共謀』（5） | 講読第5回目 第3章前半 |
| 第7回 | 『謎と共謀』（6） | 講読第6回目 第3章後半 |
| 第8回 | 『謎と共謀』（7） | 講読第7回目 第4章前半 |
| 第9回 | 『謎と共謀』（8） | 講読第8回目 第4章後半 |
| 第10回 | 『謎と共謀』（9） | 講読第9回目 第5章前半 |
| 第11回 | 『謎と共謀』（10） | 講読第10回目 第5章後半 |
| 第12回 | 『謎と共謀』（11） | 講読第11回目 第6章前半 |
| 第13回 | 『謎と共謀』（12） | 第12回目 第6章後半、エピローグ |
| 第14回 | 『謎と共謀』（13） | 第13回目 第6章後半、エピローグ |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講生は、毎回のテキスト講読、及び担当回のレジュメ作成を行う

【テキスト（教科書）】

Luc Boltanski, *Enigmes et complots, Une enquête a propos d'enquetes*, Gallimard, 2012.
(英訳: *Mysteries & Conspiracies, Polity, 2014*)

【参考書】

随時指示する

【成績評価の方法と基準】

毎回の講読と報告の内容を評価の対象とする（100%）

【学生の意見等からの気づき】

必ずしも簡単なテキストではありませんが、講読の作業を共同化することで、なんとか消化できるのではないかと思います。頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

文化社会学

<研究テーマ>

記憶の文学の社会学

<主要研究業績>

翻訳: ジャック・デュボア『探偵小説あるいはモデルニテ』法政大学出版局

【Outline and objectives】

The aim is to inquire the sociological points of view to analyze the mystery and other literary forms.

SOC500E1 - 1202

理論社会学3（ナショナリズム論）

佐藤 成基

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「日常のナショナリズム（everyday nationalism）」のアプローチについて学ぶ。

【到達目標】

「日常のナショナリズム」というアプローチが現代のナショナリズム理解にとっても意義について考察する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

文献を講読する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-----------------------------|-----------------|
| 第1回 | イントロダクション | 授業の概要についての説明 |
| 第2回 | マイケル・ビリグの「平凡なナショナリズム」 | テキスト1)の一部を読む |
| 第3回 | 「平凡なナショナリズム」から「日常のナショナリズム」へ | テキスト2)の一部と3)を読む |
| 第4回 | 「日常のナショナリズム」研究の動向 | テキスト4)と5)を読む |
| 第5回 | 「日常のナショナリズム」のアプローチ（理論編）1 | テキスト6)と7)を読む |
| 第6回 | 「日常のナショナリズム」のアプローチ（理論編）2 | テキスト8)と9)を読む |
| 第7回 | 「日常のナショナリズム」のアプローチ（理論編）3 | テキスト10)の前半を読む |
| 第8回 | 「日常のナショナリズム」のアプローチ（理論編）4 | テキスト10)後半を読む |
| 第9回 | 「日常のナショナリズム」のアプローチ（理論編）5 | テキスト11)を読む |
| 第10回 | 「日常のナショナリズム」のアプローチ（実証編）1 | テキスト12)を読む |
| 第11回 | 「日常のナショナリズム」のアプローチ（実証編）2 | テキスト13)を読む |
| 第12回 | 「日常のナショナリズム」のアプローチ（実証編）3 | テキスト14)の一部を読む |
| 第13回 | 「日常のナショナリズム」のアプローチ（実証編）4 | テキスト15)と16)を読む |
| 第14回 | 「日常のナショナリズム」のアプローチ（実証編）5 | テキスト17)と18)を読む |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回該当するテキストを読解する。

【テキスト（教科書）】

1) M.Billig, *Banal Nationalism*. Sage (1995)

2) M.Skey, "The national in everyday life: a critical engagement with Michael Billig's thesis of *Banal Nationalism*," *The Sociological Review* 57 (2009): 331-346.

3) S.Duchesne, "Who's afraid of banal nationalism?," *Nations and Nationalism* 24:4 (2018): 841-8563

4) B.Bonikowski, "Nationalism in settled times," *Annual Review of Sociology* 42 (2016): 427-449.

5) E.Knott, "Everyday nationalism: a review of literature," *Studies of National Movements* 3 (2015)

6) J.E.Fox and C. Miller-Idriss, "Everyday nationhood," *Ethnicities* 8 (2008): 536-563.

7) T.Edensor, "Reconsidering national temporalities: institutional times, everyday routines, serial spaces and synchronicities," *European Journal of Social Theory* 9 (2006): 525-545.

8) J.P.Goode and D.R.Stroup, "Everyday nationalism: constructivism for the masses," *Social Science Quarterly* 96:3 (2015): 717-739

9) Y.Déloye, "National identity and everyday life", in J. Breuille ed., *The Oxford Handbook of the History of Nationalism*. Oxford University Press (2013).

10) M.Skey, *National Belonging and Everyday Life: The Significance of Nationhood in an Uncertain World*. Palgrave Macmillan (2011).

- 11) J.Hearn and M.Antonsich, "Theoretical and methodological considerations for the study of banal and everyday nationalism", *Nations and Nationalism* 24:3 (2018): 594-605
- 12) M.Antonsich, "The 'everyday' of banal nationalism: Ordinary people's views on Italy and Italian," *Political Geography* 54 (2015): 32-42.
- 13) T.J.Carter, J.J.Ferguson, and R.R.Hassin, "Implicit nationalism as system justification: the case of the United States of America", *Social Cognition* 29 (2011): 341-359.
- 14) T.Edensor, *National Identity, Popular Culture and Everyday Life*. Berg (2002)
- 15) R.Jones and P.Merriman, "Hot, banal and everyday nationalism: bilingual road signs in Wales," *Political Geography* 28 (2009): 164-173.
- 16) C.Karner, "National doxa, crises and ideological contestation in contemporary Austria," *Nationalism and Ethnic Politics* 11 (2016): 221-263.
- 17) G.Kuipers, "The rise and decline of national habitus: Dutch cycling culture and the shaping of national identity", *European Journal of Social Theory* 16 (2013): 17-35.
- 18) K.Surak, "Nation-work: a praxeology of making and maintaining nations", *European Journal of Sociology* 53 (2012): 171-204.

【参考書】

授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加 (30%)、期末レポート (70%)

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>比較ナショナリズム研究、国家論、社会学理論

<研究テーマ>ドイツにおける移民統合と排外主義

<主要研究業績>

「なぜ「イスラム化」に反対するのか ― ドイツにおける排外主義の論理と心理」樽本英樹編『外国人排外主義のダイナミズム』ミネルヴァ書房 (2018 年)
「グローバル化のなかの右翼ポピュリズム ― ドイツ AfD の事例を中心に―」『社会志林』第 65 巻第 2 号 (2018 年) : 95-115 頁
「国籍・シティズンシップ― ドイツとの比較から」高谷幸編『移民政策とは何か：移民の現実から考える』人文書院 (2019 年)

【Outline and objectives】

In this course we will study the recently emerging "everyday nationalism" approach to nationalism and consider its relevance for understanding contemporary nationalism.

理論社会学 4 (ベーシックインカム研究方法論の探求)

岡野内 正

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

当事者の視点と観察者の視点とを結びつける点で、社会理論史上の「天才的な奇襲攻撃」(ハーバーマス)と評されたマルクスの主著『資本論第 1 巻』を読書会形式で読み、その基本的な論理構成と内容とをつかむ。受講生は、資本主義社会のシステムの論理とともに、規範的な問題に関する古典的分析を身に付けることで、現代社会分析の基礎視角を得ることができるだろう。

【到達目標】

古典的名著として有名だが、ドイツ古典哲学の強烈な影響のもとにある独特な言い回しのためにきわめて読みにくい『資本論第 1 巻』を通読する。商品に含まれる労働の二重性、価値法則、物神性、労働過程と価値増殖過程、資本蓄積法則、領有法則の転回、本源的蓄積など、資本論で展開される独自の用語と概念の意味を原典に即して、正確に理解できるようになる。同時に、さまざまなマルクス解釈の問題性についても、原典に即して批判的に検討できる力を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

受講生全員でテキストを分担し、内容の要旨、疑問点、問題提起の論点などを報告していく、読書会型のゼミ形式でおこないます。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|----------------------|--|
| 第 1 回 | イントロダクション | マルクスと資本論研究の今日的意義に関する解説。今後の進め方についての打ち合わせ。 |
| 第 2 回 | 商品論 | 使用価値と価値の区別、商品に含まれる労働の二重性論など。 |
| 第 3 回 | 物神性論 | 価値形態論、商品の物神性論など。 |
| 第 4 回 | 貨幣論 | 交換過程論、貨幣の諸機能論。 |
| 第 5 回 | 貨幣の資本への転化論 | 資本の概念規定と労働過程と価値増殖過程との対比。 |
| 第 6 回 | 絶対的剰余価値論 | 絶対的剰余価値の論理と労働日制限の歴史分析。 |
| 第 7 回 | 相対的剰余価値論 | 相対的剰余価値の論理と技術革新の歴史分析。 |
| 第 8 回 | 労賃論 | 賃金の諸形態と賃金分析の基礎視角。 |
| 第 9 回 | 蓄積論 | 単純再生産と蓄積論。領有法則の転回論。 |
| 第 10 回 | 蓄積の一般法則論 | 資本蓄積の論理による歴史分析。 |
| 第 11 回 | 本源的蓄積論 | 本源的蓄積の論理と、歴史分析と規範理論。 |
| 第 12 回 | 資本論における国際的契機あるいは空間把握 | 世界市場論、国際価値論、賃金の国民的相違論、近代植民論。 |
| 第 13 回 | 資本論における階級と歴史把握 | 個人の人格と経済的・社会的役割による階級規定の区別。システム転換と階級闘争。 |
| 第 14 回 | 全体のまとめ | 資本論における当事者の視点と観察者の視点、生活世界とシステム。受講生の疑問、問題提起による総括討論。 |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

テキストの該当箇所については、最低限、毎回必ず読んでくる。報告担当者は、要旨と疑問点、問題提起の論点を含めたレジュメを用意する。

【テキスト (教科書)】

カール・マルクス著『資本論第 1 巻』。原著者がチェックしたドイツ語、フランス語、英語版のほか、日本語の翻訳も数種類あります。インターネットでも無料で閲覧できます。どの版でもいいのですが、日本語訳の場合は、なるべく新しい訳のほうが読みやすいのでおすすめです。

【参考書】

特に指定しません。多くの解説本がありますが、どれも一長一短あって、あまり正確でないものもあります。しかし、注意しながら用いると、それなりに役に立ちます。

【成績評価の方法と基準】

合計 100 点とすれば、自分の担当するテキストや参考文献に関するレジュメ作成および報告 (60 点)、授業中の討論における自分なりの疑問点の提示や、他者の論点に関する討議への貢献 (40 点)、という配分で、成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】

古典的な著作を読む機会がほしいという要望に応じて、テーマを設置しました。自分の研究を進めるうえで、時間を取られ過ぎるとつらいという要望に応じて、あまり細かい論点にとらわれずに、とにかく読破して概要をつかむことを主眼として進めます。また、受講生各自の研究テーマとの関連性についても注意喚起しながら進めます。

【その他の重要事項】

「実務経験のある教員による授業」に該当。長年にわたって国際開発・人権 NGO の活動に参加してきた、世界各地でのフィールドでの観察を交えて、授業での討論を展開する。

【社会理論、国際政治経済学、ベーシックインカム研究】

<専門領域>社会理論、国際政治経済学、中東研究、平和学、国際開発学。
<研究テーマ>グローバル・ベーシック・インカムの社会理論。社会理論における方法論的新部族主義、など。

<主要研究業績>

岡野内正『グローバルベーシックインカム構想の射程』法律文化社、2019年刊行予定。

【Outline and objectives】

Reading Karl Marx's "Capital Book 1", in order to grasp a classical analytical perspective of capitalist society.

SOC500E1 - 1204

理論社会学5（個人化理論の射程）

鈴木 宗徳

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

個人化とは、ウルリッヒ・ベックが提起した現代の社会変動を説明する理論枠組みである。すなわち、失業や離婚の増加等によって人生がリスクに満ちたものとなり、標準的なライフコースを歩む可能性が失われ、家族・階級・企業などの中間集団が諸個人に安定したアイデンティティを提供できなくなる。そのため、人々は個人の責任でリスクに対処せざるを得なくなり、自分のバイオグラフィとアイデンティティをくり返し設計し直すことを強いられるようになる、といった事態を指すものである。ベックが 80 年代のドイツ社会に見出したこうした変化が、90 年代以降の日本にも同様に観察できるかどうか、検討する。

【到達目標】

現代の社会学理論における主要な枠組みのひとつである「個人化論」について理解するとともに、90 年代以降の日本社会の変動を説明する上での適用可能性について考察を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

テキストのコピーを配布し、履修者によるレジュメ報告をもとに討論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|-----------------|-------------------|
| 第 1 回 | 個人化論の概要について | 導入 |
| 第 2 回 | テキストの講読と討論 (1) | 個人化論を理解する |
| 第 3 回 | テキストの講読と討論 (2) | 個人化論を理解する |
| 第 4 回 | テキストの講読と討論 (3) | 個人化論を理解する |
| 第 5 回 | テキストの講読と討論 (4) | 個人化論を理解する |
| 第 6 回 | テキストの講読と討論 (5) | 個人化論を理解する |
| 第 7 回 | テキストの講読と討論 (6) | 個人化論を理解する |
| 第 8 回 | テキストの講読と討論 (7) | 個人化論の適用可能性について考える |
| 第 9 回 | テキストの講読と討論 (8) | 個人化論の適用可能性について考える |
| 第 10 回 | テキストの講読と討論 (9) | 個人化論の適用可能性について考える |
| 第 11 回 | テキストの講読と討論 (10) | 個人化論の適用可能性について考える |
| 第 12 回 | テキストの講読と討論 (11) | 個人化論の適用可能性について考える |
| 第 13 回 | テキストの講読と討論 (12) | 個人化論の適用可能性について考える |
| 第 14 回 | 総括討論 | 授業全体をふり返る |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの授業内で講読できなかった部分について自主的に読書を進めること。

【テキスト（教科書）】

受講者と相談のうえ、以下に挙げるテキストのうち複数冊について、その一部を読む。未邦訳の重要文献を優先的にとり上げたい。

ベック『危険社会』、Beck & Beck-Gernsheim『Individualization』、セネット『それでも新資本主義についていくか』、セネット『不安定経済/漂流する個人』、パウマン『リキッド・モダニティ』、パウマン『リキッド・ライフ』、パウマン『個人化社会』、カステル『社会の安全と不安全』、カステル『社会喪失の時代』、ギデンズ『近代とはいかなる時代か』、ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ』、ギデンズ『親密性の変容』、ファーロン『若者と社会変容』、Cote『Arrested Adulthood』、Elliott『The New Individualism』

【参考書】

上記のテキストのうち授業で扱わなかったもの。

【成績評価の方法と基準】

授業中に課するレジュメの内容を中心に（90 %）、参加の度合いや貢献度を加味して（10 %）判断する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会学理論

<研究テーマ>現代における批判的社会理論の課題

<主要研究業績>

『危機に対峙する思考』（共編著、粹出版社、2016）

『個人化するリスクと社会——ベック理論と現代日本』（編著、勁草書房、2015）

『（私）をひらく社会学——若者のための社会学入門』（共著、大月書店、2014）

『リスク化する日本社会——ウルリッヒ・ベックとの対話』（共編、岩波書店、2011）

【Outline and objectives】

This course helps students to verify the applicability of Ulrich Beck's concept of individualization to the social changes in contemporary Japan.

SOC500E1 - 1300

理論社会学基礎 1

徳安 彰

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「20 世紀前半までの古典的社会学（classic sociology）の歴史」

社会学という学問分野はどのような時代背景と社会背景のなかで生まれてきたか、社会学の問題意識はどのようなものであったか、社会学は対象を記述し、分析し、説明するためにどのような理論と方法を展開してきたか、といった基本的な視点から、主要な古典的社会学者の学説を取り上げて考察する。

【到達目標】

主要な古典的社会学者の学説について文献をとおして理解し、その問題意識、主要概念、理論構成等について説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

古典的社会学者として、コント、マルクス、スペンサー、E. デュルケム、M. ヴェーバー、G. ジンメル、G.H. ミードらを取り上げて、それぞれ2～3回の授業で学説の概要を説明する。授業の素材として、各社会学者の主要テキストの抜粋を配布するので、事前に読んで上で授業に臨むこと。原典に即して学説を学ぶことによって、社会学の入門書のレベルを超えた理解に到達することを目標とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------------------|---|
| 1 | 社会学成立の歴史的背景 | ヨーロッパ近代の歴史を概観しつつ、社会学が学問として成立した時代背景を理解する。 |
| 2 | コント・スペンサーの進歩主義と社会有機体説 | コントの進歩主義、スペンサーの社会進化論、および両者に見られる社会有機体説を理解する。 |
| 3 | マルクスの産業社会と資本主義分析 | マルクスの史的唯物論、階級論、上部構造・下部構造論を理解する。 |
| 4 | マルクスの労働論と疎外論 | マルクスの疎外論、交換価値／使用価値、労働価値説を理解する。 |
| 5 | ヴェーバーの合理化論 | ヴェーバーの合理化論とそれに基づく近代西洋の特徴づけを全体として理解する。 |
| 6 | ヴェーバーの宗教論 | ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を中心に、宗教との関連で社会の合理化を理解する。 |
| 7 | ヴェーバーの官僚制論 | ヴェーバーの『支配の社会学』『支配の諸類型』を中心に、近代官僚制との関連で社会の合理化を理解する。 |
| 8 | デュルケムの分業論 | デュルケムの『社会分業論』を中心に、社会の分業形態と連帯のあり方について理解する。 |
| 9 | デュルケムの自殺論 | デュルケムの『自殺論』を中心に、自殺の諸類型をとおして近代社会の統合のあり方について理解する。 |
| 10 | デュルケムの宗教論 | デュルケムの『宗教生活の原初形態』を中心に、社会における宗教の機能について理解する。 |
| 11 | ジンメルの社会分化論 | ジンメルの『社会分化論』を中心に、近代社会における社会分化の動向について理解する。 |
| 12 | ジンメルの社会圏論 | ジンメルの『社会学』を中心に、形式社会学の考え方と社会圏の概念を理解する。 |
| 13 | ジンメルの宗教論 | ジンメルの『社会学』を中心に、社会における宗教の機能について理解する。 |
| 14 | ミードの自我論 | ミードの『精神・自我・社会』を中心に、近代社会における自我の形成のされ方を理解する。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業は、具体的な社会学者の著作を前提にして議論を行うので、事前に原典を読んで内容を把握しておく必要がある。各回に必要な原典（抜粋）については、授業支援システム等を用いて資料を配布するので、各自で事前に入手して読んでおくこと。とくに資料で理解の行き届かない部分については、概説書や社会学辞典によって理解を深めておくこと。さらに学修を深めるためには、抜粋だけでなく原典を通読するのが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。
各回に使用するテキストについては、授業支援システムをとおして配布する。

【参考書】

ドン・マーチンデール『現代社会学の系譜』未來社
ランドール・コリンズ『ランドール・コリンズが語る社会学の歴史』有斐閣
那須壽（編）『クロニクル社会学』有斐閣
新陸人（編）『新しい社会学の歩み』有斐閣

【成績評価の方法と基準】

期末試験（70%）、授業への積極的貢献（30%）。期末試験は論述形式で行い、授業で論じた主要な学説の理解、論述の論理性の2つの基準で評価する。授業への積極的貢献は、リアクション・ペーパーの内容、授業での質疑や討論への参加によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の皆さんからの質問やコメントを可能な限りフィードバックできる講義を心がけたい。

【その他の重要事項】

社会学史は、具体的な社会学者の著作を前提にして議論を行うので、翻訳でよいからできるだけ原典を読んで理解を深めることが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会システム理論
<研究テーマ>グローバル化の中の社会システム
<主要研究業績>学術研究データベースを参照

【Outline and objectives】

We study the history of sociology, especially so-called "classic sociology" developed from 19th century to early 20th century. We focus especially on the social background of that time to understand the major sociological theories.

SOC500E1 - 1301

理論社会学基礎2

徳安 彰

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、社会学の歴史の中で、とくに 20 世紀半ばから後半の主要な諸理論を学ぶ。目的は、諸理論の学修を通して「社会学は後期近代をどのように理論化してきたか」を知ることである。

【到達目標】

この授業の到達目標は、主要な現代的社会学者の理論の概要や主要概念を、原典を通して理解できるようになり、さらに「社会学は後期近代をどのように理論化してきたか」という観点から、自分で諸理論の意義を説明できるようになることである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

この授業では、受講者は毎回、担当教員の作成した資料（著作を抜粋したりリーディングス）を事前に読み込んだ上で授業に臨み、授業での説明、質疑、討論を通して理解を深めるという方法をとる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|----------------------|------------------------------------|
| 第 1 回 | 後期（高度）近代の歴史と社会学の問題意識 | 西洋の後期近代の歴史を概観しつつ、社会学の基本的な問題意識を理解する |
| 第 2 回 | 後期（高度）近代の主要な社会学者たち | 20 世紀半ばから後半の主要な社会学者や学派を知る |
| 第 3 回 | パーソンズ (1) | 行為システム、ダブル・コンティンジェンシー、パターン変数 |
| 第 4 回 | パーソンズ (2) | AGIL 図式、社会進化 |
| 第 5 回 | ミード | I と me、一般化された他者、役割 |
| 第 6 回 | シュッツ | 日常生活世界、間主観性、多元的現実 |
| 第 7 回 | バーガー／ルックマン | 人間と社会の弁証法的関係、社会的世界の複数化、聖なる天蓋 |
| 第 8 回 | ゴッフマン | ドラマトウルギー、自己呈示、印象操作 |
| 第 9 回 | ガーフィンケル | 背後期待、違背実験、判断力喪失者 |
| 第 10 回 | ルーマン (1) | ダブル・コンティンジェンシー、相互浸透、オートボイエーシス |
| 第 11 回 | ルーマン (2) | 分化の諸類型、機能分化、包摂と排除 |
| 第 12 回 | ハーバーマス | コミュニケーションの行為、生活世界とシステム、生活世界の植民地化 |
| 第 13 回 | フーコー | 規律化、主体、生権力 |
| 第 14 回 | まとめ | 扱った主要な社会学者の理論の共通の問題意識をふり返る |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業で扱う原典（抜粋）は、授業支援システム等を用いて資料を配付するので、各自で事前に入手して読んでおく。理解の行き届かない部分については、概説書や社会学辞典によって理解を深めておく。さらに学修を深めるためには、抜粋だけでなく原典を通読するのが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。各回に使用するテキストについては、授業支援システムをとおして配布する。

【参考書】

ランドール・コリンズ『ランドール・コリンズが語る社会学の歴史』有斐閣
那須壽（編）『クロニクル社会学』有斐閣
新陸人（編）『社会学のあゆみ パート2』有斐閣
新陸人（編）『新しい社会学のあゆみ』有斐閣

【成績評価の方法と基準】

期末試験（70%）、授業への積極的貢献（30%）。期末試験は論述形式で行い、授業で論じた主要な学説の理解、論述の論理性の2つの基準で評価する。授業への積極的貢献は、リアクション・ペーパーの内容、授業での質疑や討論への参加によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の皆さんからの質問やコメントを可能な限りフィードバックできる講義を心がけたい。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムを通して資料を配付する。

【その他の重要事項】

この授業は、受講生の予習を前提に講義を進める。また授業内でもリアクション・ペーパーでも、積極的な質問やコメントを歓迎する。受講生の積極的な参加を求める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞社会システム理論
 ＜研究テーマ＞グローバル化の中の社会システム
 ＜主要研究業績＞学術研究データベースを参照

【Outline and objectives】

We study the history of sociology, especially so-called "modern and late modern sociology" developed since the middle of 20th century. We focus especially on the social background of that time to understand the major sociological theories.

SOC500E1 - 1205

社会学特殊研究 1 (国際移住の社会学)

田嶋 淳子

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

グローバル化の中での国際移住に関わる諸問題を考える

【到達目標】

国際移住の現状を把握し、その問題について、日本社会あるいは東アジア諸地域を対象に社会調査を実施することが可能となること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

講義を以下の項目について各3～4回程度で学んでいく。

- ① 国際移住研究の現状と課題
- ② 国際移住研究に関する概念の検討
- ③ 国際移住研究の方法
- ④ 日本における国際移住の現状と課題

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|---------------------|---|
| 第1講 | 国際移住研究の現在 (1) | 本講義の進め方と取り上げる文献や資料についての説明。 |
| 第2講 | 国際移住研究の現在 (2) | Castles & Miller, 2009 を読み、1990年代までの国際移住研究の現状を学ぶ。 |
| 第3講 | 国際移住研究の現在 (3) | Castles らの研究から 2000 年代以降の研究の展開を学ぶ。 |
| 第4講 | 国際移住研究の課題 | 国際移住研究の現状を踏まえ、その後の理論的展開について、いくつかの論文を参照する。 |
| 第5講 | 国際移住研究における概念の検討 (1) | アメリカにおける国際移住研究の中の transnationalism (Smith & Guarnizo, 1998) |
| 第6講 | 国際移住研究における概念の検討 (2) | ヨーロッパにおける国際移住研究の中の transnationalism, (Faist, 2004) |
| 第7講 | 国際移住研究における概念の検討 (3) | Diaspora 概念の検討 |
| 第8講 | 国際移住研究の方法 (1) | 事例研究 1: 日本における中国系移住者 (田嶋, 2010) |
| 第9講 | 国際移住研究の方法 (2) | 事例研究 2: 日本における韓国系移住者 (田嶋, 2010) |
| 第10講 | 国際移住研究の方法 (3) | 事例研究 3: 東アジアにおける中国系移住者 (田嶋, 2010) |
| 第11講 | 日本における国際移住研究の現状 (1) | フィールドワーク (実際にフィールドに出て、課題をこなす) |
| 第12講 | 日本における国際移住研究の現状 (2) | これまでに学んだことと、フィールドでの知見をあわせて、各自がレポートを作成し、報告する。 |
| 第13講 | 国際移住研究 (調査研究事例) | アメリカにおける中国系移住者研究の現状 (Zhou, 2009) |
| 第14講 | 国際移住研究 (調査研究事例) | 韓国系移住者研究の現状 (高, 2007) |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

次回までに指定された文献の講読と関連論文の講読

【テキスト (教科書)】

1. カースルス, S. & ミラー, M. J. 2011 『国際移民の時代 (第4版)』名古屋大学出版会。

1. 田嶋淳子, 2010 『国際移住の社会学』明石書店。その他は講義の中で指示する。

【参考書】

1. Castles, S. & M. J. Miller, 2009 *The Age of Migration* (4th edition), Palgrave Macmillan, London.

2. M. P. Smith & L. E. Guarnizo (eds.), 1998, *Transnationalism From Below (Comparative Urban & Community Research Vol. 6)* New Brunswick, New Jersey, Transaction Publishers.

3. T. Faist ed. 2004 *Transnational Social Spaces: Agents, Networks and Institutions*, Aldershot, Ashgate.

4. Zhou, M. 2009 *The Contemporary Chinese American*, Temple University Press.

5. 高全恵星監修・柏崎千佳子訳, 2007 『ディアスポラとしてのコリアン』新幹社。

6. 栗田和明編 2018 『移民と移住』昭和堂。

【成績評価の方法と基準】

ゼミでの発表 (40%) とコメント 20%、レポート課題 40%

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 国際社会学、移住・エスニシティ研究、東アジア地域研究
 <研究テーマ> グローバル化と社会変容、中国系移住者の比較社会的学的研究
 <主要研究業績>

1. 『国際移住の社会学』明石書店、2010年。
2. 「移住と境界をめぐる一考察—受け入れ社会の比較の視点から—」森千香子・エレン・ルバイ編『国境管理のパラドクス』勁草書房、2014年。
3. 「中国系ニューカマーズがもたらす地域社会の変容」栗田和明編『移民と移住』昭和堂、2018年。
4. 「中国における『海外高度人材』受け入れ政策をめぐる諸問題」『社会志林』第65巻第2号、77 - 94ページ。

【Outline and objectives】

Students will ponder issues relating to transnational migration in the age of globalization.

SOC500E1 - 1205

社会学特殊研究 1 (移民政策研究)

上林 千恵子

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

日本の外国人労働と移民政策研究

2018年12月の入管法改正は話題を呼んだ。日本もいよいよ低熟練の外国人労働者を積極的に受け入れる政策に踏み切ったからだ。日本の外国人労働者の受け入れ政策について、実態と今後の課題、他の受け入れ先進国との比較を検討したい。

【到達目標】

外国人労働者受け入れの問題は、労働市場の分割、移民の底辺労働市場への滞留と受け入れ国労働者への影響、定住化問題、定住者の同化問題、子供の教育問題など、受け入れ国に共通の社会問題を発生させている。日本の外国人受け入れ実態を、低熟練労働者と高度人材の2つの階層を例としながら検討し、移民政策にかかわる典型的問題を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

論文を輪読することおよび期末レポートを提出すること

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|--------------------------------|-------------------------|
| 第1回 | 自己紹介と授業の説明 移民政策の定義 | 移民政策の特徴を理解 |
| 第2回 | 移民政策の成否を判断する基準 | カースルズの論文をもとに講義 |
| 第3回 | 外国人労働者の労働市場 テキスト第1章 | 日本の外国人労働市場のモデルを理解 |
| 第4回 | 日本の移民政策の歴史① テキスト第4章 | 日本の外国人労働者受け入れの歴史 |
| 第5回 | 技能実習制度のジレンマ テキスト第6章 | 単純労働者受け入れの問題 |
| 第6回 | 労働問題としての外国人受け入れ テキスト第7章、第5章 | 労働者の権利と労働問題の発生 |
| 第7回 | 日系ブラジル人の労働市場 テキスト第3章 | 派遣労働者の実態 |
| 第8回 | 中国人技能実習生 テキスト第6章 | 送り出し側中国との関連 |
| 第9回 | 移住女性の職業の様相 | 介護士を中心として |
| 第10回 | 送り出し国のニーズ テキスト第9章 | 送り出し政策の歴史 |
| 第11回 | 日本の高度人材受け入れ政策 | 外国人ホワイトカラーの受け入れ政策の展開 |
| 第12回 | 高度人材受け入れの国際比較 | 選別的移民政策の内容 |
| 第13回 | 留学生政策の変遷 | 世界の留学生政策の変遷を見て、日本の特徴を理解 |
| 第14回 | レポートの発表 | 各自のレポートの発表と討論 |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

授業で取り上げる論文を読む

期末レポートを作成

【テキスト (教科書)】

上林千恵子 (2015) 『外国人労働者受け入れと日本社会』 東京大学出版会

【参考書】

カースルズ、ミラー (2011) 『国際移民の時代第4版』 名古屋大学出版会
 小井土彰宏編 (2017) 『移民受入の国際社会学：選別メカニズムの比較分析』 名古屋大学出版会
 宮島喬他編著 (2015) 『国際社会学』 有斐閣

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度と期末レポートの提出

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

産業社会学

【Outline and objectives】

日本は地政学上の制約から、外国人労働者をベトナムなどの東南アジア諸国や中国か受け入れている。一方、同アジア諸国でも、韓国、台湾、シンガポールは日本と同じように外国人労働者受け入れ国でもある。こうしたアジア圏での国際労働移動の実情を踏まえ、日本の外国人労働者受け入れ政策について、2018年に成立した新入管法による在留資格「特定技能」との新設を前提にしながら学ぶ。

SOC500E1 - 1206

社会学特殊研究2（若者政策の現状と課題）

樋口 明彦

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1990年代半ば以降、雇用の不安定化は、若者の社会的地位に大きな影響を及ぼすことになった。そのような変化に応じて、日本においても、教育・雇用・社会保障を視野に入れた若者政策の整備が本格的に進展するようになる。本科目では、日本語文献を丹念に読みながら、若者政策の現状と課題を検討する。

【到達目標】

日本とヨーロッパにおける若者政策について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

教科書から6本のテキストを選び、日本語文献の講読を行う。適宜、テキストに関する補足説明、およびディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|--------------------|------------------|
| 1 | イントロダクション | 若者政策について |
| 2 | 『就労支援を問い直す』① | 第1論文の講読 |
| 3 | 同上② | 第1論文についてディスカッション |
| 4 | 同上③ | 第2論文の講読 |
| 5 | 同上④ | 第2論文についてディスカッション |
| 6 | 『すべての若者が生きられる未来を』① | 第1論文の講読 |
| 7 | 同上② | 第1論文についてディスカッション |
| 8 | 同上③ | 第2論文の講読 |
| 9 | 同上④ | 第2論文についてディスカッション |
| 10 | 『危機のなかの若者たち』① | 第1論文の講読 |
| 11 | 同上② | 第1論文についてディスカッション |
| 12 | 同上③ | 第2論文の講読 |
| 13 | 同上④ | 第2論文についてディスカッション |
| 14 | まとめ | 若者政策の課題 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本語文献を事前に読む。

【テキスト（教科書）】

筒井美紀・櫻井純理・本田由紀編、2014、『就労支援を問い直す』勁草書房。
宮本みち子編、2015、『すべての若者が生きられる未来を』岩波書店。
乾彰夫・本田由紀・中村高康編、2017、『危機のなかの若者たち』東京大学出版会。

【参考書】

なし

【成績評価の方法と基準】

- ①平常点（50%）
- ②日本語文献講読の貢献度（50%）

【学生の意見等からの気づき】

なし。

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/20/0001979/profile.html>

【Outline and objectives】

The lecture on youth policy

SOC500E1 - 1206

社会学特殊研究2（批判的社会政策論）

堅田 香緒里

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「批判的社会政策論」(Critical Social Policy) と呼ばれる潮流が何を問い直そうとしていたのかを学ぶ。批判的社会政策論は、戦後福祉国家体制が、実際には差異や分断に基づく構造的な不平等の維持・強化に寄与していることを明らかにしてきた。マルクス主義のみならず、フェミニズムやアンチ・レイシズム（反人種差別主義）、エコロジズム、障害学等の批判的視座から、福祉国家体制を改めて問い直していく。

【到達目標】

「批判的社会政策論」の基本的な内容を理解すること。また、授業を通して得たさまざまな「批判的視座」を各々の研究においても活かせるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式で行う（指定されたテキストの輪読と、各自の研究との連結）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|---------------|---|
| 第1回 | イントロダクション | 授業の概要説明 |
| 第2回 | 批判的社会政策論とは | Critical Social Policy の基本的テキストの紹介と、輪読担当論文の決定 |
| 第3回 | 各自の研究報告(1) | 各自の研究内容に関する報告 |
| 第4回 | 各自の研究報告(2) | 各自の研究内容に関する相互批評 |
| 第5回 | 入門的テキストの輪読(1) | 『社会政策の視点』1~4章 |
| 第6回 | 入門的テキストの輪読(2) | 『社会政策の視点』5~8章 |
| 第7回 | 入門的テキストの輪読(3) | 『社会政策の視点』9章~12章 |
| 第8回 | 基本的テキストの輪読(1) | 『Social Policy』Introduction |
| 第9回 | 基本的テキストの輪読(2) | 『Social Policy』Ch.1 |
| 第10回 | 基本的テキストの輪読(3) | 『Social Policy』Ch.2 |
| 第11回 | 基本的テキストの輪読(4) | 『Social Policy』Ch.3 |
| 第12回 | 基本的テキストの輪読(5) | 『Social Policy』Ch.4 |
| 第13回 | 基本的テキストの輪読(6) | 『Social Policy』Ch.5 |
| 第14回 | 受講者のレポート相互批評 | レポートの相互批評 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業で用いるテキストの講読と読書メモ・レジュメの作成／そこで得られた視座を各自の研究内容と連結させてみる作業

【テキスト（教科書）】

洋一・堅田香緒里・金子充・西村直貴・畑本裕介（2011）『社会政策の視点—現代社会と福祉を考える』法律文化社

Williams, Fiona (1989) "Social Policy: a Critical Introduction" Polity Press, Cambridge.

【参考書】

必要に応じて、適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

授業への取り組み（輪読の報告内容・積極的発言等）50%、期末レポート 50%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会政策、福祉社会学

<研究テーマ>貧困/対貧困政策/ジェンダー

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students acquire an understanding of the basic theory of "Critical Social Policy".

SOC500E1 - 1207

社会学特殊研究3（変化／不変化の社会学）

堀川 三郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会学はその創始から、社会の変化を「A から B へ」「○○化」という図式で記述してきた。例えば「ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ」（テニエス）や「脱呪術化」（ウェーバー）が有名である。こうした図式的理解の根幹は、「変化の把握」である。「変化」を「変動」と言い換えてもよいが、いずれにせよここで重要なことは、こうした把握方法では変化することは当然のことと見なされ、それがどこへ向かうのかその見通しを立てることこそが主要な関心であった、ということだ。

しかし、この授業では変化することを自明視せず、「変化しないこと」へと視野を拡大していこうと思う。換言すれば、社会学の知的伝統に則って「変化をどのようにとらえるか」を検討するのみならず、その変化の仕方や変化の制御過程、さらには「変化しないもの」をも把握しようと試みる。具体的には、いくつかの文献を「変化／不変化」という観点から精読して議論の土台を共有してから、受講者それぞれの研究テーマ・素材を持ち寄り、変化／不変化をいかに語りうるのか、方法的拡張を意識しながら検討を加えていくことにする。人数にもよるが、持ち寄る素材は、受講者の修士論文、博士論文、学会報告、投稿論文などの草稿で構わない。それらの完成・洗練化に役立つような授業にしていくつもりである。担当教員の専門から、都市や地域、環境に関心を寄せる院生の参加を期待しているが、それ以外の領域でも受講を歓迎する。自らの論文完成のために、本授業をおおいに「利用」して欲しい。

【到達目標】

自らの研究テーマを、「A から B へ」「○○化」という図式で記述し、具体的なデータに基づいて議論を展開できる能力の涵養を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

テキストの講読、院生による研究報告、全員での討論、などで構成する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|--------------------|-----------------------|
| 第1回 | イントロダクション | 授業への導入 |
| 第2回 | 文献講読 [1] | テーマ探究のための文献講読 |
| 第3回 | 文献講読 [2] | テーマ探究のための文献講読 |
| 第4回 | 文献講読 [3] | テーマ探究のための文献講読 |
| 第5回 | 文献講読 [4] | テーマ探究のための文献講読 |
| 第6回 | 文献講読 [5] | テーマ探究のための文献講読 |
| 第7回 | 文献講読 [6] | テーマ探究のための文献講読 |
| 第8回 | 文献講読 [7] | テーマ探究のための文献講読 |
| 第9回 | 受講者のテーマ報告および討論 [1] | 受講者の報告を受けて、研究深化のための討論 |
| 第10回 | 受講者のテーマ報告および討論 [2] | 受講者の報告を受けて、研究深化のための討論 |
| 第11回 | 受講者のテーマ報告および討論 [3] | 受講者の報告を受けて、研究深化のための討論 |
| 第12回 | 受講者のテーマ報告および討論 [4] | 受講者の報告を受けて、研究深化のための討論 |
| 第13回 | 受講者のテーマ報告および討論 [5] | 受講者の報告を受けて、研究深化のための討論 |
| 第14回 | まとめ | まとめと総括討論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に文献を読み、レジュメを作成すること

【テキスト（教科書）】

履修者と相談のうえ、決定する。

【参考書】

講読文献は、受講者と相談したうえで決定するが、下記は候補文献の一部である。これに縛られず、履修者の関心領域とすり合わせながらフレキシブルに対応する予定である：

- [1] 堀川三郎 (2018) 『町並み保存運動の論理と帰結：小樽運河問題の社会学的分析』東京大学出版会。
- [2] 森久聡 (2016) 『<瀬の浦>の歴史保存とまちづくり：環境と記憶のローカル・ポリティクス』新曜社。
- [3] Page, Max (2016) *Why Preservation Matters* (Why X Matters Series), New Heaven, CT: Yale University Press.
- [4] 水村美苗 ([2008] 2015) 『増補 日本語が亡びるとき：英語の世紀の中で』（ちくま文庫み-25-4）筑摩書房。
- [5] 藤田弘夫 (2003) 『都市と文明の比較社会学：環境・リスク・公共性』東京大学出版会。

- [6] Holleran, Michael (1998) *Boston's "Changeful Times": Origins of Preservation and Planning in America* (Creating the North American Landscape). Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.
 [7] Barthel, Diane (1996) *Historic Preservation: Collective Memory and Historical Identity*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.

【成績評価の方法と基準】

討論での貢献度で評価する（100％）。人数によってはレポートを課すが、その場合の成績評価は、討論への貢献 50％、レポート評価 50％とする。

【学生の意見等からの気づき】

定期的に院生の意見を聞きながら、運営する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>環境社会学, 都市社会学
 <研究テーマ>歴史的環境保存の社会学, 日米比較社会論
 <主要研究業績>『町並み保存運動の論理と帰結：小樽運河問題の社会学的分析』（東京大学出版会, 2018年）など

【Outline and objectives】

Since its founding, sociology has described social change through formulaic expressions such as “from A to B” or in terms of “-cations” and “-zations”. Ferdinand Tönnies’ “from Gemeinschaft to Gesellschaft” and Max Weber’s “Disenchantment (Entzauberung)” are two well-known examples. At the heart of this formulaic understanding is understanding change. The words “change” and “transformation” may be interchangeable, but in any case, what is important here is that this method of understanding considers change as a natural process, and sociology’s major concern was to create insight as to where that change might lead.

In this course, however, we do not accept change as inevitable and will expand our horizons to that of “unchanging”, or not changing. To put it differently, not only do we examine how change should be interpreted in accordance with the intellectual traditions of sociology, but we also attempt to understand the ways in which changes occur, the control processes involved, and finally, what we refer to as “un/change.” Specifically, once we conduct a close reading of the literature from the perspective of un/change for a shared foundation for argumentation, students will bring materials for their research topics to class, where we will investigate how they can be discussed in terms of un/change, ever conscious of methodological expansion during our investigations. While it depends on the number of students, materials for research can be drafts of students’ master’s theses, doctoral dissertations, academic conference presentations, or articles for publishing. This course is intended to help students complete and refine their work. The instructor’s expertise lies in cities, communities, and the environment and expects graduate students with similar interests to join but welcomes students from other areas as well. The instructor wishes that students “use” this class to complete their theses and dissertations.

社会学特殊研究3（家族社会学）

菊澤 佐江子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

今年度は、家族をめぐる諸現象に関連する重要な社会的文脈の一つである福祉国家のあり方に着目し、「福祉レジーム」(Esping-Andersen)の視点から、近年の家族をめぐる諸現象と福祉国家のあり方との関連を検討する。

【到達目標】

「福祉レジーム」という概念を理解する
 近年の家族をめぐる諸現象と福祉国家のあり方との関連について考察を深める

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

テキスト（受講者との相談により変更の可能性あり）と関連文献（受講者との相談により後日決定）の輪読を行う。毎回、担当者が指定の文献等についてレジュメを用いて報告を行い、全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-----------|-------------|
| 第1回 | イントロダクション | 授業の概要説明 |
| 第2回 | 講読1 | 福祉レジームとは |
| 第3回 | 講読2 | テキストの講読（序章） |
| 第4回 | 講読3 | テキストの講読（1章） |
| 第5回 | 講読4 | テキストの講読（2章） |
| 第6回 | 講読5 | テキストの講読（3章） |
| 第7回 | 講読6 | テキストの講読（4章） |
| 第8回 | 講読7 | テキストの講読（5章） |
| 第9回 | 講読8 | 関連文献の講読（1） |
| 第10回 | 講読9 | 関連文献の講読（2） |
| 第11回 | 講読10 | 関連文献の講読（3） |
| 第12回 | 講読11 | 関連文献の講読（4） |
| 第13回 | 講読12 | 関連文献の講読（5） |
| 第14回 | レポート提出 | レポート内容の検討 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者は毎回必ず、事前に指定された文献を読み、読書メモを作成したうえで参加する。報告者は担当箇所について事前に論点を整理し、レジュメを準備して報告にのぞむ。

【テキスト（教科書）】

イエスタ・エスピン＝アンデルセン, 2011, 『平等と効率の福祉革命』（岩波書店）および関連文献

【参考書】

適宜指示する

【成績評価の方法と基準】

授業への参加（報告、議論への貢献等）50％、期末レポート 50％

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【その他の重要事項】

初回授業時に、各回の報告担当者等を決めるため、履修予定者は、必ず初回授業に出席すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>家族社会学, 計量社会学

【Outline and objectives】

The aim of this seminar is to help students to understand contemporary family issues and how they are related to welfare regime types.

SOC500E1 - 1208

社会学特殊研究 4 (歴史社会学)

鈴木 智道

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

20 世紀後半を代表する思想家ミシェル・フーコーによる権力論の転回とその射程をテーマに、前期 (1960 年代) から中期 (1970 年代) へと至るフーコーの思考の道筋と概念的な転変を追跡しながら、フーコーが「権力とは何か」という問いにいかに向き合おうとしていたのかを考えていく。

【到達目標】

フーコーの権力論について理解を深め、その理解を自身の研究に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

『狂気の歴史』(1961) から『監獄の誕生』(1975)、さらには『知への意志』(1976) へと至るなかで、「知」の考古学から「権力」の系譜学へとフーコーの思考がいかにして転変し、彫琢されていったのかを、コレージュ・ド・フランスでの講義の精読を通して探索していく。今年度は、18 世紀以降の精神医学の歴史を扱った 1973-74 年度の講義『精神医学の権力』の、いわば続編にあたる 1974-75 年度の講義『異常者たち』を読む。「異常者」というカテゴリーが、近代西欧においていかなる知と権力の作用のなかで立ち現れることになったのかを検討していくと同時に、「規律権力」から「生権力」へと至るフーコーの着想の淵源について読解していく。

受講者には、事前に割り振られた担当部分について、レジュメの作成と授業内での報告が求められる。担当者による報告の後、当該内容について参加者全員で議論をしていく。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|--------------|--------------------|
| 第 1 回 | イントロダクション | 概要説明・スケジュール確認 |
| 第 2 回 | フーコーを読む前に | 『性の歴史 1・知への意志』を中心に |
| 第 3 回 | 『異常者たち』第 1 講 | 1975 年 1 月 8 日講義 |
| 第 4 回 | 第 2 講 | 1975 年 1 月 15 日講義 |
| 第 5 回 | 第 3 講 | 1975 年 1 月 22 日講義 |
| 第 6 回 | 第 4 講 | 1975 年 1 月 29 日講義 |
| 第 7 回 | 第 5 講 | 1975 年 2 月 5 日講義 |
| 第 8 回 | 第 6 講 | 1975 年 2 月 12 日講義 |
| 第 9 回 | 第 7 講 | 1975 年 2 月 19 日講義 |
| 第 10 回 | 第 8 講 | 1975 年 2 月 26 日講義 |
| 第 11 回 | 第 9 講 | 1975 年 3 月 5 日講義 |
| 第 12 回 | 第 10 講 | 1975 年 3 月 12 日講義 |
| 第 13 回 | 第 11 講 | 1975 年 3 月 19 日講義 |
| 第 14 回 | まとめ | フーコー思想のアクチュアリティ |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

指定文献を事前に読了した上で、授業にのぞむこと。報告者は、指定文献についての要約とコメント・問題提起をおこなうべく、レジュメの準備をすること。

【テキスト (教科書)】

『ミシェル・フーコー講義集成 5・異常者たち：コレージュ・ド・フランス講義 1974-75 年度』筑摩書房、2002 年。

【参考書】

詳細については開講後に指示する。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度 (50%) と報告の水準 (50%) により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史社会学、教育社会学
<研究テーマ> 家族の歴史政治学的分析、歴史の物語論
<主要研究業績>

『職業と選抜の歴史社会学』(共著、世織書房)、『(近代教育)の社会理論』(共著、勁草書房)、『近代の親子問題』(日本図書センター)

【Outline and objectives】

The main aim of this seminar is to read M. Foucault's 1974-75 lectures at the Collège de France and to discuss how the relationship between power and knowledge was constructed in Western Europe, focusing on the concept of "abnormality".

SOC500E1 - 1208

社会学特殊研究 4 (社会運動としての成人教育運動)

荒井 容子

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

成人教育政策とは一線を画す、成人教育運動は社会運動としての性格をもって各国で発展し、国際機関の発達と並行して、国際的運動としても発展してきた。その過程は、国内、国際双方で、権力による政策展開と緊張関係をもって展開されてきた。また同じ成人教育運動として、国内と国際双方の関係のあり方も模索されてきた。これらの具体的な歴史を、事例をもとに概観しながら、それらの関係について、分析していく。

【到達目標】

この講義では、成人教育の運動が本質的にもつその社会運動としての性格を理解し、そのうえで、成人教育運動の国内及び国際的な展開と、成人教育政策の展開との関係、社会運動の展開との関係について考え、また、今後の成人教育運動のあり方を考える力を養うことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回 講義内容をもとに、議論をしていく。事前に資料を配布して検討してきてもらい、議論をする場合もある。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|-----------------------------|---|
| 第 1 回 | 成人教育運動をどうとらえるか (ガイダンス) | 学習運動・成人教育運動と社会運動との関係 |
| 第 2 回 | 成人教育運動の国内展開と国際的展開 (1) | WEA (英国労働者教育協会) の諸外国への影響 |
| 第 3 回 | 成人教育運動の国内展開と国際的展開 (2) | 成人教育「世界組織」の結成と世界大会 |
| 第 4 回 | 国際機関を通じた成人教育運動のはじまり (1) | ユネスコ成人教育会議の開催と展開 |
| 第 5 回 | 国際機関を通じた成人教育運動のはじまり (2) | ユネスコ教育研究所の発足と展開 - その後のユネスコ生涯学習研究所としての展開 |
| 第 6 回 | 国際機関から独立した国際的成人教育運動のはじまり | 国際成人教育協議会の発足 |
| 第 7 回 | 社会運動と国際政策の展開 (1) | 1970~80 年代の展開 |
| 第 8 回 | 社会運動と国際政策の展開 (2) | 1990 年代以降の展開 |
| 第 9 回 | 成人教育運動と社会運動の国際的展開における関係 (1) | 1970~80 年代の展開 |
| 第 10 回 | 成人教育運動と社会運動の国際的展開における関係 (2) | 1990 年代以降の展開 |
| 第 11 回 | 成人教育運動の国際的展開の意味 (1) | 成人教育の国際的政策との関係 |
| 第 12 回 | 成人教育運動の国際的展開の意味 (2) | 成人教育の各国における政策との関係 |
| 第 13 回 | 成人教育運動の国際的展開の意味 (3) | 各国の成人教育運動との関係 |
| 第 14 回 | 成人教育運動のグローバルな展開の意義 | まとめ-総括討議- |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

事前に資料を配布した場合には、目を通していただく。紹介した文献等、各自積極的に読んでおく。

【テキスト (教科書)】

担当教員が作成した印刷物を授業にて配布するほか、適宜指示。

【参考書】

国際成人教育協議会 (International Council for Adult Education) のホームページ <http://www.icae2.org/>
ユネスコ生涯学習研究所 (The UNESCO Institute for Lifelong Learning) のホームページ <http://www.uil.unesco.org/>

【成績評価の方法と基準】

講義時の討議への積極的参加の割合を 30%、報告担当時のレジュメの質 - 該当箇所理解度、分析の質を 30%、最終レポート (テーマに関しての理解度と独自の見解の存在及びその質) を 40% で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

成人教育に関する事前の学習が不足している場合の配慮、対応の必要。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムによる「お知らせ」を通じて講義に関する指示を出すこともあるので、「お知らせ」の e メールが確実に自分に届くようにしておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会教育学
<研究テーマ>成人教育運動、社会教育法制度、社会教育実践、公民館、社会教育職員
<主要研究業績>

- ①国際成人教育協会（ICAE）の課題意識発展の過程
-成人教育運動の国際的展開に関する研究（1）-
『社会志林』（法政大学社会学部紀要）第 54 巻 第 3 号
（2007 年 12 月）p.55-74
- ②「成人教育運動の国際的連帯（4）
-第 6 回国際成人教育会の本会議（バレン会議）の概要と日本国内の動き-」
『月刊社会教育』No.655 2010 年 5 月号、pp63-69

- ③「社会教育法と国際的動向」社会教育推進全国協議会『社会教育法 60 年 - 権利としての社会教育を活かす』2010 年 8 月 28 日 pp.66-75
- ④「『成人教育運動の国際的展開』を追い続けて気づかされたこと」
教育実践検討会編『問い続けるわれら—生涯学習人として生きる』第 2 集
『教育実践検討会』発行 2012 年 4 月 1 日 pp.320-346

- ⑤「第 3 編-2 社会教育・生涯学習の国際的動向（国際機関・欧米）」
社会教育推進全国協議会編『社会教育・生涯学習ハンドブック』
第 8 版 エイデル研究所 2011 年 7 月 30 日 pp.202-217
- ⑥解説「成人教育の発展に関する勧告」pp350-351
『カナダの成人教育・生涯学習』pp.78-79
『国際成人教育協会』p.162
『ユネスコ『大衆の文化的生活への参加及び寄与を促進する勧告』』

- p.596
『ハンブルク宣言』p.504
『ユネスコ国際成人教育会議』pp.595-596
社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』朝倉書店
2012 年 11 月 30 日

- ⑦「第 3 編-2 社会教育・生涯学習の国際的動向（国際機関・組織）」
社会教育推進全国協議会編『社会教育・生涯学習ハンドブック』
第 9 版 エイデル研究所 2017 年 10 月 10 日 pp.247-263
- ⑧「ユネスコ第 6 回国際成人教育会議のための国内「草の根会議」編著
『日本の社会教育・成人教育 最近 12 年の政策・実践・運動：分析と
提言
-第 6 回国際成人教育会議（CONFINTEA VI）に向けた
市民社会組織からの報告-』（デジタル版）2009 年 11 月 23 日
<http://prof.mt.tama.hosei.ac.jp/~yarai/JDGMCON6/CSOsREPfinaljpcore100321.pdf>
(英語版)

Social Education/Adult Education in Japan Policies, Practices and Movements
during the last 12 years: Analysis and Recommendations
- A Report from Civil Society Organizations to the Sixth International Conference
for Adult Education (CONFINTEA VI) - (CSOs report)
written and edited by Japanese Domestic Grass-roots Meeting for CONFINTEA VI (digital), November 2009
<http://prof.mt.tama.hosei.ac.jp/~yarai/JDGMCON6/CSOsREPfinalencore100107.pdf>

- ⑨「カナダの成人識字教育者たち
-困難な中、実践のための研究運動を切り開く-」
『月刊社会教育』No.606 2006 年 4 月号 pp.64-70
- ⑩「ユネスコ第 6 回国際成人教育会議中間総括会議（スウォン）と
コミュニティ・ラーニングセンターをめぐる議論
-ドイツ成人教育協会国際部主催のサイドイベントに注目して-」
『日本公民館学会年報』第 15 号 2018 年 12 月 10 日 pp.68-74

【Outline and objectives】

This course reviews the history of adult education movements, especially international ones, and has two focuses. One is on the relation between domestic movements and international ones. The other focus is on the relation between policy and movements both domestic level and international one. Recognizing complex structure of these relations, we will seek to find out the challenges of adult education movements.

社会学特殊研究 5

村井 重樹

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ビエール・ブルデューの社会学理論・方法について、批判的な展開も視野に入れながら検討し、現代社会分析におけるその意義と可能性を探る。

【到達目標】

ブルデュー社会学の主要概念、理論枠組みや方法論について基本的な知識を習得し、それを自身の研究に活用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

文献講読を中心に進める。各回の担当者が文献内容の報告と論点提示を行い、それに基づいて全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期集中

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|--------------------|-----------------------------|
| 第 1 回 | イントロダクション | 授業内容の説明 |
| 第 2 回 | ブルデュー社会学を読み解く（1） | 『ディスタクシオン』（序文、第 1 章） |
| 第 3 回 | ブルデュー社会学を読み解く（2） | 『ディスタクシオン』（第 2 章） |
| 第 4 回 | ブルデュー社会学を読み解く（3） | 『ディスタクシオン』（第 3 章） |
| 第 5 回 | ブルデュー社会学を読み解く（4） | 『ディスタクシオン』（第 4 章） |
| 第 6 回 | ブルデュー社会学を読み解く（5） | 『ディスタクシオン』（第 5 章） |
| 第 7 回 | ブルデュー社会学を読み解く（6） | 『ディスタクシオン』（第 6 章、第 7 章） |
| 第 8 回 | ブルデュー社会学を読み解く（7） | 『ディスタクシオン』（第 8 章、結論） |
| 第 9 回 | ブルデュー社会学批判を読み解く（1） | 『複数的人間』（英語版序文、前口上、第 1 場） |
| 第 10 回 | ブルデュー社会学批判を読み解く（2） | 『複数的人間』（第 2 場） |
| 第 11 回 | ブルデュー社会学批判を読み解く（3） | 『複数的人間』（第 3 場、第 4 場） |
| 第 12 回 | ブルデュー社会学批判を読み解く（4） | 『複数的世界』（第 3 章） |
| 第 13 回 | ブルデュー社会学批判を読み解く（5） | 『文化・階級・卓越化』（序論、第 1 章、第 2 章） |
| 第 14 回 | 総括 | 全体のまとめと総合討論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指定された文献の該当箇所を事前に読んでくること。

【テキスト（教科書）】

P・ブルデュー（石井洋二郎訳）『ディスタクシオン I・II』藤原書店、1990 年
B・ライール（鈴木智之訳）『複数的人間』法政大学出版社、2013 年
B・ライール（村井重樹訳）『複数的世界』青弓社、2016 年
T・ベネットほか（磯直樹ほか訳）『文化・階級・卓越化』青弓社、2017 年

【参考書】

授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

各自の担当箇所の報告内容（70 %）と議論への参加度（30 %）に基づいて評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>理論社会学、文化社会学
<研究テーマ>文化的実践の社会学
<主要研究業績>

「分化した社会におけるハビトゥス——ライールのブルデュー批判を手がかりに」『日仏社会学年報』（第 28 号、2017 年）
「ハビトゥスと文化的再生産」友枝敏雄・浜日出夫・山田真茂留編『社会学の力——重要概念・命題集』（有斐閣、2017 年）
「食の実践と卓越化——ブルデュー社会学の視座とその展開」『三田社会学』（第 20 号、2015 年）

【Outline and objectives】

This course will consider Pierre Bourdieu's sociological theory.

SOC500E1 - 1210

社会学特殊研究6

山腰 修三

【Outline and objectives】

This course aims to learn perspectives and methodologies for media politics. While the media environment changes radically, the significance of studying the relationship between politics and the media is increasing. By explaining the methodologies and concepts of critical media studies, this course presents some implications on contemporary theories and case studies.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、メディアを通じて社会や政治を学ぶ視座や方法論に関する理解を深めることを目的とする。メディア環境が大きく変化する一方で、政治とメディアとの関係性を研究することの意義はますます高まっている。そこで、この授業では、批判的コミュニケーション論の方法論や諸概念の解説を行いながら、理論と事例の今日的な課題を提示することにした。

【到達目標】

- ・批判的コミュニケーション論の意義について理解することができる。
- ・ニュース研究の方法論について理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

講義を中心に進めていくが、受講者のニーズがあればディスカッションや受講者の口頭発表なども適宜行うことにしたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期集中**

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|----------------------|---------------------------------|
| 第1回 | イントロダクション | ガイダンス |
| 第2回 | ニュース研究の基礎概念 | ニュースとは何か／ニュース生産のメカニズム／ニュース・バリュー |
| 第3回 | 批判的コミュニケーション論とは何か（1） | 批判的コミュニケーション論の基礎概念 |
| 第4回 | 批判的コミュニケーション論とは何か（2） | カルチュラル・スタディーズのオーディエンス論 |
| 第5回 | 批判的コミュニケーション論とは何か（3） | ヘゲモニー概念と「意味づけをめぐる政治」 |
| 第6回 | ニュースの言説分析（1） | 批判的言説分析の基礎 |
| 第7回 | ニュースの言説分析（2） | 水俣病事件報道を事例として |
| 第8回 | ニュースの言説分析（3） | 新自由主義的改革を事例として |
| 第9回 | メディア研究と政治理論（1） | 民主主義論との関係から |
| 第10回 | メディア研究と政治理論（2） | ポピュリズム論との関係から |
| 第11回 | メディア研究と政治理論（3） | クドリーのメディア理論との関係から |
| 第12回 | 民主主義とメディア（1） | 政治制度としてのメディア |
| 第13回 | 民主主義とメディア（2） | 脱原発運動との関係から |
| 第14回 | 民主主義とメディア（3） | 沖縄問題との関係から |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・授業で配布する資料（レジュメなど）を適宜読んでおく。
- ・参考書を読んでおく。

【テキスト（教科書）】

特になし（必要に応じ、レジュメ等を配布する）

【参考書】

山腰修三『コミュニケーションの政治社会学』ミネルヴァ書房、2012年。
ニック・クドリー『メディア・社会・世界』慶應義塾大学出版会、2018年。

【成績評価の方法と基準】

レポートに加え、授業中の参加の度合い、貢献度を考慮し、総合的に判断する。具体的な評価の配分は、レポート（50%）、授業中の参加の度合い（50%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

授業内のディスカッションや質疑応答などを通して、受講者の意見・問題関心を把握する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

メディア論、ジャーナリズム論、政治社会学

<研究テーマ>

メディアの政治理論、ニュースの言説分析

<主要研究業績>

山腰修三『コミュニケーションの政治社会学』ミネルヴァ書房、2012年。
山腰修三編著『戦後日本のメディアと原子力問題』ミネルヴァ書房、2017年。
ニック・クドリー著（山腰修三監訳）『メディア・社会・世界』慶應義塾大学出版会、2018年。

SOC500E1 - 1302

統計分析法

齋藤 友里子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

分析結果（解釈ではない）は統計ソフトの扱い方を憶えれば「一応だせる」。ただし、分析手法や統計学に関する知識が欠如していれば、堂々と嘘をつくことになりかねない。また、データに基づき主張するには、実質的なテーマをどのように統計解析に落とし込むかが肝要となる。この授業では、モデルの基礎を数学的に学びつつ、実際にデータを用いて分析する。これにより、社会学的な発想に導かれた計量分析の実際を知り、それを自ら行うための基本的な技術の修得をめざす。「発見すること」「理論を確かめること」と分析の関連——計量研究における分析視角がもつ重要性についても理解を深めたい。

【到達目標】

数理統計学の基礎をふまえながら、主に重回帰分析と因子分析の学習を通して、多変量解析の基本を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

多変量解析の基礎に関する講義と SPSS を用いた実習により、理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|---------------------|---|
| 第 1 回 | イントロダクション-社会学と多変量解析 | 社会学と多変量解析 |
| 第 2 回 | 散らばりの指標と推測統計の基礎知識 | 散らばりの指標に関する学習を通して統計学の表記法に慣れるとともに推測統計の考え方について概説する |
| 第 3 回 | 線形代数の基礎知識 | 線形代数の基礎について概説する |
| 第 4 回 | 多変量データとベクトル・行列 | 多変量データと線形代数の関係について論じる |
| 第 5 回 | 説明変数・目的変数と二変量重回帰モデル | 二変量重回帰モデルの考え方について解説する |
| 第 6 回 | 重回帰理論の数学モデル | 誤差項と回帰係数・切片について線形代数を用い解説する |
| 第 7 回 | 重回帰分析の導入 | 重回帰分析の数学モデルの重回帰分析への拡張を行う |
| 第 8 回 | 最小二乗推定と多重共線性 | 重回帰モデルの推定方法の 1 つである OLS と、重回帰分析における多重共線性の問題について解説する |
| 第 9 回 | 偏回帰係数の検定とモデルの評価 | 偏回帰係数を中心としたモデルの解釈を学ぶ |
| 第 10 回 | 重回帰モデルの使用とモデルの改善 | モデルの改善・評価について解説する |
| 第 11 回 | 因子分析の数学モデル | 因子分析の数学的構造について解説する |
| 第 12 回 | 探索的因子分析の実際 | 探索的因子分析の事例を紹介する |
| 第 13 回 | 探索的因子分析と確証的因子分析 | 探索的因子分析との比較により、確証的因子分析の概略を学ぶ |
| 第 14 回 | 共分散構造分析およびその他の分析手法 | その他の多変量解析法について概説する |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回～第 4 回 線形代数と統計学に基礎的な表記の予習・復習

第 5 回～第 14 回 教材の復習と出された実習課題の遂行。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。教材を配布するほか、授業中に適宜指示する。

【参考書】

ボンシュテット&ノーキ『社会統計学』ハーベスト社、1990；ウオナコット&ウオナコット『統計学序説』培風館、1981；他授業中に適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

各自が設定したテーマについて、授業で取り上げた分析を使用して執筆されたレポートにより評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>数理社会学・理論社会学・社会意識論

<研究テーマ>共同性とフェアネスの関係、ジャスティスの社会学、公平評価の数理モデル。

<主要研究業績>

2011『現代の階層社会 第3巻 流動化の中の社会意識』（齋藤友里子・三隅一人編）東京大学出版会。

2011『「新自由主義の受容」は何により促されたか—市場化と価値意識』齋藤友里子・三隅一人編『現代の階層社会 第3巻 流動化の中の社会意識』東京大学出版会。

2011『不公平感の構造—格差拡大と階層性』齋藤友里子・三隅一人編『現代の階層社会 第3巻 流動化の中の社会意識』東京大学出版会（大槻茂実との共著）。

【Outline and objectives】

You can get some "output" of a statistical application software once you learn how to use it. However, if you have no knowledge of statistical theory or method per se, there is quite a possibility that you end up lying about what you have found through the analysis. If you do not want this, you need to know how to fit your research question into the framework of statistical analysis. This course will offer an opportunity to learn how to pursue your research question, quantitatively.

SOC500E1 - 1303

社会調査実習

田嶋 淳子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文で実施する予定の社会調査について自らの具体的なテーマに即して方法を学ぶ。

【到達目標】

修士論文において、社会調査を実施し、その成果を論文に反映させること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

修士論文で用いる社会調査の設定、計画、対象の選定、実施、分析、報告のすべてのプロセスを経験する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**通年**

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-------------------|----------------------------------|
| 第1講 | 調査実習の進め方 | 調査実習の進め方についての解説 |
| 第2講 | 調査方法について | 調査テーマと調査方法について（質的調査とは） |
| 第3講 | 調査方法について（2） | 調査テーマと調査方法について（量的調査とは） |
| 第4講 | 社会調査に関する既存データの収集 | マクロ・データの収集方法とデータの検討作業 |
| 第5講 | 既存データの収集と批判的検討（1） | マクロ・データ作成と加工 |
| 第6講 | 既存データの批判的検討（2） | マクロ・データの作成と加工についての批判的検討 |
| 第7講 | 調査対象の選定（1） | 調査方法の検討と調査対象に関する詳細情報の収集 |
| 第8講 | 調査対象の選定（2） | 詳細情報の検討と調査対象の選定（調査対象者、調査対象地について） |
| 第9講 | 調査計画の策定（1） | 収集した資料にもとづき、進めるべき調査計画を作成する。 |
| 第10講 | 調査計画の策定（2） | 調査計画の検討 テーマとの関連、目標設定、対象範囲 |
| 第11講 | 調査計画の策定（3） | 調査計画の検討 |
| 第12講 | 調査対象へのアプローチ（1） | 調査対象選定のための準備作業 |
| 第13講 | 調査対象へのアプローチ（2） | 調査対象選定の妥当性検討 |
| 第14講 | 調査対象へのアプローチ（3） | 調査対象の確定と調査の進め方 |
| 第15講 | 夏休み中の作業検討と準備作業 | 調査開始の時期および必要な準備作業について |
| 第16講 | 夏休み中の作業の検討 | 調査実施と遂行した計画の達成度 |
| 第17講 | 収集データのファイル作成 | 収集データの確認とファイル化（内容の検討） |
| 第18講 | 収集データのクリーニング作業 | 収集データのクリーニング |
| 第19講 | 収集データの検討作業 | 収集データの検討と分析方法について |
| 第20講 | 調査計画の再検討 | 補充調査の必要性について |
| 第21講 | 分析作業（1） | 収集データの分析作業について |
| 第22講 | 分析作業（2） | 収集データの分析作業と批判的検討 |
| 第23講 | 分析作業（3） | 必要かつ可能な場合には補充調査の実施と分析作業 |
| 第24講 | データの集約と分析結果の検討（1） | 分析結果の検討（結果の集約方法） |
| 第25講 | 分析結果の検討（2） | 既存研究からの知見を踏まえた批判的検討 |
| 第26講 | 分析結果の検討と示し方 | 分析結果の検討とレポート作成に向けた準備作業 |
| 第27講 | 調査報告の書き方（1） | 調査報告部分についての書き方 |
| 第28講 | 調査報告の書き方（2） | ケース・スタディの書き方 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文で必要とされる社会調査を実施するため、学期中のみならず、夏休み中の調査実施を必要とする。また、後期授業期間中にも授業以外での調査の実施を補足的に実施する場合もある。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて、配布あるいは指示する。

【参考書】

- 石川淳他編『見えないものを見る力』八千代出版、1998年。
- ウヴェ・フェブリック著小田他訳『質的研究入門』春秋社、2002年。

3. 箕浦康子『フィールドワークの技法と実際』ミネルヴァ書房、1999年。

【成績評価の方法と基準】

課題の報告40%、レポート課題（60%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【その他の重要事項】

本科目は社会学研究科に在籍する学生を対象とする実習科目である。

本科目担当教員に事前の相談をすること。修士論文作成にあたり、社会調査を実施することが前提である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際社会学

<研究テーマ>国際移住および東アジアのグローバル化

中国系移住者の比較社会学的研究

<主要研究業績>

- 『国際移住の社会学』明石書店、2010年
- 『アジア系移住者をめぐる調査－新宿・池袋調査からの20年』『社会と調査』第4号、有斐閣、2010年。
- 『中国における『海外高度人材』の受け入れ政策をめぐる諸問題』『社会志林』第65巻第2号、77－94ページ。

【Outline and objectives】

Students will study social research methods suitable to their master's thesis themes in regard to scheduled social research they are required to conduct for their theses.

調査研究法

中筋 直哉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会学および政策科学の研究の実際場面で社会調査を活用するには、研究の目的および研究に適用する社会理論と有機的に結びついたかたちで調査をデザインし、データを分析することが欠かせない。この科目では、社会学の調査研究の古典を複数講読することを通して、それら各々のユニークな問題関心とそこから導き出された独特の調査設計・データ分析法を学び、さらに履修者各自の問題関心に応じた調査デザイン・データ分析法を構想し、相互討論を通して洗練することを試みる。

【到達目標】

受講生各自の問題関心に基づく調査計画、およびその調査に基づく修士論文の執筆計画を立案できること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

講義と履修者による発表および討論。各回 2 時限の連続講義で、第 8 回のみ試験 1 時限

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期前半

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|----------------------|------------------------------|
| 1 | 総論 1 | 社会学・政策科学と社会調査 |
| 2 | 総論 2 | 社会調査の諸類型 |
| 3 | 総論 3 | 社会調査の倫理と真正性 |
| 4 | フィールドワークの光と影 1 | B. マリノフスキ『西太平洋の遠洋航海者』をめぐって 1 |
| 5 | フィールドワークの光と影 2 | 同上 2 |
| 6 | 個人の歴史と社会の歴史を重ね合わせる 1 | A. クラインマン『八つの人生の物語』をめぐって 1 |
| 7 | 個人の歴史と社会の歴史を重ね合わせる 2 | 同上 2 |
| 8 | テキストデータの分解・再構築 1 | 小林直毅編『水俣』の言説と表象』をめぐって 1 |
| 9 | テキストデータの分解・再構築 2 | 同上 2 |
| 10 | 社会関係を計量する 1 | C. フィッシャー『友人のあいだで暮らす』をめぐって 1 |
| 11 | 社会関係を計量する 2 | 同上 2 |
| 12 | 政策科学に貢献する社会調査 1 | 辻中豊ほか『現代日本の自治会・町内会』をめぐって 1 |
| 13 | 政策科学に貢献する社会調査 2 | 同上 2 |
| 14 | 総括的討論 | 各自の問題関心に基づく調査デザインの発表と相互討論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自テキスト以外の関連文献を収集し、比較検討すること

【テキスト（教科書）】

上記授業計画の「内容」に記載

【参考書】

各回ごとに授業中に指示

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加 30 %、報告の内容評価 30 %、筆記試験 40 %。よく考えられた報告を行うことと、筆記試験において修士論文に相応しい調査計画を立案できていることがAの条件。

【学生の意見等からの気づき】

入手しやすい、近年の文献を取り上げる

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉地域社会学
〈研究テーマ〉地域社会の構造分析
〈主要研究業績〉『よくわかる都市社会学』（2013、ミネルヴァ書房）、『群衆の居場所』（2005、新曜社）

【Outline and objectives】

This lecture aims to study various relations sociological theory and method by reading and discussing classics of sociology.

質的資料分析法

三井 さよ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

質的調査法の基本的理解と、その実践的力を身につけることを目的とする。まず、インタビューや参与観察などのフィールドワークや、ドキュメント分析などの質的調査法について、その発展の歴史を踏まえながら、現在の到達点について理解する。その上で、具体的に質的調査を行う上で重要な論点となりうる点について、実践的な観点から考察し、議論する。さらに、受講者自身の持つデータや、教員が仮に提供するデータをもとにワークショップを行い、具体的な手法を選び身につけるための手がかりを得るよう試みる。

【到達目標】

さまざまな質的調査法に関する基本的理解を踏まえたうえで、新聞・雑誌記事、資料文書、映像、放送、音楽などの質的データの分析法（内容分析等）を理解するとともに、その一部についての実践的な能力を習得すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

質的調査法についての歴史と具体的な手法に関する現在の到達点について解説した上で、実際の質的調査において直面する課題や問題について解説する。その上で、受講生のデータ（あるいは自身の関心がある領域の質的資料を任意に選んでもらう）を持ち寄り、具体的に分析するプロセスをワークショップ形式で経験させる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期後半

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|------------------|------------------------------|
| 第 1 回 | 質的調査とは何か | 量的調査との違い／調査倫理の問題 |
| 第 2 回 | 質的調査法の歴史と到達点 1 | インタビュー／参与観察／ドキュメント分析／観察 |
| 第 3 回 | 質的調査法の歴史と到達点 2 | エスノグラフィー／ライフヒストリー／GTA／会話分析 |
| 第 4 回 | 実践的課題 1（資料を集める） | 質問とは何か／ラポールをめぐるとの論争／調査者の立ち位置 |
| 第 5 回 | 実践的課題 2（資料を分析する） | 記録をつくる／テーマをたてる／データの特性を整理する |
| 第 6 回 | 実践的課題 3（資料を記述する） | 書くとはどういうことか／調査倫理ふたたび |
| 第 7 回 | ワークショップ 1 | データ・質的資料の持ち寄り |
| 第 8 回 | ワークショップ 2 | 最初の感想とそこから見えるもの |
| 第 9 回 | ワークショップ 3 | どう記録をつくるのか |
| 第 10 回 | ワークショップ 4 | テーマをたてる |
| 第 11 回 | ワークショップ 5 | データの特性を理解する |
| 第 12 回 | ワークショップ 6 | 改めてテーマをたてる |
| 第 13 回 | ワークショップ 7 | ふたたびデータの特性を考える |
| 第 14 回 | 総合討論 | 質的調査法の意義 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

ワークショップに参加するため、自身の関心を持つ領域における質的資料を準備し、その分析過程を各自で試み、レポートする。

【テキスト（教科書）】

岸政彦・石岡丈昇・丸山里美 2016『質的社会調査の方法』有斐閣

【参考書】

適宜授業中に指示する

【成績評価の方法と基準】

討議への参加（40%）、演習課題への取り組み（60%）

【学生の意見等からの気づき】

非該当

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉臨床社会学
〈研究テーマ〉ケアや支援の相互作用的分析
〈主要研究業績〉2004『ケアの社会学：臨床現場との対話』勁草書房、2010『看護とケア：心揺り動かされる仕事とは』角川学芸出版、(共著)『支援 vol.1』～『支援 vol.7』生活書院

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students acquire the necessary skills and knowledge needed to achieve a performance in their qualitative survey.

SOC600E1 - 2100

メディア社会学基礎演習 1

津田 正太郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院でメディアを研究する学生としての問題意識・関心を深めるとともに、修得すべき基本的な知識や調査手法を修得する。

【到達目標】

この演習の目的は、参加者が自らの関心に応じて研究テーマを設定し、実際に研究を進めていくことができるようになることである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

メディア研究を進めるにあたっての基礎的な文献を輪読するとともに、参加者の研究発表を定期的に実施し、その進捗状況を確認する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|------------------------|----------------|
| 第1回 | メディアコースおよび演習の進め方に関する説明 | 授業全体のイントロダクション |
| 第2回 | 参加者の研究計画に関する報告 | 研究計画報告 |
| 第3回 | 参加者の研究計画に関する報告 | 研究計画報告 |
| 第4回 | メディアと社会 | メディア研究基礎 |
| 第5回 | メディアとナショナリズム | メディア研究基礎 |
| 第6回 | メディアと戦争 | メディア研究基礎 |
| 第7回 | メディアと消費 | メディア研究基礎 |
| 第8回 | メディアと都市空間 | メディア研究基礎 |
| 第9回 | メディアとグローバルゼーション | メディア研究基礎 |
| 第10回 | メディアと社会問題 | メディア研究基礎 |
| 第11回 | メディアと貧困 | メディア研究基礎 |
| 第12回 | メディアと排外主義 | メディア研究基礎 |
| 第13回 | 参加者の研究の進捗状況に関する報告 | 研究進捗報告 |
| 第14回 | 参加者の研究の進捗状況に関する報告 | 研究進捗報告 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献の熟読、レジュメの作成、研究報告の準備などは演習の時間外で行う。

【テキスト（教科書）】

津田正太郎（2016）『メディアは社会を変えるのか』世界思想社。

【参考書】

内容に応じて適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

演習中の研究報告（70%）および文献輪読での報告（30%）によって総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

参加者の議論が活性化するようテーマの設定を変更した。

【学生が準備すべき機器他】

特にないが、PCの利用は必須である。

【担当教員の専門分野等】

マスコミュニケーション論、ナショナリズム論、政治社会学

【Outline and objectives】

The purpose of this seminar is to help participants learn basic knowledge and skills for studying media at graduate school.

SOC600E1 - 2101

メディア社会学基礎演習 2

小林 直毅

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

メディアコースに入学した大学院生として求められる、メディア研究の基礎となる理論と方法を学ぶ。けっしてメディアの世界だけに内向きに狭く閉じこもった問題構成を図ることなく、社会的現象や社会的課題を学術的考察していくために、人間の認識と存在を可能にする技術と制度としてのメディアの可能性と課題を広範、かつ系統的に解明することのできる研究資質の形成を図る。

【到達目標】

メディア研究は、どのように問題構成を図り、研究目標を設定し、どのような研究成果を、どのようにして学術論文としてまとめていくべきかを理解し、実践していくことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

メディア研究の基礎として不可欠な理論と方法、その実践的可能性を論じたテキストを、各自の研究テーマに即して分担報告者を決めて、毎回、報告とディスカッションを重ねていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|---------------|---|
| 第1回 | オリエンテーション | 授業概要の説明と、秋学期のスケジュール確認。 夏季休暇中の研究成果に即した、分担報告の決定。 |
| 第2回 | 研究テーマと問題構成 | テキスト 19～78 頁の分担報告。 |
| 第3回 | メディア研究とは何か（1） | テキスト 19～78 頁の分担報告。 |
| 第4回 | メディア研究とは何か（2） | テキスト 79～130 頁「テキストの要求と分析の戦略」の分担報告。 |
| 第5回 | 理論と方法（1） | テキスト 131～189 頁「経験の諸次元」の分担報告。 |
| 第6回 | 理論と方法（2） | テキスト 79～130 頁「テキストの要求と分析の戦略」の分担報告。 |
| 第7回 | 問題構成の視点（1） | テキスト 131～189 頁「経験の諸次元」の分担報告。 |
| 第8回 | 問題構成の視点（2） | テキスト 131～189 頁「経験の諸次元」の分担報告。 |
| 第9回 | 中間総括 | これまでの報告と議論を振り返って、全員でディスカッション。 |
| 第10回 | 実践的課題（1） | テキスト 191～246 頁「行為と経験のロケーション」の分担報告。 |
| 第11回 | 実践的課題（2） | テキスト 191～246 頁「行為と経験のロケーション」の分担報告。 |
| 第12回 | メディア研究の課題（1） | テキスト 247～327 頁「意味の構成」の分担報告。 |
| 第13回 | メディア研究の課題（2） | テキスト 247～327 頁「意味の構成」の分担報告。 |
| 第14回 | 総括討論 | メディア研究としての各自の論文構想について議論する。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

分担報告の有無にかかわらず、テキストは必ず精読して、議論のための論点のメモを準備する。

【テキスト（教科書）】

ロジャー・シルバーストーン（吉見俊哉、伊藤守、土橋臣吾訳）『なぜメディア研究か——経験・テキスト・他者——』せりか書房。

【参考書】

伊藤守編著（2009）『よくわかるメディア・スタディーズ』ミネルヴァ書房。
他の参考文献等は、授業を進める過程で適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

分担報告、ディスカッション（70%）、「中間総括」、「総括討論」における論文執筆へ向けての発表（30%）の達成度で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
メディア文化研究
<研究テーマ>
メディア/アーカイブ研究、水俣病事件報道研究
<主要研究業績>

『メディアテキストの冒険』（世界思想社、2003年）
『テレビはどう見られてきたのか』（共編著、せりか書房、2003年）
『水俣学研究序説』（共著、藤原書店、2004年）
『水俣学講義[第2集]』（共著、日本評論社、2005年）
『テレビニュースの社会学』（共著、世界思想社、2006年）
『「水俣」の言説と表象』（編著、藤原書店、2007年）
『テレビジョン解体』（共著、慶應義塾大学出版会、2007年）
『ポピュラーTV』（共著、風塵社、2009年）
『放送番組で読み解く社会的記憶—ジャーナリズム・リテラシー教育への活用—』（共著、日外アソシエーツ、2012年）
『メディア・リテラシーの現在—公害／環境問題から読み解く』（共著、ナカニシヤ出版、2013年）
『ニュース空間の社会学—不安と危機をめぐる現代メディア論』（共著、世界思想社、2014年）
『原発震災のテレビアーカイブ』（編著、法政大学出版局、2018年）

【Outline and objectives】

Graduate students will be able to study theories and methods as thought of media studies.

SOC600E1 - 2102

メディア社会学基礎演習3

津田 正太郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院でメディアを研究する学生としての問題意識・関心を深めるとともに、修得すべき基本的な知識や調査手法を修得する。

【到達目標】

この演習の目的は、参加者が自らの関心に応じて研究テーマを設定し、実際に研究を進めていくことができるようになることである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

メディア研究を進めるにあたっての基礎的な文献を輪読するとともに、参加者の研究発表を定期的に実施し、その進捗状況を確認する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|------------------------|----------------|
| 第1回 | メディアコースおよび演習の進め方に関する説明 | 授業全体のイントロダクション |
| 第2回 | 参加者の研究計画に関する報告 | 研究計画報告 |
| 第3回 | 参加者の研究計画に関する報告 | 研究計画報告 |
| 第4回 | メディアと社会 | メディア研究基礎 |
| 第5回 | メディアとナショナリズム | メディア研究基礎 |
| 第6回 | メディアと戦争 | メディア研究基礎 |
| 第7回 | メディアと消費 | メディア研究基礎 |
| 第8回 | メディアと都市空間 | メディア研究基礎 |
| 第9回 | メディアとグローバリゼーション | メディア研究基礎 |
| 第10回 | メディアと社会問題 | メディア研究基礎 |
| 第11回 | メディアと貧困 | メディア研究基礎 |
| 第12回 | メディアと排外主義 | メディア研究基礎 |
| 第13回 | 参加者の研究の進捗状況に関する報告 | 研究進捗報告 |
| 第14回 | 参加者の研究の進捗状況に関する報告 | 研究進捗報告 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献の熟読、レジュメの作成、研究報告の準備などは演習の時間外で行う。

【テキスト（教科書）】

津田正太郎（2016）『メディアは社会を変えるのか』世界思想社。

【参考書】

内容に応じて適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

演習中の研究報告（70%）および文献輪読での報告（30%）によって総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

参加者の議論が活性化するようテーマの設定を変更した。

【学生が準備すべき機器他】

特にないが、PCの利用は必須である。

【担当教員の専門分野等】

マスコミュニケーション論、ナショナリズム論、政治社会学

【Outline and objectives】

The purpose of this seminar is to help participants learn basic knowledge and skills for studying media at graduate school.

SOC500E1 - 2200

メディア理論1（メディアの歴史と思想）

小林 直毅

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「見る」という経験と身体の技術的、制度的な変容を、視覚メディア、映像メディアの歴史と思想として考察する。

【到達目標】

当面する諸現象、諸課題を、仮構的な「メディアの世界」だけに内向きに狭く閉じ込めて自己完結する「メディア研究」からの脱却を目指して、「人間の認識と存在を可能にする技術と制度としてのメディア」の歴史と思想を問い直すメディア研究の可能性と課題を考察することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

ジョン・バージャー『イメージ——視覚とメディア』をテキストとして、各自の研究テーマに即して分担報告者を決めて、報告とディスカッションを重ねていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**秋学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-----------------------|------------------------|
| 第1回 | オリエンテーション | 授業概要の説明と、秋学期のスケジュール確認。 |
| 第2回 | この授業の問題構成 | 参加者の研究テーマに即した分担報告の決定。 |
| 第3回 | イメージの変容（1） | テキストの第1章前半の分担報告。 |
| 第4回 | イメージの変容（2） | テキストの第1章後半の分担報告。 |
| 第5回 | 社会空間になったイメージ | テキストの第2章の分担報告。 |
| 第6回 | 「見ること」と「見られること」（1） | テキストの第3章前半の分担報告。 |
| 第7回 | 「見ること」と「見られること」（2） | テキストの第3章後半の分担報告。 |
| 第8回 | 見られる女たち、取り囲む女たち | テキストの第4章の分担報告。 |
| 第9回 | 所有するタブロー（1） | テキストの第5章前半の分担報告。 |
| 第10回 | 所有するタブロー（2） | テキストの第5章後半の分担報告。 |
| 第11回 | 「見ること」のなかの「所有すること」 | テキストの第6章の分担報告。 |
| 第12回 | 広告の宇宙（1） | テキストの第7章前半の分担報告。 |
| 第13回 | 広告の宇宙（2） | テキストの第7章後半の分担報告。 |
| 第14回 | 「見る」技術と制度としてのメディアとは何か | 授業全体の総括討論。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

分担報告の有無にかかわらず、テキストは必ず精読して、議論のための論点のメモを準備する。

【テキスト（教科書）】

ジョン・バージャー（伊藤俊治訳）『イメージ——視覚とメディア——』ちくま学芸文庫。

【参考書】

「参考文献リスト」を配布する。

【成績評価の方法と基準】

分担報告、ディスカッション（70%）、「総括討論」における発表（30%）の達成度で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【学生が準備すべき機器他】

とくになし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

メディア文化研究

<研究テーマ>

メディア／アーカイブ研究、水俣病事件報道研究

<主要研究業績>

『メディアテキストの冒険』（世界思想社、2003年）

『テレビはどう見られてきたのか』（共編著、せりか書房、2003年）

『水俣学研究序説』（共著、藤原書店、2004年）

『水俣学講義【第2集】』（共著、日本評論社、2005年）

『テレビニュースの社会学』（共著、世界思想社、2006年）

『「水俣」の言説と表象』（編著、藤原書店、2007年）

『テレビジョン解体』（共著、慶應義塾大学出版会、2007年）

『ポピュラーTV』（共著、風塵社、2009年）

『放送番組で読み解く社会的記憶—ジャーナリズム・リテラシー教育

への活用—』（共著、日外アソシエーツ、2012年）

『メディア・リテラシーの現在—公害／環境問題から読み解く』（共著、ナカニシヤ出版、2013年）

『ニュース空間の社会学—不安と危機をめぐる現代メディア論』（共著、世界思想社、2014年）

『原発震災のテレビアーカイブ』（編著、法政大学出版局、2018年）

【Outline and objectives】

Graduate students will be able to study the history and thought of media as technology and institution.

SOC500E1 - 2201

メディア理論2（映画理論）

高 美智

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

クィア理論、映画におけるクィア表象、クィア・リーディングに関する文献を輪読し、LGBT 表象の批判的な分析力を身につける。特に、1990 年代初頭にあらわれた"New Queer Cinema"を中心に、クィア映画の歴史的・政治的意義を理解し、LGBT 表象や規範的な読みを再考し新たな批判的視座を身につける。

【到達目標】

- クィア理論の基礎知識を身につける。
- クィア映画 (New Queer Cinema) とは何か、その特徴、歴史的背景を理解する。
- クィア理論をもとに映画テキストを批判的に読み解く力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

文献の講読と映画作品の分析が基本。課題文献を全員がしっかり読み込んだ上で討論を行う。課題文献は英語が多いが、文献が英語の際もレジュメの作成や授業の議論は日本語で行う。また課題映画に日本語字幕のない映画を使用することもある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|---------------|---------------------------------------|
| 第 1 回 | イントロダクション | 授業のすすめ方説明 |
| 第 2 回 | セルロイド・クローゼット | ハリウッド映画の LGBT 表象 |
| 第 3 回 | 文献購読 | クィア理論 |
| 第 4 回 | 文献購読 | クィア理論 |
| 第 5 回 | 作品分析（ケーススタディ） | 映画作品の分析とディスカッション |
| 第 6 回 | 文献購読 | クィア・シネマ論 |
| 第 7 回 | 文献購読 | クィア・シネマ論 |
| 第 8 回 | 文献購読 | クィア・シネマ論 |
| 第 9 回 | 文献購読 | クィア・シネマ論 |
| 第 10 回 | 作品分析（ケーススタディ） | 映画作品の分析とディスカッション |
| 第 11 回 | 文献購読 | クィア・リーディング |
| 第 12 回 | 文献購読 | クィア・リーディング |
| 第 13 回 | 作品分析（ケーススタディ） | 映画作品の分析とディスカッション |
| 第 14 回 | 学生発表 | 映画または他のメディアの「作品」を自分で選び、分析・考察の成果を発表する。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者は全員、毎回必ず事前に指定された文献を精読し、レジュメを作成したうえで授業に参加する。また数本の映画を授業準備として観る必要がある。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布する。

【参考書】

Michel Aaron (ed), *New Queer Cinema: A Critical Reader*, Rutgers University Press, 2004

【成績評価の方法と基準】

授業への取り組み（レジュメ、報告内容・積極的発言等）50%、発表および学期末レポート 50%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【学生が準備すべき機器他】

自宅で DVD が観られる環境が必要

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 映画研究

<研究テーマ> 映画理論、映画表象

<主要研究業績> *Japanese Cinema and Otherness: Nationalism, Multiculturalism and the Problem of Japaneseness*, 2010, London: Routledge.

'Neo-documentarism in Funeral Parade of Roses: New Realism of Matsumoto Toshio', 2011, *Screen*, 52: 3, pp. 376-390.

「日本映画にみる朝鮮人<慰安婦>と在日女性、その声の不在」2013, 北原恵（編）『アジア女性の身体はいかに描かれたか』、青弓社 pp. 239-270.

【Outline and objectives】

By reading various academic writings on 'queer theory' and 'queer cinema', the course aims to help acquire the skills to critically analyze LGBT representations in cinema and other media texts. In particular, by focusing on the 'New Queer Cinema' that emerged in the early 1990s, the students are expected to understand the historical and political importance of 'queer cinema' and acquire skills to critically analyze representations of sexual minority groups in media texts.

SOC500E1 - 2202

メディア理論3 (ジャーナリズム論)

別府 三奈子

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

今日のグローバル・スタンダードとしてジャーナリズムを規定しているプロフェッション論を、言論の自由の概念とともに解説する。古今東西のジャーナリズムの行為を観察することで、民主社会におけるジャーナリズムの存在意義を深く理解する。

【到達目標】

巨大な情報格差構造の仕組みと、ジャーナリズムの社会的役割、民主社会におけるジャーナリストの職能条件を理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

講義と資料解説、受講生との討議。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|------------|-------------|
| 第1回 | オリエンテーション | リテラシーの確認 |
| 第2回 | 専門職能の条件1 | 新聞記者の行動観察 |
| 第3回 | メディアの発達史 | メディアと人類の関係 |
| 第4回 | 言論の自由の由来1 | 信教革命とマスメディア |
| 第5回 | 言論の自由の由来2 | 市民革命と民主主義 |
| 第6回 | 修正第一条の意義 | 独立戦争と新聞 |
| 第7回 | 社会改良主義 | 事例：ピューツァー |
| 第8回 | 世界基準の確立 | 事例：キャバ |
| 第9回 | 技術とジャーナリズム | フォトジャーナリズム史 |
| 第10回 | プロパガンダとは何か | 事例：ゲッペルス |
| 第11回 | 戦争ジャーナリズム1 | 事例：太平洋戦争 |
| 第12回 | 戦争ジャーナリズム2 | 事例：ベトナム戦争 |
| 第13回 | ジャーナリズムと政府 | 事例：ウォーターゲート |
| 第14回 | ジャーナリズムと人権 | 事例：福島菊次郎 |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

指定テキストを事前に読む。社会問題をめぐるマスメディアの様態を幅広く観察する。

【テキスト (教科書)】

『レクチャー 現代ジャーナリズム』早稲田大学ジャーナリズム教育研究所編、早稲田大学出版部、2013年

【参考書】

『調査報道ジャーナリズムの挑戦—市民社会と国際支援戦略』花田達郎、別府三奈子、大塚一美、デビッド・カプラン著、旬報社、2017年。『エンサイクロペディア 現代ジャーナリズム』早稲田大学ジャーナリズム教育研究所編、早稲田大学出版部、2013年。

【成績評価の方法と基準】

討議内容やレジュメ発表 50%、期末試験 50%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【その他の重要事項】

ジャーナリズムを研究対象とした学生の履修が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ジャーナリズム規範史の国際比較研究
<研究テーマ>フォト・ジャーナリズム史、記録と記憶とジャーナリズムの連関
<主要研究業績>主著『ジャーナリズムの起源』世界思想社、2006年ほか。

【Outline and objectives】

It's designed to build the crucial context and understanding that enables groundbreaking reporting. Students will be able to understand the essential value of Journalism in our democratic society.

SOC500E1 - 2203

メディア理論4 (メディア・コミュニケーションの諸相～現状と今後～)

北原 利行

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

マスメディア (新聞、放送、出版、映画など) やインターネットにおけるコミュニケーション上のさまざまな事象を、発信者側であるメディア企業、受信者側である消費者 (オーディエンス) を対比させながら分析する。メディア、コミュニケーションについては、情報であるコンテンツに注目が行きがちだが、それを支えるビジネス構造的な視点が欠かせない。それを踏まえてメディアやコミュニケーションのあり方について考察し、現代社会におけるそれらの上で起きているさまざまなコミュニケーション上の諸問題への解決の方策について論じる。特にマスメディアとソーシャルメディアの関係について双方の立場から論じることができるクリティカルな視点の獲得を目指す。

【到達目標】

メディア、コミュニケーションについての基礎的な理論の習得、消費者・生活者の情報摂取行動についての基礎的な知識の習得を最初に講義形式で行う。その上でマスメディア、インターネット上でのコミュニケーションなどの現状におけるさまざまな諸問題についての分析力および課題解決のための論理的構築できるスキルを習得する。また、プレゼンテーションスキルの向上も目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で行う。

講義については、レジュメを配布し、内容に沿って説明し、受講者に対して問題提起し、リアクションについての議論を行うことで、インタラクティブな形式で進行させる。

受講者の問題意識をもとに、課題解決のための演習形式を取り入れて、受講者との間のディスカッションを行い、課題解決のための思考を深めスキルの向上を図る。

授業内容については、受講者の関心領域などに対して柔軟に対応するので、下記の授業計画からの変更の可能性もある。

アクティブラーニングに関しては、途中に設ける予定。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-------------|--|
| 第1回 | ガイダンス | 受講者の問題関心の確認 メディア、コミュニケーションについての基礎理論 |
| 第2回 | メディア論① | メディア論の基礎 |
| 第3回 | メディア論② | メディア論をもとにマスメディアについての解析 |
| 第4回 | コミュニケーション論① | コミュニケーション論の基礎 |
| 第5回 | コミュニケーション論② | インターネットを中心としたコミュニケーションの解析 |
| 第6回 | 新聞 | 新聞産業の構造、新聞の受容、ジャーナリズムなどの諸問題について |
| 第7回 | テレビ | テレビ産業の構造、テレビの受容、視聴率などの諸問題について |
| 第8回 | 出版 | 出版産業の構造、書籍・雑誌の受容、電子出版などの諸問題について |
| 第9回 | 映画・アニメ、その他 | 映画産業、アニメ産業の構造、その受容、その他メディアなどの諸問題について |
| 第10回 | インターネット | インターネットの構造、消費者の情報摂取行動 |
| 第11回 | 演習① | 受講者の問題意識にそって演習形式で課題の検討を行う。 |
| 第12回 | 演習② | 受講者の問題意識にそって演習形式で課題の検討を行う。 |
| 第13回 | 演習③ | 受講者の問題意識にそって演習形式で課題の検討を行う。 |
| 第14回 | まとめ | まとめ |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

積極的に、新聞やテレビなどの多くのメディアに幅広く意識的に接触すること。インターネット上のサービス等についても積極的に把握する。講義内容に沿って生じた疑問などを参考書などを中心に予習・復習する。日常より問題意識を持って、メディア、コミュニケーション上の諸問題について批判的に捉えることで受講者自身が設定した演習課題についての考察を深める。

【テキスト (教科書)】

指定した教科書は使用しない。講義の都度レジュメを配布する。

【参考書】

吉見俊哉『メディア文化論－メディアを学ぶ人のための15話』（有斐閣）、佐藤卓己『メディア社会－現代を読み解く視点』（岩波書店）、M. マクルーハン『メディア論』（みすず書房）、L. レッシング『REMIX』（翔泳社）、電通総研『情報メディア白書』（ダイヤモンド社）など。
講義内でも関連参考書について紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（講義、課題への参加度） 60%
期末レポート 40%

【学生の意見等からの気づき】

アニメーション市場関連についての要望が多い。また既存のメディアと SNS の関係についての関心が高い。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

メディア、コミュニケーション、広告

<研究テーマ>

マスメディア企業の戦略、企業の広告戦略、広告市場の変遷

<主要研究業績>

「2017年の新聞広告とその動向——新聞社の総合力生かす展開に期待」、2018年4月、新聞研究

「2018 広告コミュニケーションの総合講座理論とケーススタディー」（共著）、2017年12月、日経広告研究所

「情報メディア白書」（共著）、2007年～、ダイヤモンド社

【Outline and objectives】

Analyze various issues on mass media (newspapers, broadcasting, publishing, movies, etc.) and communication on the Internet while comparing the sender side: the media company, and the receiver side: the consumer (audience). Regarding media and communication, attention tends to focus on Media content, but a business structural view that supports Media industry is indispensable. Based on that, We will consider the way of media and communication, and discuss ways of solving various communication problems occurring on them in modern society. In particular, we aim to acquire a critical viewpoint which can be discussed from the standpoint of the relationship between mass media and social media.

SOC500E1 - 2205

メディア特殊研究1（ブランド広告の意味研究）

青木 貞茂

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代社会においてブランドは、私達が生きていく上で無視できないほど大きな意味・価値を持った存在である。このブランドを創造するのが広告情報であり、どのように私達に働きかけ、影響を与えるのか、意味・価値の生成構造について構造主義、記号論、語用論をふまえて明らかにする。

【到達目標】

現代のブランド広告などに関して構造主義・記号論などの方法を駆使して、その構造・意味を分析・把握することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

主にブランド広告あるいは関連情報を中心として、記号論、言語学における語用論等の方法を駆使し、様々な情報を分析素材として構造・意味解析を実行する。その隠された意味、表現構造を明るみに出し、ともに情報の意味についての考察を深めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|----------------------|--|
| 第1回 | 授業のオリエンテーション | 授業のコンセプトと全必要な予備知識などについて説明 |
| 第2回 | 現代社会におけるブランド、広告、文化 | ブランド、広告、文化は、現代社会の中でどのような機能と役割を果たしているのか |
| 第3回 | ブランドの存在論 | 現代社会におけるブランドの存在意義 |
| 第4回 | ブランド価値の発見 | ブランドの価値、意味内容のための調査方法 |
| 第5回 | ブランド価値の構造化 | ブランドの価値、意味内容を定義する |
| 第6回 | ブランド価値の管理 | ブランドの価値をおおげずに管理する手法 |
| 第7回 | ブランド・シンボルの概念 | ブランドの表現を構成するシンボルの内容 |
| 第8回 | ブランドにおけるシンボル・チェーン | ブランドのシンボル間のチェーン構造とはどのようなものか |
| 第9回 | 成功したブランド広告のケース分析 | 世界的に成功したブランド広告の事例を分析 |
| 第10回 | ブランド広告の構造分析 | ブランド広告を構造主義、記号論の方法で分析 |
| 第11回 | 言語ゲームとブランド・コミュニケーション | 言語ゲーム論からみたコミュニケーション戦略 |
| 第12回 | ブランド広告と物語 | ブランド広告を効果的に拡散する物語 |
| 第13回 | ブランドマネジメントの方法 | ブランド表現、シンボルのマネジメント方法 |
| 第14回 | ブランド広告と情報戦略 | ブランドに関する情報発信戦略の概要 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日常生活においてブランドとその広告表現について積極的な関心を持ち、情報収集を行なう。予習、課題がある場合、適宜授業内で指示する。

【テキスト（教科書）】

青木貞茂『文化の力』（NTT出版、2008年）

青木貞茂『キャラクター・パワー』（NHK出版新書、2014年）

【参考書】

津金澤聡廣・佐藤卓己編『広報・広告・プロパガンダ』（ミネルヴァ書房、2003年）

佐藤卓己・渡辺靖・柴内康文編『ソフト・パワーのメディア文化政策』（新曜社、2012年）

他適宜授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

評価はディスカッション（70%）と期末レポート（30%）で行う。

【学生の意見等からの気づき】

なし。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

オフィスアワーは、火曜日の昼休み、青木の研究室にて実施。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 広告論、ブランド論

<研究テーマ> 文化と広告、ブランド、マーケティング

<研究業績> 単著『文脈創造のマーケティング』（日本経済新聞社、1994年）、

『文化の力』（NTT出版、2008年）

共著『記号化社会の消費』（ホルト・サウンダース・ジャパン、1985年）、『広告の記号論』（日経広告研究所、1987年）、『文化の消費が始まった』（日本経済新聞社、1989年）、『広報・広告・プロパガンダ』（ミネルヴァ書房、2003年）、『ソフト・パワーのメディア文化政策』（新曜社、2012年）
共訳書としてレイモア『隠された神話』（日経広告研究所、1985年）

【Outline and objectives】

In contemporary society, brand is an existence with great significance and value that cannot be ignored in our everyday life. We will clarify how the brands, created by advertisement information, influence us and how their significance and values are produced in light of structuralism, semiotics, and pragmatics.

SOC500E1 - 2206

メディア特殊研究2（メディアとデータリテラシー）

萩原 雅之

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

公的統計、アンケート、世論調査などのデータを扱った報道の中には、無意識に、あるいは意図的に間違った解釈や誤解を生む表現が見られる。その背景にあるメディアのメカニズムやジャーナリズムの現状を理解し、データを正しく読み解くためのスキルとリテラシーについて学ぶ。さらに、近年注目を集める「データジャーナリズム」の意義と可能性についても実例を通して考える。

【到達目標】

- ・データの収集、分析、表現に関する基本知識を習得する。
- ・仮説検証や問題探索におけるデータ活用スキルを身につける。
- ・報道における誤ったデータの解釈や表現を的確に指摘できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

基本知識やケース分析については講義を基本とするが、受講者とのディスカッションも重視する。授業内容の実践・応用を目的として関心のあるデータや統計に基づいて記事やコラムを執筆する演習も組み入れる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|---------------------|---------------------------|
| 第1回 | イントロダクション | ジャーナリズムとデータリテラシー |
| 第2回 | 事例分析：世論調査 | 世論調査を扱った記事の批判的検証 |
| 第3回 | 事例分析：企業リリース | 企業リリースを扱った記事の批判的検証 |
| 第4回 | 事例分析：公的統計 | 公的統計を扱った記事の批判的検証 |
| 第5回 | 演習：公的統計の不正問題についての議論 | 厚生労働省の不正統計問題の原因と改善策を考える |
| 第6回 | 演習：フェイクニュースについての議論 | データの使い方に問題のある記事を集め、批評する |
| 第7回 | データ収集の実務 | サンプリング、質問文・選択肢、ネットリサーチ |
| 第8回 | データ分析の実務 | 平均と分布、相関と因果、多変量解析、予測 |
| 第9回 | データ収集・分析の手法 | ビッグデータ、ソーシャルリスニング、エスノグラフィ |
| 第10回 | データ可視化とストーリーテリング | グラフ表現技術、プレゼンテーション手法 |
| 第11回 | ハンス・ロスリングの方法論1 | 『ファクトフルネス』を読む |
| 第12回 | ハンス・ロスリングの方法論2 | 『ファクトフルネス』を読む |
| 第13回 | 演習：データを使った記事・コラムを書く | テーマのアイデア出しとブラッシュアップ |
| 第14回 | 演習：データを使った記事・コラムを書く | 執筆した記事・コラムの発表 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

統計、アンケート、世論調査などの報道記事や論説などを、批評的な視点でできるだけ多く読む。

【テキスト（教科書）】

ハンス・ロスリング他『ファクトフルネス』日経 BP 社、2019年、1944円
各回ともレジュメや資料を事前に配布する。

【参考書】

小林直樹『だから数字にダマされる』日経 BP 社、2016年、1620円
谷岡一郎『社会調査のウソ』文春新書、2000年、745円

【成績評価の方法と基準】

平常点および議論への参加度 50%
演習での成果物 50%

【学生の意見等からの気づき】

昨年に比べて演習時間を拡大した。

【学生が準備すべき機器他】

演習（第5, 6, 13, 14回）で発表する際には PC を持参。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

世論調査、社会調査、マーケティングリサーチ、データサイエンス

<現職>

トランスコスモス・アナリティクス株式会社取締役副社長、マクロミル総合研究所長

青山ビジネススクール、早稲田大学ビジネススクール講師（マーケティングリサーチ）
総務省統計局国勢調査企画会議専門委員
<著書>
著書『次世代マーケティングリサーチ』（2011）
共著『ブランド戦略全書』田中洋編（2014）

【Outline and objectives】

Some news articles dealing with data such as public statistics, surveys, opinion polls have unconsciously or intentionally generated expressions that produce an erroneous interpretation and misunderstanding. The course objectives are: 1) understanding the mechanisms of the media behind it and the current state of journalism, 2) learning skills and literacy to correctly read and understand the data, and 3) thinking about the significance and possibilities of "data journalism" through an actual activity.

SOC500E1 - 2207

メディア特殊研究3（知的財産権法）

白田 秀彰

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

知的財産権法全般について紹介・検討したのちに、メディア研究に最も関係の深い著作権法について理論と裁判例をみながら検討する。

【到達目標】

著作権法の基本的思考方法を把握すること。提示された問題について原則を適用して見解を提示できること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

講義と討論によって行う。発表を要求する場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-------------|---|
| 第1回 | 法律学概論 | 法律教育を受けていない学生のために、法律学の基本的な考え方を提示する。 |
| 第2回 | 民法概論 | 知的財産権法に關係する民法の領域について解説する。 |
| 第3回 | 知的財産権法概論 | 知的財産権法全般について解説する。またそれぞれの権利についてその歴史的・経済学的背景について解説する。 |
| 第4回 | 著作権法 著作物とは | 著作物の概念について解説する。 |
| 第5回 | 著作権法 著作者とは | 著作者の概念について解説する。 |
| 第6回 | 著作権法 著作権の行使 | 著作権の効力および存続期間について解説する。 |
| 第7回 | 著作権法 著作権の制限 | 著作権の制限規定について解説する。 |
| 第8回 | 著作権法 著作隣接権 | 著作隣接権について解説する。 |
| 第9回 | 事例検討 1 | 著作物概念に関する事例を取り上げ具体的に検討する。 |
| 第10回 | 事例検討 2 | 著作者概念に関する事例を取り上げ具体的に検討する。 |
| 第11回 | 事例検討 3 | 著作権の効力・存続期間・制限に関する事例を取り上げ具体的に検討する。 |
| 第12回 | 事例検討 4 | 著作物の流通に関する事例を取り上げ、隣接権その他の流通事業について検討する。 |
| 第13回 | 事例検討 5 | 情報時代の著作権が抱える諸問題に関する事例を取り上げ具体的に検討する。 |
| 第14回 | 講評会 | 講義を総括する小論文を提出させ、この小論文の内容について討議する。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

膨大な内容を短期間で検討するため、受講生は講義中に示された事項について自主的に調査・理解することが必要である。

【テキスト（教科書）】

講義中に指示する。

【参考書】

後半の事例研究では、「著作権判例百選 第五版」を用いる。

【成績評価の方法と基準】

平常点 (80%) と講義中に課す小論文の内容 (20%) で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本講義は少人数であるためアンケートの対象ではない。

【Outline and objectives】

After introducing and considering general intellectual property rights, we will consider copyright, which is closely connected to media studies, by seeing theories and judicial precedents.

SOC500E1 - 2208

メディア特殊研究4（ソーシャルメディア論）

藤代 裕之

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ソーシャルメディアは、メディアやジャーナリズムのみならず、人々の生活や社会に大きな変化をもたらしています。スマートフォンのような身体と一体化した情報環境に支えられたソーシャルメディアは、批判的に読み解くことが困難です。この授業では、議論を行うことで、ソーシャルメディアを相対化し、多角的かつ社会的な視点を獲得していきます。

【到達目標】

ソーシャルメディアの歴史や構造を理解した上で、課題や可能性について議論を行うことで、誰もが発信者となる「ソーシャルメディア社会」のあり方について多角的な視点を獲得することを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

授業では、教科書や現在進行形で起るメディアの問題に関して受講生が提出するレジュメを起点とした議論を行います。ゲストの招聘、時事問題への対応などで、授業計画を変更することがあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|--------|-------------------|
| 第1回 | ガイダンス | 授業概要の説明 |
| 第2回 | 歴史 | ソーシャルメディアの歴史 |
| 第3回 | 歴史 | ソーシャルメディアの技術 |
| 第4回 | 歴史 | ソーシャルメディアの法 |
| 第5回 | 現在を知る | ソーシャルメディアとニュース |
| 第6回 | 現在を知る | ソーシャルメディアと広告 |
| 第7回 | 現在を知る | ソーシャルメディアと政治 |
| 第8回 | 現在を知る | ソーシャルメディアとキャンペーン |
| 第9回 | 現在を知る | ソーシャルメディアと都市 |
| 第10回 | 現在を知る | ソーシャルメディアとコンテンツ |
| 第11回 | 現在を知る | ソーシャルメディアとモノ（IoT） |
| 第12回 | 未来を考える | ソーシャルメディアと社会課題 |
| 第13回 | 未来を考える | ソーシャルメディアと社会課題 |
| 第14回 | 未来を考える | ソーシャルメディアと社会課題 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

該当部分のテキストを事前に読み、レジュメを作成して下さい。

【テキスト（教科書）】

藤代裕之編（2019年）『ソーシャルメディア論・改訂版：つながりを再設計する』青弓社

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点100%。平常点は、授業中の発言や質問、レジュメの内容で総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありません

【その他の重要事項】

受講希望者はガイダンスに出席して、授業の方針を確認してください。

【Outline and objectives】

This course discusses various issues related to social media.

SOC500E1 - 2209

メディア社会学特殊研究1（消費者行動分析）

諸上 茂光

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

メディアで発信される商品やブランドに関する情報を受け取る消費者の心理と行動を理解するために、先行する消費者行動論の理論を理解し、これを実践的に活用する能力を修得するための討議を行う。

【到達目標】

消費者行動の基礎的な原理を修得し、様々な社会事象を消費者心理の観点から読み解くことができるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

消費者心理・消費者行動に関する基礎的な文献を輪読によって読み進めながら、ケーススタディを行う。毎回授業時には課題が課され、事前準備を基に討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-------------------------------------|--|
| 第1回 | Guidance | 授業の進め方、レジュメの作成方法についての説明 |
| 第2回 | Consumer psychology (1) | Buying, Having and Being |
| 第3回 | Consumer psychology (2) | Perception |
| 第4回 | Consumer psychology (3) | Learning and Memory |
| 第5回 | Consumer psychology (4) | Motivation and Global Values |
| 第6回 | Consumer characteristics (1) | Personality and Psychographics |
| 第7回 | Consumer characteristics (2) | Attitudes and Persuasion |
| 第8回 | Consumer behavior (1) | Decision Making |
| 第9回 | Consumer behavior (2) | Buying and Disposing |
| 第10回 | Consumer behavior (3) | Organizational and Household Decision Making |
| 第11回 | Cultural context of consumption (1) | Groups and Social Media |
| 第12回 | Cultural context of consumption (2) | Social Class and Lifestyles |
| 第13回 | Discussion | 総合討議 |
| 第14回 | まとめ | 授業のまとめと残された議論の確認 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業の予習として授業毎に決められた範囲について予め読んでおき、レジュメを作成する必要があります。このレジュメと、担当回の輪読資料に基づいて討議を行います。

【テキスト（教科書）】

Michael R. Solomon : Consumer Behavior: Buying, Having, and Being(12th Edition),Person,2016.

【参考書】

授業内にて適宜指定。

【成績評価の方法と基準】

授業時に提出するレジュメの内容 50%
授業内の討議への参加状況と内容 50%

【学生の意見等からの気づき】

最終レポートによる評価を行うのではなく、しっかりした予習に基づいた授業内の討議を重視し、その内容に基づいた評価を行うこととした。

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/26/0002583/profile.html>

【Outline and objectives】

To help students acquire an understanding of the fundamental principles of consumer behavior and psychology.

メディア社会学特殊研究2（ネット世論）

稲増 龍夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フェイスブックやツイッターなどの SNS コミュニケーションの実相を理解し、あわせて、コミュニケーションの域を超えて、社会システムに与える影響について考察します。

【到達目標】

本年度はネットコミュニケーションにおける「炎上」というトピックに注目し、そのメディア論解題と分析をおこないます。本来、オープンな議論を可能にするはずのネットコミュニケーションの場が、同じ価値観の持ち主たちの絆を強固にし、異なる価値観の持ち主との分断を促進している事態をどう打破するかについて検討します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

指定されたテキストを全員で読み込み、毎回の発表内容にそって発表者から問題提起をおこない、全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|---------------------------|-----------------|
| 第1回 | オリエンテーション | 授業の進め方と受講者の自己紹介 |
| 第2回 | 『対論「炎上」日本のメカニズム』の概略と問題の所在 | ガイダンス |
| 第3回 | 第1～4章 | 発表と議論 |
| 第4回 | 第5～7章 | 発表と議論 |
| 第5回 | 『ネット炎上の研究』の概略と問題の所在 | ガイダンス |
| 第6回 | 第1章 | ソーシャルメディアと炎上 |
| 第7回 | 第2章 | 炎上の事例研究 |
| 第8回 | 第3章 | 炎上の社会的コスト |
| 第9回 | 第4章 | 炎上のメカニズム |
| 第10回 | 第5章 | 炎上参加者の実態 |
| 第11回 | 第6章 | 炎上の歴史的理解 |
| 第12回 | 第7章 | サロン型 SNS |
| 第13回 | 第8章 | 炎上への社会的対処 |
| 第14回 | 授業のまとめ | 総括議論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

普段からメディア関係のニュースに関心を持ってください。

【テキスト（教科書）】

佐藤健志・藤井聡『対論「炎上」日本のメカニズム』（文春新書）
田中辰雄・山口真一『ネット炎上の研究』（勁草書房）

【参考書】

授業中に適宜支持する

【成績評価の方法と基準】

平常点（40％）＋レポート発表・議論への参加（60％）

【学生の意見等からの気づき】

受講者の修論研究テーマをできる限り授業に反映させます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>メディア論
<研究テーマ>メディア文化論
<主要研究業績>『アイドル工学』『フリッパーズテレビ～TV文化の近未来形』『パンドラのメディア～テレビは時代をどう変えたのか』など

【Outline and objectives】

Study of SNS Communication

取材文章実習

高瀬 文人

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

取材文章とは「事実に基づいた思考とその表現」と言い表すことができる。事実を集め、評価し、導き出される結論を展開し、適切に表現する方法は、ジャーナリズムや学問に限らず全ての思考の基本であり、その重要性はますます高まっている。この授業ではジャーナリズムの文章（取材文章）を自分の思考法とリンクして身につけ、受講者の「学びのスキル」とする。

【到達目標】

- ・取材文章がどのような構造でできているかを分析し、理解できる。
- ・新聞、雑誌、書籍、ウェブなどの媒体ごとに、文章の特徴を理解できる。
- ・問題意識、事実の見かた、収集と整理、論理の展開と論証の基本的な技術を身につける。
- ・事実の確認と評価の方法を理解できる。
- ・インタビューをはじめとする取材方法を学ぶ。
- ・学んだ方法論をもとに、事実を知らせる文章を書く。
- ・学んだ方法論をもとに、複数の事実から新しい価値を生み出す文章を書く。
- ・他者が書いた文章を読解し、校正し、向上のための方針を立てる。
- ・媒体に合わせた発信方法を考え、文章を書き、仕上げる。
- ・取材者・表現者としての自らとメディア、そして社会との関わり合いについて考えられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

「書く」ことで思考を深める授業の特性上、全体を通じて時間内に、あるいは課題として短い作文、あるいは取材に関連する簡単な作業を課し、それについての討論・添削を予定している。授業は基本的に討論形式とし、講師と受講者、または受講者同士の討論を活発化することで気づきや深まりを期待する。また、文法などの短いレクチャーを適宜行い、より文章のスキルを高められるように授業を設計する。受講生の関心などを考慮し、授業計画を変更する場合がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-----|-------------------------------------|---|
| 第1回 | ジャーナリズムの文章とその思考法 | 新聞・雑誌記事を題材に、記事や新聞紙面・雑誌レイアウトの見せ方などの構造を分析し、そこにどのような思考や意図が含まれているかを知る。 |
| 第2回 | 表現方法の構造と変化① 新聞・放送・雑誌・書籍 | メディアごとの記事や表現方法の特徴と歴史の中での変化を知る。また、それぞれの文章の違いを知る。 |
| 第3回 | 表現方法の構造と変化② ネット媒体の勃興とレガシーメディアの変容 | デジタルメディアの歴史と情報の検索・伝播の構造を知り、旧来のメディアがどう変容しているかを知る。 |
| 第4回 | 問題意識、事実の収集・分析、展開と論証 | 最近の記事やメディアをめぐる状況の実例から、記事の基本的構造を知る。必要な要素を整理し、自分が記事を書く際のスキルとして意識化できる。 |
| 第5回 | フェイクニュースとその攻防——事実を確認するには | 「フェイクニュース」は、意図的なデマとして流される場合も多いが、きちんと仕事をしていても作ってしまうことがある。防ぐポイントは事実の裏付けにある。その手法を学び、簡単な実践を試してみる。 |
| 第6回 | 取材文章思考①テーマとリサーチ | 取材の出発点である「発想」、方向性を決めるための情報収集である「リサーチ」はどのようにしたらよいか、どんな手段があるか。簡単な実践をしながらそれらの「方法」を身につける。 |
| 第7回 | 取材文章思考②取材と情報整理 | 「取材」とは何をするのか。取材文章思考①での準備を踏まえて取材計画をどのように立て、実行するかを、「取材執筆実習」の回に向けて計画する。また、取材をどのように記録し、情報を整理するかを学ぶ。簡単なワークショップを行う予定。 |
| 第8回 | 取材文章思考③伝えるための文章の構造・執筆のルール | 取材で得、整理した事実を組み立て、執筆の方向性を決め、執筆にかかる。その論理の組み立てと、文章の基本について、簡単なワークショップを行う中で学ぶ。 |

| | | |
|------|-------------------------|---|
| 第9回 | 取材執筆実習①テーマ設定とリサーチの実際 | この回から13回まで、受講生はテーマを設定して取材文章を仕上げ、発信する実践を行う。テーマ設定の問題意識と、それを取り上げる必然性を説明できるように考え、発表する。必要なりサーチを行う。 |
| 第10回 | 取材執筆実習②取材・インタビューの実際 | 講師が設定するテーマにより、実際にインタビュー（被取材者）にインタビューし、取材のノウハウを学ぶ。 |
| 第11回 | 取材執筆実習③情報整理と執筆の実際 | 取材で得た情報を整理し、筋書きにまとめ、執筆する作業を行う。授業時間内に終えることができない場合は、課外の時間を使って仕上げることも想定される。 |
| 第12回 | 取材執筆実習④発信を踏まえた編集実習 | 他の受講生が仕上げた原稿を、編集者の立場になって読み、校正し、よりよい内容になるよう添削・アドバイスを。受講生はそのアドバイスに従い、自らの原稿をさらにブラッシュアップする。 |
| 第13回 | 取材執筆実習⑤活字媒体の発信、ネット媒体の発信 | 新聞、雑誌、放送、ネットなど、媒体によって適した文章の書き方がある。自分の記事をそれぞれの媒体で発信することを考えて、バリエーションを作ってみる。 |
| 第14回 | 取材スキルとジャーナリズム、そして社会 | 講義全体を通して得たスキルを振り返り、受講生自身の、これからのものの見方、考え方、表現のしかたにどう影響したかを考える。それを踏まえ、ジャーナリズムの社会における役割、さらに表現者としての自らのあり方について考えを進める。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

基本的に授業時間内にすべての作業ができるようにする予定だが、取材の整理や原稿執筆段階で課外の時間を使うことが想定される。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。実習で使用する参考書は適宜案内するが、必ずしも購入する必要はない。

【参考書】

『(新版) 日本語の作文技術』(本多勝一著、朝日文庫) 『大人のための国語ゼミ』(野矢茂樹著、山川出版社) 『報道記者のための取材基礎ハンドブック』(西村隆次著、リーダーズノート) 『校正記号の使い方』(原稿編集ルールブック) (ともに日本エディタースクール)

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献度(50%)。討論で貢献のある学生にはさらに加点する。取材文章の評価(50%)。文章の評価は、文章の完成度とともに、問題設定や情報収集の方法や思考プロセスとその過程、さらに表現に意を払っているかに重点を置く。

【学生の意見等からの気づき】

授業の目的である「問題意識の立て方」「事実の見かた・評価のしかた」「展開・結論づけ」について、受講生は達成できていると考えられる。今期は授業に文法など文章テクニックの短い講義・実習を織り込み、より受講生の実力を高められる工夫を行いたい。

【学生が準備すべき機器他】

スマホ、タブレット、PCなど、ネットに接続できる機器があるとよい。

【その他の重要事項】

教員は現役の記者、ノンフィクションライター、雑誌・書籍編集者、校正者として幅広い領域で活動しており、いま現在の実例を用いて、多様な観点をふまえて受講者と討論しながら取材文章に必要な思考と技術を学べるよう授業を設計している。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

調査報道の雑誌記者、ノンフィクションライターとして取材を行っている。雑誌編集者・単行本編集者・校正者として編集業務にも就いている。

<研究テーマ>

調査報道の現代的あり方、リサーチ教育

<主要研究業績>

『リーガル・リサーチ』2003年、日本評論社

『ひと目でわかる六法入門(改訂版)』2018年、三省堂

『鉄道技術者 白井昭』2012年、平凡社

【Outline and objectives】

Story in Journalism Can be expressed as "It was thought based on the fact and its expression." The way to gather facts, evaluate the derived conclusions and express them properly is fundamental not only for journalism and academic things but also for all ideas, its importance is increasing more and more I will. In this classroom, you will master the sentences of journalism (writing interviews) linked with your own way of thinking. It aims at "learning skills".

SOC500E1 - 2213

調査報道実習2

川島 浩晋

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近年、Evidence Based Policy Makingを始め、Evidence Based Decision Making、すなわちデータ及びデータ分析に基づく意思決定とその方法論が社会的・市場的価値を増している。本科目は、データ分析の枠組みと考え方から実装までを習得することを目的とし、そのための道具としてプログラミング言語 Python を実習形式で習得することを中心とする。合わせて、Decision Based Evidence Making に陥らないように、仮説検証型プロセスについて言及しつつ、データ分析の枠組みや考え方の講義から公的統計などの構造化データおよびソーシャルメディアのテキストデータのような非構造化データの取得と加工から集計・考察などの分析の実習までを行う。なお、本講義では、上記の趣旨を学習するための題材に関しては、受講生からのリクエストに可能な限り応える。受講予定者が「プログラミングでこういうことをしてみたい」という想定がある場合は、事前に相談を受け付けることによって、取り入れる。

【到達目標】

本科目は、実習形式にてプログラミング言語 Python を習得することを土台とし、Python を用いた具体的な構造化・非構造化データの分析を行うことで、データ分析の枠組みと考え方から実装までを習得し、「データと分析に基づいた主張」を理解できるようにする。を指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

各自のノート PC を用いた実習が中心である。

説明 1→実習 1→解説 1→説明 2→実習 2…の繰り返しを軸として講義が進む。

リアクションペーパーと小課題によって、理解度を共有する。

理解度によっては説明を変更して再度行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

春学期集中

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|----------------------------|-------------------------------------|
| 第1回 | Python プログラミング (1) | プログラミング環境の確認と Python コーディングのチュートリアル |
| 第2回 | Python プログラミング (2) | 変数の種類とプログラムの流れの制御 |
| 第3回 | Python プログラミング (3) | ファイルの読み書きと簡単な集計、課題の出題 |
| 第4回 | Python プログラミング (4) | 課題の共有とここまでの復習としての実習 |
| 第5回 | Python プログラミング (5) | コードの設計と読みやすい書き方 |
| 第6回 | web・ソーシャルメディアからのデータの取得 (1) | web ページのクロールとスクレイピングの概要 |
| 第7回 | web・ソーシャルメディアからのデータの取得 (2) | web ページのクロールとスクレイピングの実習および課題 |
| 第8回 | 仮説形成と分析計画 | 仮説形成と分析計画 |
| 第9回 | 分析プロジェクトの立案 | 分析プロジェクトの立案 |
| 第10回 | web・ソーシャルメディアからのデータの取得 (3) | ソーシャルメディアデータの取得方法の説明 |
| 第11回 | web・ソーシャルメディアからのデータの取得 (4) | ソーシャルメディアデータの取得方法の実習 |
| 第12回 | テキストの計量分析 (1) | テキストデータの計量分析の概要 |
| 第13回 | テキストの計量分析 (2) | テキストデータの計量分析の実習 |
| 第14回 | テキストの計量分析 (3) | テキストデータの計量分析のプログラミング、課題の出題 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本講義では各自のノート PC を用いた実習を行うため、事前のセットアップが必須である。セットアップのための手順を記した資料は用意されており、セットアップにおいて不明な点等はメールで問い合わせることができる。

合わせて、準備学習の資料も送付されるので読んでおくことを推奨する。理解確認と成績評価のためのレポートに関しては【成績評価の方法と基準】に記載する。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した資料を印刷して配布するため必須な教科書はない。推奨する書籍に関しては【参考書】項目に記載する。

【参考書】

講義で行う実習に関連した（講義資料の作成に当たって用いた）書籍として下記の2冊を特記する。

・柴田淳 著、みんなの Python 第4版、SB クリエイティブ

・樋口耕一 著、社会調査のための計量テキスト分析、ナカニシヤ出版

また、データ分析の理屈や方法に関する書籍は近年数多く出版されており、講義の中でも何冊かを取り上げ、それぞれがどういう範囲のことが書かれているものであるかを紹介する予定である。その一部を列挙すると、

- ・石川博 著、ソーシャル・ビッグデータサイエンス入門、コロナ社
- ・あんちべ 著、データ解析の実務プロセス入門、森北出版
- ・金明哲 著、テキストデータの統計科学入門、岩波書店
- ・Ryan Mitchell 著、Python による Web スクレイピング、オライリー・ジャパン
- ・加藤耕太 著、Python クローリング&スクレイピング、技術評論社
- ・クジラ飛行機 著、Python によるスクレイピング&機械学習、ソシム
- ・小町守 監修、自然言語処理の基本と技術、翔泳社
- ・畑農鋭矢・水落正明 著、データ分析をマスターする 12 のレッスン、有斐閣
- ・伊藤公一朗 著、データ分析の力 因果関係に迫る思考法、光文社
- ・森田果 著、実証分析入門 データから「因果関係」を読み解く作法、日本評論社
- ・中室牧子・津川友介 著、「原因と結果」の経済学、ダイヤモンド社
- ・マーク・ジェフリー 著、データ・ドリブン・マーケティング、ダイヤモンド社

【成績評価の方法と基準】

レポート課題 100%

なお、レポートは 1 回のみではなく、講義内の演習と講義後の宿題として複数回行われる。提出されたものを全てを総合して成績評価を行う。課題は、プログラミングそのものの課題と、プログラミングを用いて何かを調べたり何かを分析したりする課題に分かれる。課題に取り組んだ結果、講義の理解に不明点がある場合は、次回以降の講義の中で補足説明を行う。補足説明に関しては受講生からのリクエストも受け付ける。そのため、採点としては最初の出題、提出のみではなく、不明点に関する質問や補足説明等を経た結果、理解できたことも評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

本講義は少人数講義であることから、各受講生の個別の理解度に合わせて質疑を行う時間は充分にあるが、受講生が不明点を言語化できるとは限らないため、受講生が理解度を顕在化させ、教える側はそれを把握して説明の方略を変更しやすいようにするため、講義中に成績と結びつかない小課題や、加点しやすい小課題を所要所で実施する。

【学生が準備すべき機器他】

授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）に記載した。

【その他の重要事項】

本講義では、プログラミングの未経験者を想定しているため、他言語の経験等は全く必須ではない。

一方、データ分析の実習であることから、コンピュータそのものに慣れていないひと、これまで受けた講義や学外学習で Excel 等のツールを用いた単純集計も行ったことがなく量的概念を持たないひと、は、説明を聞いたときに戸惑う可能性が高く、不明点を言語化する努力がより多く必要になる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 科学計量学、計量書誌学

<研究テーマ> 日本における学術論文著者の構造、学術研究者の雇用市場、科学技術関係政策文書の変遷の計量

【Outline and objectives】

The objectives of this practical training is

1. To acquire programming skill. It consists of

1-1. the skill of specific programming language(We use Python in this lecture)

1-2. the skill of algorithm(how to order our demand to the computer)

2. Introducing how to analyze the data for your discussion.

SOC500E1 - 2214

オーディエンス調査実習

土橋 臣吾

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

デジタルメディアのユーザーに関するエスノグラフィックな調査を行い、その知見に基づいて、ウェブサービスやアプリの企画立案を行います。マスメディアのオーディエンスではなく、ウェブやモバイルのユーザーを調査対象とすること、またいわゆる社会調査ではなく、企画立案のための調査であることを承知しておいて下さい。

【到達目標】

デジタル化した情報環境の影響を分析する視点の獲得を目指します。その上で、現存する各種サービスやアプリケーションの分析、ユーザーの行動調査などを行い、それに基づいた企画の能力を身につけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

エスノグラフィックなユーザ調査を実施し、その知見に基づいた独自サービスやアプリの企画立案を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|------------|-------------------------|
| 1 | イントロダクション | 授業の目標／課題の設定について |
| 2 | 文献輪読（1） | 指定文献の輪読 |
| 3 | 文献輪読（2） | 指定文献の輪読 |
| 4 | 文献輪読（3） | 指定文献の輪読 |
| 5 | 調査方法検討（1） | 文献の理解を踏まえて、ユーザ調査の方法を考える |
| 6 | 調査方法検討（2） | 文献の理解を踏まえて、ユーザ調査の方法を考える |
| 7 | 調査視点の獲得（1） | 調査のポイントを定める |
| 8 | 調査視点の獲得（2） | 調査のポイントを定める |
| 9 | 調査結果の共有 | 調査結果を共有する |
| 10 | 調査結果の発表 | 調査結果のプレゼンテーション |
| 11 | 企画会議（1） | 独自サービス／アプリ企画のアイデア出し |
| 12 | 企画会議（2） | 企画コンセプトの決定 |
| 13 | 企画会議（3） | 独自サービス／アプリの詳細な企画内容を決定する |
| 14 | 企画発表 | 企画案の最終プレゼンテーション |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

序盤に行う文献輪読では、各自文献の読み込み、担当者はレジュメの作成などを行います。また、分析や調査の作業の多くは課外の時間を使って行うことになります。さらに、企画の段階でも必要に応じて課外の作業が相当程度必要になります。

【テキスト（教科書）】

授業内で指示します。

【参考書】

授業内で指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、各期の最終課題 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

毎回の授業でノートパソコンを使います。

【担当教員の専門分野等】

専門領域：メディア論、情報環境論

研究テーマ：オーディエンス研究／ユーザー研究

主要研究業績：

金井明人・津田正太郎・土橋臣吾編（2013）『メディア環境の物語と公共圏』法政大学出版局

土橋臣吾・南田勝也・辻泉編（2011）『デジタルメディアの社会学：問題を発見し、可能性を探る』北樹出版

上野直樹・土橋臣吾編（2006）『科学技術実践のフィールドワーク：ハイブリッドのデザイン』せりか書房

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students acquire the basic skills and knowledge to design the user experience of digital media. It also enhances the development of students' skill in ethnographic research of digital media use.

SOC500E1 - 0300

学際研究 1 (平和構築と移行期正義)

二村 まどか

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

独裁体制下の多大な人権侵害、また紛争下の戦争犯罪や大量虐殺を経験した社会では、民主化や平和構築のプロセスにおいて、過去の大規模犯罪とどのように向き合うかが問題となる。人権侵害や戦争犯罪の責任者を罰するの、あるいは赦すの。何が起きたかを究明すべきか、あるいは忘れるべきか。本講義では、平和構築分野で重要視されているこの「移行期正義」の問題を扱い、その政治的、法的、道義的ジレンマについて考察する。

【到達目標】

1980年代の民主化プロセスから今日に至るまで、移行期正義の名の元に行われてきた様々な試みを考察しながら、移行期正義とは何か、その問題の所在は何か、そしてどのようにその問題に取り組むべきかについて、学際的に分析し、理解を深めることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

移行期正義に関する基本文献の講読と同時に、1980年代のラテンアメリカにおける民主化プロセス、1990年代以降の武力紛争後の平和構築、そして21世紀に入ってからの国際刑事裁判所の働きを事例に、移行期正義の概念と実践について学ぶ。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|---------------------------------------|------------------------|
| 第1回 | イントロダクション | 授業の進め方についてのガイダンス |
| 第2回 | 移行期正義とは何か | 概念と問題の所在 |
| 第3回 | 移行期正義の原点 | ラテンアメリカにおける民主化 |
| 第4回 | 事例①アルゼンチン | 裁判と真実委員会の働き |
| 第5回 | 事例②チリ | 真実委員会とピノチェト訴追問題 |
| 第6回 | 移行期正義と和解 | 概念の整理と実践 |
| 第7回 | 冷戦後の移行期正義 国際社会と国際刑事裁判 事例③ユーゴスラビア紛争 | 国際戦犯法廷 (ICTY) の設立 |
| 第8回 | 事例④ルワンダのジェノサイド | 国際戦犯法廷 (ICTR) とガチャチャ法廷 |
| 第9回 | 事例⑤アパルトヘイト後の南アフリカ | 真実和解委員会と「修復的正義」 |
| 第10回 | 事例⑥シエラレオネ | 「混合法廷」の設立① |
| 第11回 | 事例⑦カンボジア | 「混合法廷」の設立② |
| 第12回 | 事例⑧東ティモール | 多様な移行期正義のメカニズム |
| 第13回 | 事例⑨ウガンダ | 国際正義と現地正義の相克 |
| 第14回 | まとめ | 移行期正義の問題点について |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

指定されたテキストを読んで授業にのぞむことが求められる。

【テキスト (教科書)】

適宜授業で指定する。

【参考書】

適宜授業で指定する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 (発表、ディスカッションへの参加など: 40%)

期末レポート (60%)

【学生の意見等からの気づき】

これまでのところ、特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/33/0003201/profile.html>

【Outline and objectives】

In the aftermath of armed conflicts or during democratization processes, societies often face challenges of transitional justice: how to acknowledge and reckon with their egregious past of war crimes and gross human rights abuses. This course focuses on various issues of transitional justice and examines their political, legal and moral dilemmas.

SOC500E1 - 0301

学際研究 2 (認知科学・人工知能)

金井 明人

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

認知科学・人工知能に関する近年の研究論文などの輪読を行ない、最新研究について検討し、議論することを目的とする。特に物語と映像、コミュニケーションに関する認知科学と人工知能の最新研究に注目する。

【到達目標】

認知科学・人工知能の最新研究の動向を理解することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

文献を輪読し、議論する。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|----------|-------------------------|
| 第1回 | ガイダンス | 本授業の内容について |
| 第2回 | 文献解説 | テキストについての解説 |
| 第3回 | 文献輪読 1 | 文献に関する議論 |
| 第4回 | 文献輪読 2 | 文献に関する議論 |
| 第5回 | 文献輪読 3 | 文献に関する議論 |
| 第6回 | 文献輪読 4 | 文献に関する議論 |
| 第7回 | 文献輪読 5 | 文献に関する議論 |
| 第8回 | 最新研究紹介 | 物語に関する最新研究の紹介を行なう。 |
| 第9回 | 最新研究紹介 2 | 前回をふまえ、議論する。 |
| 第10回 | 文献輪読 6 | 再度、文献に関する議論 |
| 第11回 | 文献輪読 7 | 文献に関する議論 |
| 第12回 | 文献輪読 8 | 文献に関する議論 |
| 第13回 | 最終発表 1 | これまでの議論をふまえたまとめの発表 |
| 第14回 | 最終発表 2 | 引き続き、これまでの議論をふまえたまとめの発表 |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

テキストを自習しておくこと。それ以外の準備については開講時に指示する。

【テキスト (教科書)】

学会誌『認知科学』『人工知能』『Cognitive Science』など

【参考書】

小方孝・川村洋次・金井明人 (2018)『情報物語論: 人工知能・認知・社会過程と物語生成』白桃書房

【成績評価の方法と基準】

発表 (30%)・議論 (30%)・資料内容 (40%)などを、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の希望する領域に近い論文を扱っていきたい。

【担当教員の専門分野】

<専門領域> 映像と物語に関する認知科学・人工知能・修辭学
<研究テーマ>

- 1) 映像と物語における認知的な切断と違和感、その修辭に関する情報物語論
- 2) リアリティ・ノンストーリーとノスタルジア
- 3) ドキュメンタリーにおける物語
- 4) 1)~3) の映像環境への展開

<主要研究業績>

(共著)『情報物語論: 人工知能・認知・社会過程と物語生成』白桃書房, 2018年 (共著) Computational and Cognitive Approaches to Narratology, IGI Global, 2016年
(共編)『メディア環境の物語と公共圏』法政大学出版局, 2013年
(共著)『物語論の情報学序説』学文社, 2010年
(共著)映像編集のデザイン - ストーリーと切断をめぐって - 『認知科学』17(3), 444-458, 2010年
(共編)『映像編集の理論と実践』法政大学出版局, 2008年

【Outline and objectives】

This course deals with the artificial intelligence, cognitive science, and narratology.

学際研究4（社会ネットワークと組織）

宇野 齊

Next, you experience basic analytical techniques on interactions between individuals, organizations, and networks in some analytical examples.

You can apply those theories and methods for your research.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会ネットワークと組織について、理論、分析手法、現象把握を学ぶ。

社会及び組織をネットワークとして捉え、そこに存在する個人、組織、ネットワークの相互関係とそこから生じる現象を、ネットワーク分析の手法で分析・把握できるよう、そのプロセスを提示する。合わせて、例示的にその現象分析を提示した上で、自らネットワーク分析ができるように指導する。

【到達目標】

社会ネットワーク現象と組織現象について、論理的に分析・考察・思考でき研究に適用できる準備を整える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回テーマに関する授業とレポートおよびディスカッションを中心としてすすめる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-----------------|----------------------------|
| 第01回 | ガイダンスとイントロダクション | 受講者との相互理解を深め、科目の内容などを確認 |
| 第02回 | システムとネットワーク | システム論、ネットワーク論、組織論の相互関係性を把握 |
| 第03回 | 社会ネットワーク1 | 基礎的な分析手法と指標 |
| 第04回 | 社会ネットワーク2 | ネットワーク情報の収集と分析 |
| 第05回 | 社会ネットワーク3 | パーソナルなネットワーク現象 |
| 第06回 | 社会ネットワーク4 | マス/ミドルレベルでのネットワーク現象 |
| 第07回 | 組織1 | 制度と認知、及び意思決定 |
| 第08回 | 組織2 | 組織の中の制度的ネットワーク |
| 第09回 | 組織3 | 組織の中の認知的ネットワーク |
| 第10回 | 社会ネットワークと組織1 | 社会の中のネットワークとしての組織 |
| 第11回 | 社会ネットワークと組織2 | 組織間ネットワーク |
| 第12回 | 社会ネットワークと組織3 | 社会ネットワークに生じる組織 |
| 第13回 | 電子メディアでのネットワーク1 | 閉鎖的ネットワーク |
| 第14回 | 電子メディアでのネットワーク2 | 開放的ネットワーク |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要に応じて授業支援システムに事前準備を提示する。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

担当教員が作成した資料を授業にて使用する。初回および必要に応じて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

中間かつ/または期末のレポート（60%）、授業中の参加度合及び授業後の授業支援システムによるコメント（40%）。その他の貢献は追加的に考慮する。

【学生の意見等からの気づき】

紹介する参考書等から、各自の目的に応じて、相当数の読み込みをすべき、との指摘があった。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システム、電子メールで情報を受発信する。大学付与メールアドレスを使うこと。

【その他の重要事項】

授業計画は授業展開と受講者の目的により若干変更があり得る。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会ネットワーク、組織行動科学、経営学

<研究テーマ>コンテンツ産業の組織と社会ネットワーク

<主要研究業績>宇野齊（2008）「組織とネットワーク」二神・日置編著、クラスター組織の経営学、中央経済社、第3章

【Outline and objectives】

In this course, you will learn theories and analysis methods of social networks and organizations.

First, you get various theories to think of societies and organizations as networks.

SOC500E1 - 0305

社会科学研究法 1

大崎 雄二

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生を対象とする。社会学、社会科学の基礎概念を再確認しながら、修士課程における学びの基軸、必要不可欠なアカデミック・リテラシーを具体的に確認し、習熟していく。

【到達目標】

情報・文献検索の方法、データ分析の基本、日本語論文作成の方法、プレゼンテーションの方法等を確認し、修士課程の学生に相応しい情報の収集と分析、再構築、発信が支障なくできるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

学生参加型のインタラクティブな演習、実習の形態とする。

教員からの問題提起と課題（基本的には隔週とする）に対し、学生が質問、回答しながらより深い理解と習熟へと進むことができるよう授業を構成する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------------|-----------------|
| 1 | アイス・ブレイキング | 授業内容の具体的な説明等 |
| 2 | 情報の整理と要約（1） | 論文の要約① キーワード |
| 3 | 情報の整理と要約（2） | 論文の要約② キーフレーズ |
| 4 | 情報の整理と要約（3） | 論文の要約③ 要約のポイント |
| 5 | レジュメの作成（1） | 作成のポイント① 内容 |
| 6 | レジュメの作成（2） | 作成のポイント② 形式 |
| 7 | プレゼンテーション（1） | レジュメを使う |
| 8 | プレゼンテーション（2） | スライドを使う |
| 9 | 情報、文献の検索と収集（1） | データベースの活用 |
| 10 | 情報、文献の検索と収集（2） | 付加情報と脚註 |
| 11 | 関連文献検索、参考文献一覧作成 | 参考文献の提示 |
| 12 | データ分析の基本 | データ収集、処理、分析の基礎 |
| 13 | 小論文の作成（1） | 構想の発表と議論① 発表 |
| 14 | 小論文の作成（2） | 構想の発表と議論② 議論と修正 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配布した資料については必ず一読し、不明の単語や術語は辞書で意味を調べ、きちんと理解しておく。

課題を作成し、「授業支援システム」から提出する。

【テキスト（教科書）】

特定の教科書は使用しない。

【参考書】

授業内でテーマごとに複数紹介していく。

【成績評価の方法と基準】

参加 40 % + 課題 60 % で評価したい。

【学生の意見等からの気づき】

よりきめ細かい個別対応を進めるとともに、さらに積極的な議論ができる場作りに努力する。積極的な提案や意見は常に大歓迎。

【学生が準備すべき機器他】

パーソナルコンピュータを使った実習をおこなう際には事前に通知し、支障のないようにする。

課題は「授業支援システム」から提出のこと。

【その他の重要事項】

放送記者としての現場での取材、報道の経験から、情報収集と検索、原稿執筆、わかりやすく効果的に伝えるスキルを詳細に伝授し、さらなるスキルアップを目指す。

【担当教員の専門分野等】

東アジア（現代中国）地域研究（国民統合、民族政策）

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of social sciences. It also enhances the development of foreign students' skill in making oral and literal presentation and self-regulated learning.

SOC500E1 - 0306

社会科学研究法 2

大崎 雄二

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生を対象とする。「社会科学研究法1」の履修を前提として授業を進める。修士課程の学生に必要なアカデミック・リテラシーを身につけ、自律的、批判的な学習、研究の主体として自立することを目指す。

【到達目標】

具体的なプレゼンテーションの方法等を確認しながら、修士課程の学生に相応しい情報の収集と分析、再構築、発信が十全にできるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

学生参加型のインタラクティブな演習、実習の形態とする。

教員からの問題提起と課題（基本的には隔週とする）に対し、学生が質問、回答、発表をしながらより深い理解と習熟へと進むことができるよう授業を構成する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------------|------------------|
| 1 | 小論文の発表、講評と議論（1） | 講評 |
| 2 | 小論文の発表、講評と議論（2） | 議論と修正 |
| 3 | 文献講読（1） | キーワードの確認 |
| 4 | 文献講読（2） | キーフレーズの確認 |
| 5 | 文献講読（3） | 要約のポイント |
| 6 | 文献講読（4） | 要約と表現 |
| 7 | 文献講読（5） | 機能的なまとめ |
| 8 | 文献講読（6） | 注釈の効能 |
| 9 | 文献講読（7） | 問題提起 |
| 10 | 文献講読（8） | 課題設定 |
| 11 | 文献講読（9） | 関連文献の検索 |
| 12 | 文献講読（10） | critical reading |
| 13 | 小論文構想発表（1） | 発表 |
| 14 | 小論文構想発表（2） | 講評と検討 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配布した資料については必ず一読し、不明の単語や術語は辞書で意味を調べ、きちんと理解しておく。

課題、提出物は事前に「授業支援システム」から提出すること。

【テキスト（教科書）】

開講後具体的に指示する。

【参考書】

授業内でテーマごとに複数紹介していく。

【成績評価の方法と基準】

参加 50 % + 課題 50 % で評価したい。

【学生の意見等からの気づき】

よりきめ細かい個別対応を進めるとともに、さらに積極的な議論ができる場作りに努力する。積極的な提案や意見は常に大歓迎。

【その他の重要事項】

放送記者としての現場での取材、報道の経験から、情報収集と検索、原稿執筆、わかりやすく効果的に伝えるスキルを詳細に伝授し、さらなるスキルアップを目指す。

【担当教員の専門分野等】

東アジア（現代中国）地域研究（国民統合、民族政策）

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of social sciences. It also enhances the development of foreign students' skill in making oral and literal presentation and self-regulated learning.

SOC500E1 - 0307

外国書講読 1 (英語)

上林 千恵子

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

移民政策の基本概念を、世界的に有名な教科書を使用して学ぶ。そして、移民の送り出しと受け入れの双方が、社会をどのように変化させたのか、主要な社会学の概念を用いて検討する。

【到達目標】

英語論文の速読能力を高める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

担当する章を決めて、各自、レジュメを作って発表という輪読形式をとる。そのため出席が肝要。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|--------------|--|
| 1 | ガイダンス① | テキストの紹介と、進め方の説明. 受講許可科目なので必ず出席すること |
| 2 | ガイダンス② | テキストの紹介と、進め方の説明 |
| 3 | 序論① 現代の移民 | 現代の移民の概観 |
| 4 | エスニシティ | エスニシティの多様性を知る |
| 5 | 人種と人種差別 | 定義とその概念の使い方 |
| 6 | ジェンダーと移住 | 移民の中で果たすジェンダーの役割 |
| 7 | 文化とアイデンティティ | 多様なエスニシティの存在が、社会的統合のために、人為的なアイデンティティ構成を必要とする |
| 8 | 国家と国民 | 移民を国家からとらえた場合のモデルは多様 |
| 9 | シチズンシップ | 国家に統合できない永住外国人の権利付与の範囲を考察 |
| 10 | 移民と経済発展 | 移民がもたらす開発と社会変容 |
| 11 | 移民送り出し条件の形成 | 開発途上国の経済発展の影響と移住との関係 |
| 12 | 移民政策の目的 | 送り出した移民からの海外送金の役割 |
| 13 | アジア地域の国際移動 1 | アジアから欧米への移民 |
| 14 | アジア地域の国際移動 2 | アジア地域内での国際労働移動 |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

テキストを予習したうえで参加すること。4年生で就職活動のためにやむを得ず欠席する場合は、テキストの該当箇所の訳出あるいは配布した英語論文を訳出して提出すればよい。

【テキスト (教科書)】

Castles, S., Hein de Haase & Miller, M., 2014, *The Age of Migration 5th ed.*, Palgrave Macmillan

【参考書】

授業内で適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 60 %、テスト 20 %、期末レポート 20 %。
平常点は、(出席自体ではなく) テキストの的確な訳出、討議への参画等の、授業への適切な参画により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし。

【その他の重要事項】

この科目は受講許可科目であり、春学期の初回の授業に出席し、ガイダンスで入手した受講許可カードによる受講許可手続きを行った者しか受講できないので、十分注意すること。
なおこの科目は春学期・秋学期を通じて履修することが望ましい。
扱う項目の順序は適宜入れ替えることがある。

【Outline and objectives】

International migration is a central feature of the contemporary world. The class focus on mainly how this increasing migration changes the world, both sending and receiving societies.

SOC500E1 - 0308

外国書講読 2 (英語)

上林 千恵子

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

移民政策の基本概念を、世界的に有名な教科書を使用して学ぶ。また世界の移民政策の概観を理解する。

【到達目標】

英語論文の速読能力を高める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

担当する章を決めて、各自、レジュメを作って発表という輪読形式をとる。そのため出席が肝要。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-------------------------|-------------------------------|
| 1 | オリエンテーション (秋学期からの受講者向け) | テキストの紹介と、進め方の説明 ※ 必ず出席すること |
| 2 | アジアの移民 | 東アジア、東南アジアの労働移動 |
| 3 | 高度技能移民と留学生 | 高度人材の移動の実態を知る |
| 4 | 先進国の労働需要 | 労働力としての移民 |
| 5 | 先進国の労働市場における移民の地位 | 移民で構成されている職業の内容 |
| 6 | リーマンショック時の移民の行動 | 経済危機が移民の帰国を促すか? |
| 7 | 難民 | 最近の大きな変化 |
| 8 | 不法就労者としての移民 | 移民管理の困難さ |
| 9 | 循環型移民受入れ制度 | 単純労働者の短期受け入れ方式の検討 |
| 10 | 移民産業と人身売買 | 移民産業の成立とブラックな側面 |
| 11 | 労働の変容と移民 | 技術革新は移民需要を低減するか |
| 12 | 移民の国内労働者への影響 | 国内労働者の雇用を奪うか |
| 13 | 労働力としてみた移民の特徴 | 受け入れ国の労働力構成に与える影響 |
| 14 | 21世紀の国際労働移動の展望 | 合法移民の統合強化とエスニシティの多様性の保障 |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

テキストを予習したうえで参加すること。4年生で就職活動のためにやむを得ず欠席する場合は、テキストの該当箇所の訳出あるいは配布した英語論文を訳出して提出すればよい。

【テキスト (教科書)】

Castles, S., Hein de Haase & Miller, M., 2014, *The Age of Migration 5th ed.*, Palgrave Macmillan

【参考書】

授業内で適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、テスト 50 %。
平常点は、(出席自体ではなく) テキストの的確な訳出、討議への参画等の、授業への適切な参画により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし。

【Outline and objectives】

International migration is a central feature of the contemporary world. The class focus on mainly how this increasing migration changes the world, both sending and receiving societies.

SOC500E1 - 0307

外国書講読1 (英語)

土倉 英志

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

社会心理学の英語論文を読む際につまづきの石となるもののひとつに、方法論の理解がある。たとえば、心理学実験の考えかた、実施手続き、データ収集後の分析手法(統計を含む)といったものである。英語を読むのが得意でも、英語論文を読みすすめることができないのは、こうした理解と関連している。方法論の理解があいまいなままでは、残念ながら「論文を読んだ」とは言えない。そこで本講義では、英文講読を通じて、社会心理学の考えかたの基礎を学んでいく。春学期は、とくに実験研究を扱う。

【到達目標】

- ・社会心理学の英語論文を読むための知識を身につける。
- ・社会心理学の研究手法を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

受講者による文献報告を中心に展開する。受講者ごとに、またはチームごとに担当の文献を割りあてる。担当者にはレジュメを作成し、報告してもらう。これを受けてディスカッションを行なう。必要に応じて教員が説明を行なう。スケジュールの前半では、社会心理学の古典的な研究を中心に学び、基本的な研究枠組みを理解することを目指す。中盤以降は、近年のシステム正当化理論の論文を読んでいく予定である。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|---------------|----------------------------|
| 1 | ガイダンス | 講義の概要の説明、自己紹介、役割分担 |
| 2 | 社会心理学の研究を読むとは | 社会心理学の研究を理解するために必要な基礎知識の紹介 |
| 3 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 4 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 5 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 6 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 7 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 8 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 9 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 10 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 11 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 12 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 13 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 14 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

- ・文献を報告する準備を行なう。レジュメは発表の1週間前に印刷し、配付する。適宜課される課題に取り組む。

【テキスト(教科書)】

- ・大坪庸介・スミス, A. (2017). 『英語で学ぶ社会心理学』. 有斐閣. (授業の前半に使用)
- ・近年のシステム正当化理論に関する英語論文(授業計画の中盤以降に使用)。論文はコピーを配付する。一例としてつき。Callan, M.J., Harvey, A.J., & Sutton, R.M. (2014). Rejecting victims of misfortune reduces delay discounting. *Journal of Experimental Social Psychology*, 51, 41-44.
- ・テキストの詳細は初回授業で説明するため必ず出席すること。

【参考書】

- ・授業内で適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点(文献報告と質疑応答・グループディスカッションへの参加)と授業内外で課す課題の質で判断する(100%)

【学生の意見等からの気づき】

- ・新規科目につきアンケートを実施していない。

【学生が準備すべき機器他】

- ・授業支援システムを利用する。

【その他の重要事項】

- ・授業計画や進めかたは、受講者のスキルや授業の展開に応じて変更することがある。

【Outline and objectives】

This course involves reading social psychology articles written in English. In the spring semester we focus on psychological experiments. The objective of this course is to develop reading skills in English and to acquire basic knowledge of central research method in social psychology.

SOC500E1 - 0308

外国書講読2 (英語)

土倉 英志

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

社会心理学の重要な研究手法のひとつにアクションリサーチ(AR)がある。ARは社会の改良、変革を目指す研究手法である。活動理論(Activity Theory)は社会の現実を変えることを念頭にいた研究枠組みのひとつであり、ARに位置づけることができる。活動理論をリードしている研究者であるYrjö Engeströmの著作の購読を通じて、活動理論のものの考えかた、アプローチを理解することを目指す。春学期には実験研究を取り上げたが、秋学期は、フィールド研究、アクションリサーチを扱う。

【到達目標】

- ・社会心理学の英語論文を読むための知識を身につける。
- ・社会心理学の研究手法を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

受講者による文献報告を中心に展開する。受講者ごとに、またはチームごとに担当の文献を割りあてる。担当者にはレジュメを作成し、報告してもらう。これを受けてディスカッションを行なう。必要に応じて教員が説明を行なう。スケジュールの前半では、古典的な研究を中心に学び、基本的な研究枠組みを理解することを目指す。中盤以降は、近年の活動理論の文献を読んでいく予定である。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-------------|--------------------------------|
| 1 | ガイダンス | 講義の概要の説明、自己紹介、役割分担 |
| 2 | アクションリサーチとは | アクションリサーチの研究を理解するために必要な基礎知識の説明 |
| 3 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 4 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 5 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 6 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 7 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 8 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 9 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 10 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 11 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 12 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 13 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |
| 14 | 文献講読 | 文献報告、質疑応答、集団討論 |

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

- ・文献を報告する準備を行なう。レジュメは発表の1週間前に印刷し、配付する。適宜課される課題に取り組む。

【テキスト(教科書)】

- ・Engeström, Y. (2018). *Expertise in Transition: Expansive Learning in Medical Work*. Cambridge University Press. (中盤以降に使用することを予定)
- ・テキストの詳細は初回授業で説明するため必ず出席すること。

【参考書】

- ・エンゲストローム, Y. (1999). 『拡張による学習』. 新曜社.
- ・エンゲストローム, Y. (2013). 『ノットワークする活動理論』. 新曜社.
- ・エンゲストローム, Y. (2018). 『拡張的学習の挑戦と可能性』. 新曜社.

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点(文献報告と質疑応答・グループディスカッションへの参加)と授業内外で課す課題の質で判断する(100%)

【学生の意見等からの気づき】

- ・新規科目につきアンケートを実施していない。

【学生が準備すべき機器他】

- ・授業支援システムを利用する。

【その他の重要事項】

- ・原則として、春学期と秋学期をセットで履修すること。授業計画や進めかたは、受講者のスキルや授業の展開に応じて変更することがある。

【Outline and objectives】

This course involves reading social psychology articles written in English. In the fall semester we focus on action research in specific studies by Yrjö Engeström. The objective of this course is to develop reading skills in English and to acquire basic knowledge of an important research method in social psychology.

SOC500E1 - 0307

外国書講読 1 (英語)

鈴木 宗徳

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

未邦訳の学術的な英文テキストを講読し、アカデミックな英文の読解に慣れる。

【到達目標】

英語の学術的文献を正確に理解する力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎週 2~3 ページずつテキスト講読を進めるが、受講者は必ず全訳を準備して授業に臨む。授業では一文ずつ訳読しながら理解を深めてゆく。文の構造や文脈について解説を加える。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
なし / No

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|-------------|-----------|
| 第 1 回 | イントロダクション | テキストの説明 |
| 第 2 回 | テキスト講読 (1) | 訳読と内容の検討 |
| 第 3 回 | テキスト講読 (2) | 訳読と内容の検討 |
| 第 4 回 | テキスト講読 (3) | 訳読と内容の検討 |
| 第 5 回 | テキスト講読 (4) | 訳読と内容の検討 |
| 第 6 回 | テキスト講読 (5) | 訳読と内容の検討 |
| 第 7 回 | テキスト講読 (6) | 訳読と内容の検討 |
| 第 8 回 | 中間テスト | 内容の理解度を測る |
| 第 9 回 | テキスト講読 (7) | 訳読と内容の検討 |
| 第 10 回 | テキスト講読 (8) | 訳読と内容の検討 |
| 第 11 回 | テキスト講読 (9) | 訳読と内容の検討 |
| 第 12 回 | テキスト講読 (10) | 訳読と内容の検討 |
| 第 13 回 | テキスト講読 (11) | 訳読と内容の検討 |
| 第 14 回 | テキスト講読 (12) | 訳読と内容の検討 |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

毎回必ず予習をすること。

【テキスト (教科書)】

Ian Hargreaves, Journalism: A Very Short Introduction, Oxford University Press([2003]2005) より、Capter1 と Chapter2 を扱う。テキストは初めに配布するが、担当者個人の DropBox からファイルをダウンロードできるので (<http://urx2.nu/PSsq>) 事前に 1~2 段落読んで難易度を確認しておくこと。

【参考書】

授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

中間テストの成績 (45%)、期末テストの成績 (45%)、授業への参加姿勢 (10%)

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【Outline and objectives】

In this course, students practice reading academic English texts.

SOC500E1 - 0308

外国書講読 2 (英語)

鈴木 宗徳

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

未邦訳の学術的な英文テキストを講読し、アカデミックな英文の読解に慣れる。

【到達目標】

英語の学術的文献を正確に理解する力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎週 2~3 ページずつテキスト講読を進めるが、受講者は必ず全訳を準備して授業に臨む。授業では一文ずつ訳読しながら理解を深めてゆく。文の構造や文脈について解説を加える。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
なし / No

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|-------------|-----------|
| 第 1 回 | イントロダクション | テキストの説明 |
| 第 2 回 | テキスト講読 (1) | 訳読と内容の検討 |
| 第 3 回 | テキスト講読 (2) | 訳読と内容の検討 |
| 第 4 回 | テキスト講読 (3) | 訳読と内容の検討 |
| 第 5 回 | テキスト講読 (4) | 訳読と内容の検討 |
| 第 6 回 | テキスト講読 (5) | 訳読と内容の検討 |
| 第 7 回 | テキスト講読 (6) | 訳読と内容の検討 |
| 第 8 回 | 中間テスト | 内容の理解度を測る |
| 第 9 回 | テキスト講読 (7) | 訳読と内容の検討 |
| 第 10 回 | テキスト講読 (8) | 訳読と内容の検討 |
| 第 11 回 | テキスト講読 (9) | 訳読と内容の検討 |
| 第 12 回 | テキスト講読 (10) | 訳読と内容の検討 |
| 第 13 回 | テキスト講読 (11) | 訳読と内容の検討 |
| 第 14 回 | テキスト講読 (12) | 訳読と内容の検討 |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

毎回必ず予習をすること。

【テキスト (教科書)】

Ian Hargreaves, Journalism: A Very Short Introduction, Oxford University Press([2003]2005) より、Capter3 と Chapter4 を扱う。テキストは初めに配布するが、担当者個人の DropBox からファイルをダウンロードできるので (<http://urx2.nu/PSsq>) 事前に 1~2 段落読んで難易度を確認しておくこと。

【参考書】

授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

中間テストの成績 (45%)、期末テストの成績 (45%)、授業への参加姿勢 (10%)

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【Outline and objectives】

In this course, students practice reading academic English texts.

SOC500E1 - 0307

外国書講読1 (仏語)

高橋 愛

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

ジャン=ポール・サルトルの『嘔吐』をテキストとし、自然なフランス語で書かれたまとまった量の文章を丁寧に読み、読解力を向上させます。『嘔吐』はサルトルの最初の長編小説で、1930年の兵役時代に書きはじめたエッセーが基になっており、主人公アントワーン・ロカンタンの日記の形式をとっています。物語構造を排除した小説としての斬新さ、作家の思想の原点、小説が書かれた時代背景等にも注目し、作品への理解を深めます。

【到達目標】

辞書を引き、授業内の教員の説明を通して、一般的なフランス語で書かれたある程度の長さの文章を読み、理解できるレベルを目指します。

中級で学んだ文法知識を生かしてイディオムや動詞、多義語などの幅を広げ、さまざまなフランス語の文章を読むうえで必要となる表現を身につけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、次週までに予習する箇所を教員が指定し、その箇所の文章を構文や時制などに注意しながら全員で読み進めます。(予習の範囲を定め、難しいと思われる部分はあらかじめ教員から説明するので安心して臨んでください。)

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------|--|
| 1 | イントロダクション | 授業の進め方、教科書の説明 |
| 2 | 講読、第1回目 | p.11-20 (授業全体で扱う範囲の目安。毎回の授業で、それぞれの範囲から宿題として予習する箇所を指定します。各範囲の内容については、教員が丁寧に説明します。) |
| 3 | 講読、第2回目 | p.21-30 |
| 4 | 講読、第3回目 | p.31-40 |
| 5 | 講読、第4回目 | p.41-50 |
| 6 | 講読、第5回目 | p.51-60 |
| 7 | 講読、第6回目 | p.61-70 |
| 8 | 講読、第7回目 | p.71-80 |
| 9 | 講読、第8回目 | p.81-90 |
| 10 | 講読、第9回目 | p.91-100 |
| 11 | 講読、第10回目 | p.101-110 |
| 12 | 講読、第11回目 | p.111-120 |
| 13 | 講読、第12回目 | p.121-130 |
| 14 | 講読、第13回目 | p.131-140 |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

毎回次週の授業で読む部分を指定するので、その部分を読んだうえで授業に臨んでください。

【テキスト (教科書)】

Jean-Paul Sartre, *La nausée*, Paris, Gallimard, 1972.

【参考書】

授業中に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

宿題の取り組みも含めた授業への参加度を重視し、平常点 (100%) で評価をします。

【学生の意見等からの気づき】

予習をして難しかった部分や訳出して分かりにくかったところは遠慮なく質問してください。

授業の内容に限らず、フランス語学習全般、フランスに関する質問についても (フランス語海外研修、留学等も含む) お答えします。

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/26/0002582/profile.html>

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students improve their French reading skills and reach higher levels.

SOC500E1 - 0308

外国書講読2 (仏語)

高橋 愛

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

春学期に引き続き、ジャン=ポール・サルトルの『嘔吐』をテキストとし、自然なフランス語で書かれたまとまった量の文章を丁寧に読み、読解力を向上させます。『嘔吐』はサルトルの最初の長編小説で、1930年の兵役時代に書きはじめたエッセーが基になっており、主人公アントワーン・ロカンタンの日記の形式をとっています。物語構造を排除した小説としての斬新さ、作家の思想の原点、小説が書かれた時代背景等にも注目し、作品への理解を深めます。

【到達目標】

辞書を引き、授業内の教員の説明を通して、一般的なフランス語で書かれたある程度の長さの文章を読み、理解できるレベルを目指します。

中級で学んだ文法知識を生かしてイディオムや動詞、多義語などの幅を広げ、さまざまなフランス語の文章を読むうえで必要となる表現を身につけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、次週までに予習する範囲を教員が指定し、その範囲の文章を構文や時制などに注意しながら全員で読み進めます。(予習の箇所を定め、難しいと思われる部分はあらかじめ教員から説明するので安心して臨んでください。)

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|----------|--|
| 1 | 講読、第1回目 | p.141-150 (授業全体で扱う範囲の目安。毎回の授業で、それぞれの範囲から宿題として予習する箇所を指定します。各範囲の内容については、教員が丁寧に説明します。) |
| 2 | 講読、第2回目 | p.151-160 |
| 3 | 講読、第3回目 | p.161-170 |
| 4 | 講読、第4回目 | p.171-180 |
| 5 | 講読、第5回目 | p.181-190 |
| 6 | 講読、第6回目 | p.191-200 |
| 7 | 講読、第7回目 | p.201-210 |
| 8 | 講読、第8回目 | p.211-220 |
| 9 | 講読、第9回目 | p.221-225 |
| 10 | 講読、第10回目 | p.226-230 |
| 11 | 講読、第11回目 | p.231-235 |
| 12 | 講読、第12回目 | p.236-240 |
| 13 | 講読、第13回目 | p.241-245 |
| 14 | 講読、第14回目 | p.246-250 |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

毎回次週の授業で読む部分を指定するので、その部分を読んだうえで授業に臨んでください。

【テキスト (教科書)】

Jean-Paul Sartre, *La nausée*, Paris, Gallimard, 1972.

【参考書】

授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】

宿題の取り組みも含めた授業への参加度を重視し、平常点 (100%) で評価をします。

【学生の意見等からの気づき】

予習をして難しかった部分や訳出して分かりにくかったところは遠慮なく質問してください。

授業の内容に限らず、フランス語学習全般、フランスに関する質問についても (フランス語海外研修、留学等も含む) お答えします。

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/26/0002582/profile.html>

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students improve their French reading skills and reach higher levels.

SOC500E1 - 0307

外国書講読 1 (独語)

西出 佳詩子

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

ドイツ語の読解力を養成する授業。既に学んだ初級文法の知識を活用しつつ、語彙や表現を習得しながら、文の構造を正しく把握してテキストを正確に読む力を養います。

【到達目標】

ある程度長さのある時事的なテーマのテキストを読み、文章の構造や内容を的確に把握することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

ドイツ語圏の文化や社会、歴史に関するテーマに基づいた時事的なテキストを読みます。テーマによっては、日本とドイツ語圏の国々との比較も行います。その際、受講生にはテーマに関する調べ作業を行ってもらい、授業内で報告してもらおうことがあります。また、独検 2 級、準 1 級、Goethe-Zertifikat B1, B2 合格を目指す場合には、その対策として練習問題等を授業内でとりあつかいます。なお、授業計画は授業の進み具合によって、若干の変更があり得ます。※本授業を受講するにあたり、独検 3 級合格程度のレベルに達していることが望ましい。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------------------------|---|
| 1 | 導入 | 授業説明、自己紹介等 |
| 2 | Lektion 1 -Natur- | Der Wolf kehrt zurück |
| 3 | Lektion 2 -Natur- | Insektensterben in Deutschland (1) |
| 4 | Lektion 2 -Natur- | Insektensterben in Deutschland (2) |
| 5 | Lektion 3 -Geschichte- | Der Dreißigjährige Krieg - ein deutsches Trauma (1) |
| 6 | Lektion 3 -Geschichte- | Der Dreißigjährige Krieg - ein deutsches Trauma (2) |
| 7 | Lektion 4 -Geschichte- | Karl Marx zum 200. Geburtstag (1) |
| 8 | Lektion 4 -Geschichte- | Karl Marx zum 200. Geburtstag (2) |
| 9 | 独検、Goethe Zertifikat にチャレンジ | 独検 2 級、Goethe Zertifikat B1/B2 の問題 |
| 10 | Lektion 5 -Kultur- | 150 Jahre Reclams Universal-Bibliothek |
| 11 | Lektion 6 -Kultur- | Die Augsburger Puppenkiste hat Geburtstag |
| 12 | Lektion 7 -Kultur- | Echo geht an Gangsta-Rapper: Aus für namhaften Musikpreis |
| 13 | Lektion 8 -Gesellschaft- | Sehnsucht nach dem Mittelalter (1) |
| 14 | Lektion 8 -Gesellschaft- | Sehnsucht nach dem Mittelalter (2) |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

毎回、テキストを予習してくる。テーマに関する調べ作業を行うこと。

【テキスト (教科書)】

Raab, Andrea / Ishii, Toshiko (2019) *Neuigkeiten aus Deutschland 2017/18* ASAHI Verlag (『時事ドイツ語 2019 年度版』朝日出版社)

【参考書】

授業中に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

授業における取り組みと参加状況 (40%) と小テスト (60%) にもとづいて評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者のレベルや関心に柔軟に対応したい。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students acquire the reading comprehension of German. At the end of the course, participants are expected to grasp a construction of Text definitely, read a text exactly while learning vocabulary and expression, utilizing knowledge of the elementary grammar.

SOC500E1 - 0308

外国書講読 2 (独語)

西出 佳詩子

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

ドイツ語の読解力を養成する授業。既に学んだ初級文法の知識を活用しつつ、語彙や表現を習得しながら、文の構造を正しく把握してテキストを正確に読む力を養います。

【到達目標】

ある程度長さのある時事的なテーマのテキストを読み、文章の構造や内容を的確に把握することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

ドイツ語圏の文化や社会、歴史に関するテーマに基づいた時事的なテキストを読みます。テーマによっては、日本とドイツ語圏の国々との比較も行います。その際、受講生にはテーマに関する調べ作業を行ってもらい、授業内で報告してもらおうことがあります。また、独検 2 級、準 1 級、Goethe-Zertifikat B1, B2 合格を目指す場合には、その対策として練習問題等を授業内でとりあつかいます。なお、授業計画は授業の進み具合によって、若干の変更があり得ます。※本授業を受講するにあたり、独検 3 級合格程度のレベルに達していることが望ましい。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-----------------------------|---|
| 1 | Lektion 9 -Gesellschaft- | Pflegenotstand in Deutschland (1) |
| 2 | Lektion 9 -Gesellschaft- | Pflegenotstand in Deutschland (2) |
| 3 | Lektion 10 -Sport- | Fußballweltmeisterschaft 2018 in Russland |
| 4 | Lektion 11 -Wirtschaft- | Japan und die EU schließen Freihandelsabkommen (1) |
| 5 | Lektion 11 -Wirtschaft- | Japan und die EU schließen Freihandelsabkommen (2) |
| 6 | 独検、Goethe-Zertifikat にチャレンジ | 独検 2 級、準 1 級、Goethe Zertifikat B1, B2 等の練習問題 |
| 7 | Lektion 12 -Wirtschaft- | Die Deutschen und die Börse |
| 8 | Lektion 12 -Wirtschaft- | Politiksystem in Deutschland |
| 9 | Lektion 13 -Politik- | Neue Regierung in der Krise (1) |
| 10 | Lektion 13 -Politik- | Neue Regierung in der Krise (2) |
| 11 | Lektion 14 -Reise- | Trend aus Japan: Waldbaden (1) |
| 12 | Lektion 14 -Reise- | Trend aus Japan: Waldbaden (2) |
| 13 | Lektion 15 -Reise- | Die Romantische Straße -eine Kostbarkeit in Deutschland und Japan (1) |
| 14 | Lektion 15 -Reise- | Die Romantische Straße -eine Kostbarkeit in Deutschland und Japan (2) |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

毎回、テキストを予習してくる。テーマに関する調べ作業を行うこと。

【テキスト (教科書)】

Raab, Andrea / Ishii, Toshiko (2019) *Neuigkeiten aus Deutschland 2017/18* ASAHI Verlag (『時事ドイツ語 2019 年度版』朝日出版社)

【参考書】

授業中に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

授業における取り組みと参加状況 (40%) と小テスト (60%) にもとづいて評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者のレベルや関心に柔軟に対応したい。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students acquire the reading comprehension of German. At the end of the course, participants are expected to grasp a construction of Text definitely, read a text exactly while learning vocabulary and expression, utilizing knowledge of the elementary grammar.

SOC500E1 - 0307

外国書講読1 (中国語)

篠田 幸夫

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

現代漢語 (中国語) で書かれた書籍、雑誌、新聞等の文章を正確に読み解く練習、訓練を繰り返す。文章の読解を通じ、現代中国および中国語圏の社会や文化に対する理解をさらに深める。

【到達目標】

1. ローマ字 (ピンイン) は補助的な使用のみにしていく
2. 文成分の分析が正確にできる
3. 文章語独自の表現や構造等に慣れる
4. 辞書を引くことに習熟しながら「類推する力」を涵養する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

主語、述語、修飾語、補語等の文成分や文構造の分析を徹底しながら文章を正確に理解する練習を重ねる。最初はローマ字 (ピンイン) つきのテキストを用いるが、常用語から段階的にテキストのピンインは消去していく。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|-------|------------------------------|
| 1 | 精読の基礎 | 文成分/構造分析 四述語文・連体修飾語・連用修飾語 |
| 2 | 精読の基礎 | 文成分/構造分析 方向補語 |
| 3 | 精読の基礎 | 文成分/構造分析 結果補語 |
| 4 | 精読の基礎 | 文成分/構造分析 様態補語 |
| 5 | 精読の基礎 | 文成分/構造分析 程度補語・可能補語 |
| 6 | 精読の基礎 | 辞書を使いこなす |
| 7 | 精読の基礎 | 少数民族に関する文章の精読 |
| 8 | 精読の基礎 | 少数民族に関する文章の音読 |
| 9 | 精読の基礎 | 中国語の方言に関する文章の精読 |
| 10 | 精読の基礎 | 中国語の方言に関する文章の音読 |
| 11 | 精読の基礎 | 漢方に関する文章の精読 |
| 12 | 精読の基礎 | 漢方に関する文章の音読 |
| 13 | 精読の基礎 | 教育に関する文章の精読 |
| 14 | 精読の基礎 | 教育に関する文章の音読 |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

1. 確実な予習
2. 「中級」までの文法の系統的復習
3. 新聞、雑誌、web等の記事検索
4. 関連項目の調査、読書等

【テキスト (教科書)】

教科書は使用しない。

【参考書】

推薦辞書・参考書等は、開講時に具体的に指示する。

e-learning には、「東京外国語大学言語モジュール 中国語」 <http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/zh/> を活用すること。

【成績評価の方法と基準】

予習 50%、積極的参加 50%。期末試験は行わない。

【学生の意見等からの気づき】

「この授業を履修してよかったと思う」100%の維持を目標に、全員の満足度の高い情報提供と訓練の場を構築していきたい。

【その他の重要事項】

せっかく「初級」、「中級」と積み上げてきた中国語、もう一踏ん張りして、仕事や研究で実際に「使える中国語」に取り組んでほしい。「上級」とはいえ、専攻課程ならば基礎を終えた2年次程度の内容である。

将来の留学や研究、業務に役立てるため本格的に読解力の向上に取り組みたい好奇心旺盛な学生は大歓迎。漢語文化圏における「現在進行形」の政治や経済、社会、文化に興味をもち、記事をもとに全員で活発な議論が展開できることを期待している。

【Outline and objectives】

This course enhances the development of students' skill in analyze the construction of a sentence with precision.

SOC500E1 - 0308

外国書講読2 (中国語)

篠田 幸夫

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

現代漢語 (中国語) で書かれた書籍、雑誌、新聞等の文章を正確に読み解く練習、訓練を繰り返す。文章の読解を通じ、現代中国および中国語圏の社会や文化に対する理解をさらに深める。

【到達目標】

- 【1】で培った力をもとに新聞、雑誌、書籍などの文章の読解をおこなう。授業では、
1. 長く難解な文の読解 (文成分、文の構造分析の徹底)
 2. 辞書に載っていない新語や表現の解釈のための情報収集等の共同作業を通してさらに実力をつける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

新聞や雑誌、書籍の文章の読解を通じ、「言語の翻訳」だけではなく背景理解 = 「文化や制度の翻訳」にまで踏み込み、常用、慣用的表現にも習熟していく。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|--------|----------------|
| 1 | 時事文の精読 | 高速鉄道に関する文章の精読 |
| 2 | 時事文の精読 | 高速鉄道に関する文章の音読 |
| 3 | 時事文の精読 | 中国の大学に関する文章の精読 |
| 4 | 時事文の精読 | 中国の大学に関する文章の音読 |
| 5 | 時事文の精読 | 中国の地理に関する文章の精読 |
| 6 | 時事文の精読 | 中国の地理に関する文章の音読 |
| 7 | 時事文の精読 | 中国の酒に関する文章の精読 |
| 8 | 時事文の精読 | 中国の酒に関する文章の音読 |
| 9 | 時事文の精読 | 中国の料理に関する文章の精読 |
| 10 | 時事文の精読 | 中国の料理に関する文章の音読 |
| 11 | 時事文の精読 | 中国の婚礼に関する文章の精読 |
| 12 | 時事文の精読 | 中国の婚礼に関する文章の音読 |
| 13 | 時事文の精読 | 中国の経済に関する文章の精読 |
| 14 | 時事文の精読 | 中国の経済に関する文章の音読 |

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

1. 確実な予習
2. 「中級」までの文法の系統的復習
3. 新聞、雑誌、web等の記事検索
4. 関連項目の調査、読書等

【テキスト (教科書)】

学生の興味やレベルに合わせて教材を考え、プリントで配布する。

【参考書】

推薦辞書・参考書等は、開講時に具体的に指示する。

e-learning には、「東京外国語大学言語モジュール 中国語」 <http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/zh/> を活用すること。

【成績評価の方法と基準】

予習 50%、積極的参加 50%。期末試験は行わない。

【学生の意見等からの気づき】

「この授業を履修してよかったと思う」100%の維持を目標に、全員の満足度の高い情報提供と訓練の場を構築していきたい。最新の集計結果については最初の時間に回覧する。

【その他の重要事項】

辞書を丹念に引きながら文成分を確認していくという地道な努力を重ねていくうちに、WEB上の記事や新聞などがだんだんとよくわかるようになり、自分でも驚くほどの力がついていることにある日突然気が付かず。一日も早いその日の到来をお楽しみに！

【Outline and objectives】

This course will help participants to enhance reading comprehension and deepen understanding of Chinese culture.

社会学原典講読

徳安 彰

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

宗教社会学の古典であるピーター・L・バーガーの『聖なる天蓋』をテキストにして、原典講読を行う。原典の講読をととして、宗教の社会的な捉え方と近代社会における宗教のあり方についての理解を深める。

【到達目標】

原典講読を通して、社会的な宗教の捉え方の基礎を理解できるようになる。それと同時に、近現代社会における宗教のあり方について、みずから社会的に考え、理解することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

受講者が、原典テキストの各章を担当してレジュメを作成し、内容を報告する。報告にもとづいて、受講者全員で質疑応答や討議を行う。また必要に応じて、派生的なテーマについても、受講者が学習と報告を行い、全体の討議に資するようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-----------|-----------------------|
| 第1回 | イントロダクション | ピーター・バーガーと宗教社会学の導入的概説 |
| 第2回 | 講読(1) | 第1章前半 |
| 第3回 | 講読(2) | 第1章後半 |
| 第4回 | 講読(3) | 第2章前半 |
| 第5回 | 講読(4) | 第2章後半 |
| 第6回 | 講読(5) | 第3章前半 |
| 第7回 | 講読(6) | 第3章後半 |
| 第8回 | 講読(7) | 第4章前半 |
| 第9回 | 講読(8) | 第4章後半 |
| 第10回 | 講読(9) | 第5章前半 |
| 第11回 | 講読(10) | 第5章後半 |
| 第12回 | 講読(11) | 第6章 |
| 第13回 | 講読(12) | 第7章+補論 |
| 第14回 | まとめ | 全員による総括的討議 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

原典テキストの講読部分を事前に熟読し、理解を深めるとともに、不明点や派生的な関心点を明確にして授業に臨むこと。また授業後は、復習的にテキストを再読し、十分な理解が得られるようにすること。さらに派生的なテーマについても積極的に学習すること。

【テキスト（教科書）】

ピーター・L・バーガー『聖なる天蓋』ちくま学芸文庫（2018年）

【参考書】

とくに指定はせず、必要に応じて授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（70%）：テキストの担当部分の報告の質、派生的なテーマについての報告の質、および各回の討議への参加・貢献度によって評価する。
レポート（30%）：原典講読にもとづく課題レポートの内容によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

テキストの講読の仕方を指導することによって、受講生のテキスト理解が深まるようにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会システム理論
<研究テーマ>グローバル化の中の社会システム
<主要研究業績>学術研究データベースを参照

【Outline and objectives】

We read "The Sacred Canopy: Elements of Sociological Theory of Religion" (by Peter L. Berger) chapter by chapter. We focus on the sociological understanding of religion and the position and situation of religion(s) in the modern society.

社会学原典講読

小林 直毅

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「生権力」だけにはとどまらず、『臨床医学の誕生』や『知の考古学』などの著作となって現れた Michel Foucault の思想を源流とする Medical Sociology の成果と課題を、この分野の基本的論文を読み解くことで考察する。

【到達目標】

20世紀後半以降の社会学の思想的展開とその優れた実践的成果のひとつとして、Medical Sociology を「生権力」「身体」「言説」「知」「近代」「文化」「政治」「メディア」といった多角的視点から理解し、考察できるようになることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

Bryan S. Turner が序文を寄せた Alan Petersen and Robin Bunton (eds.) (1997) *Foucault, Health and Medicine*, Routledge. に取められた論文を講読する。毎回の授業では、参加者が各自の関心に応じて論文を分担してそれぞれの内容をレジュメを準備して報告する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-------------------|---|
| 第1回 | イントロダクション | 社会学思想の成り立ちを考える。 |
| 第2回 | M. フーコーの思想と社会学(1) | Bryan S Turner, "From Governmentality to risk, some reflections on Foucault's contribution to medical sociology" を読む。 |
| 第3回 | M. フーコーの思想と社会学(2) | Robin Bunton and Alan Petersen, "Introduction: Foucault's medicine" を読む。 |
| 第4回 | M. フーコーの思想と社会学(3) | David Armstrong, "Foucault and the sociology of health and illness: a prismatic reading" を読む。 |
| 第5回 | M. フーコーの思想と社会学(4) | Nick J. Fox, "Is there life after Foucault? Texts, frames and differends" を読む。 |
| 第6回 | 中間総括(1) | これまでの報告と議論を振り返って、全員でディスカッション。 |
| 第7回 | 健康と医療をめぐる言説(1) | David McCallum, "Mental health, criminality and the human sciences" を読む。 |
| 第8回 | 健康と医療をめぐる言説(2) | Daborah Tyler "At risk of maladjustment: the problem of child mental health" を読む。 |
| 第9回 | 健康と医療をめぐる言説(3) | Deborah Lupton, "Foucault and the medicalisation critique" を読む。 |
| 第10回 | 中間総括(2) | これまでの報告と議論を振り返って、全員でディスカッション。 |
| 第11回 | 身体、自己(1) | Denis Gastaldo, "In health education good for you? Re-thinking health education through the concept bio-power" を読む。 |
| 第12回 | 身体、自己(2) | Jennifer Harding "Bodies at risk: sex, surveillance and hormone replacement therapy" を読む。 |
| 第13回 | 身体、自己(3) | Liz Eckermann, "Foucault, embodiment and gendered subjectivities: the case of voluntary self-starvation" を読む。 |
| 第14回 | 総括討論 | 社会学の思想と実践を考える。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

分担報告の有無にかかわらず、テキストは必ず精読して、議論のための論点のメモを準備する。

【テキスト（教科書）】

Alan Petersen and Robin Bunton (eds.) (1997) *Foucault, Health and Medicine*, Routledge.

【参考書】

Bryan S. Turner (2008) *The Body and Society: Explorations in Social Theory, Third Edition*, Sage Publications.
Deborah Lupton (2012) *Medicine as Culture: Illness, Disease and the Body, Third Edition*, Sage Publications.

【成績評価の方法と基準】

分担報告、ディスカッション（70%）、「中間総括」、「総括討論」における発表（30%）の達成度で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

メディア文化研究

<研究テーマ>

メディア／アーカイブ研究、水俣病事件報道研究

<主要研究業績>

『メディアテキストの冒険』（世界思想社、2003年）

『テレビはどう見られてきたのか』（共編著、せりか書房、2003年）

『水俣学研究序説』（共著、藤原書店、2004年）

『水俣学講義【第2集】』（共著、日本評論社、2005年）

『テレビニュースの社会学』（共著、世界思想社、2006年）

『「水俣」の言説と表象』（編著、藤原書店、2007年）

『テレビジョン解体』（共著、慶應義塾大学出版会、2007年）

『ポピュラーTV』（共著、風塵社、2009年）

『放送番組で読み解く社会的記憶—ジャーナリズム・リテラシー教育

への活用—』（共著、日外アソシエーツ、2012年）

『メディア・リテラシーの現在—公害／環境問題から読み解く』（共著、ナカニシヤ出版、2013年）

『ニュース空間の社会学—不安と危機をめぐる現代メディア論』（共著、世界思想社、2014年）

『原発震災のテレビアーカイブ』（編著、法政大学出版局、2018年）

【Outline and objectives】

Graduate students will be able to read and understand the basic literature of medical sociology originating from Foucault's thought.

SOC600E1 - 0100

論文指導1**専任教員****【授業の概要と目的（何を学ぶか）】**

修士論文執筆のための指導（修士課程1年次対象）

【到達目標】

指導教員の下で修士論文を完成させるために必要な研究方法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP7」に関連

【授業の進め方と方法】

指導教員が修士論文執筆のための指導をおこなう。次に示す「授業計画」はあくまでも修士論文指導の例示的な計画であって、当然、各院生の研究の進捗に応じて指導教員ごとに異なった指導をおこなう。

通年科目であるが、隔週開講を原則とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**通年**

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|--------------|---------------------------------|
| 第1回 | 研究の基礎（1） | 先行研究および資料／データ収集の方法、レジュメ／論文の作成方法 |
| 第2回 | 研究の基礎（2） | 先行研究および資料／データ収集の方法、レジュメ／論文の作成方法 |
| 第3回 | 研究の基礎（3） | 先行研究および資料／データ収集の方法、レジュメ／論文の作成方法 |
| 第4回 | 研究の基礎（4） | 先行研究および資料／データ収集の方法、レジュメ／論文の作成方法 |
| 第5回 | 研究テーマの設定（1） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの比較と選択 |
| 第6回 | 研究テーマの設定（2） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの比較と選択 |
| 第7回 | 研究テーマの設定（3） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの比較と選択 |
| 第8回 | 研究テーマの設定（4） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの比較と選択 |
| 第9回 | 研究方法の習熟（1） | 調査・研究方法の習熟、資料／データの収集と調査の実践 |
| 第10回 | 研究方法の習熟（2） | 調査・研究方法の習熟、資料／データの収集と調査の実践 |
| 第11回 | 研究方法の習熟（3） | 調査・研究方法の習熟、資料／データの収集と調査の実践 |
| 第12回 | 論文執筆とその検討（1） | 問題設定、先行研究の紹介、仮説の提示、論文構成の検討 |
| 第13回 | 論文執筆とその検討（2） | 問題設定、先行研究の紹介、仮説の提示、論文構成の検討 |
| 第14回 | 論文執筆とその検討（3） | 問題設定、先行研究の紹介、仮説の提示、論文構成の検討 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各院生の研究の進捗に応じて指導教員が指示する。

【テキスト（教科書）】

指導教員が指定する。

【参考書】

必要に応じて指導教員が紹介する。

【成績評価の方法と基準】

上記の到達目標の達成度について指導教員が基準を設けて評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to guide the students to complete a master thesis.

SOC600E1 - 0101

論文指導 2**専任教員****【授業の概要と目的（何を学ぶか）】**

修士論文執筆のための指導（修士課程2年次対象）

【到達目標】

指導教員の下で修士論文の完成へ向けて研究をおこなう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP7」に関連

【授業の進め方と方法】

指導教員が修士論文執筆のための指導をおこなう。次に示す「授業計画」はあくまでも修士論文指導の例示的な計画であって、当然、各院生の研究の進捗に応じて指導教員ごとに異なった指導をおこなう。

通年科目であるが、隔週開講を原則とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**通年**

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|------------------|-----------------------------|
| 第1回 | 研究の遂行と進捗状況の確認(1) | 資料／データの収集と調査の実践、進捗に応じた計画の修正 |
| 第2回 | 研究の遂行と進捗状況の確認(2) | 資料／データの収集と調査の実践、進捗に応じた計画の修正 |
| 第3回 | 研究の遂行と進捗状況の確認(3) | 資料／データの収集と調査の実践、進捗に応じた計画の修正 |
| 第4回 | 研究の遂行と進捗状況の確認(4) | 資料／データの収集と調査の実践、進捗に応じた計画の修正 |
| 第5回 | 研究発表による構想の改善(1) | 研究発表および指導・批判を通じた論文構想の改善 |
| 第6回 | 研究発表による構想の改善(2) | 研究発表および指導・批判を通じた論文構想の改善 |
| 第7回 | 研究発表による構想の改善(3) | 研究発表および指導・批判を通じた論文構想の改善 |
| 第8回 | 研究発表による構想の改善(4) | 研究発表および指導・批判を通じた論文構想の改善 |
| 第9回 | 研究枠組みの確認と修正(1) | 論文構想の射程およびその学術的意義の検証 |
| 第10回 | 研究枠組みの確認と修正(2) | 論文構想の射程およびその学術的意義の検証 |
| 第11回 | 研究枠組みの確認と修正(3) | 論文構想の射程およびその学術的意義の検証 |
| 第12回 | 論文執筆と改善指導(1) | 論文構成と文章表現の適切さ、論旨の説得力などの検証 |
| 第13回 | 論文執筆と改善指導(2) | 論文構成と文章表現の適切さ、論旨の説得力などの検証 |
| 第14回 | 論文執筆と改善指導(3) | 論文構成と文章表現の適切さ、論旨の説得力などの検証 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各院生の研究の進捗に応じて指導教員が指示する。

【テキスト（教科書）】

指導教員が指定する。

【参考書】

必要に応じて指導教員が紹介する。

【成績評価の方法と基準】

上記の到達目標の達成度について指導教員が基準を設けて評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to guide the students to write a master thesis.

SOC700E1 - 0100

博士論文指導 I A**専任教員****【授業の概要と目的（何を学ぶか）】**

博士論文執筆のための指導（博士後期課程1年次対象）

【到達目標】

指導教員の下で博士論文の完成へ向けて研究をおこなう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

指導教員が博士論文執筆のための指導をおこなう。履修者は、年度の初めに年次研究計画書を提出し、併行して、修士論文の成果を中心とした査読付き論文の執筆を開始する。次に示す「授業計画」はあくまでも博士論文指導の例示的な計画であって、当然、各院生の研究の進捗に応じて指導教員ごとに異なった指導をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|------------------------|----------------------------|
| 第1回 | 研究テーマの設定に関する指導(1) | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第2回 | 研究テーマの設定に関する指導(2) | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第3回 | 研究テーマの設定に関する指導(3) | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第4回 | 研究テーマの設定に関する指導(4) | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第5回 | 研究方法の習得に関する指導(1) | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第6回 | 研究方法の習得に関する指導(2) | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第7回 | 研究方法の習得に関する指導(3) | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第8回 | 研究方法の習得に関する指導(4) | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第9回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導(1) | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第10回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導(2) | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第11回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導(3) | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第12回 | 論文の執筆に関する指導(1) | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |
| 第13回 | 論文の執筆に関する指導(2) | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |
| 第14回 | 論文の執筆に関する指導(3) | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各院生の研究の進捗に応じて指導教員が指示する。

【テキスト（教科書）】

指導教員が指定する。

【参考書】

必要に応じて指導教員が紹介する。

【成績評価の方法と基準】

上記の到達目標の達成度について指導教員が基準を設けて評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to guide the students to write a doctoral thesis.

SOC700E1 - 0101

博士論文指導 I B

専任教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆のための指導（博士後期課程1年次対象）

【到達目標】

指導教員の下で博士論文の完成へ向けて研究をおこなう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

指導教員が博士論文執筆のための指導をおこなう。履修者は、修士論文の成果を中心とした査読付き論文を年度末までに完成させて投稿できるよう努力する。次に示す「授業計画」はあくまでも博士論文指導の例示的な計画であって、当然、各院生の研究の進捗に応じて指導教員ごとに異なった指導をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|------------------------|----------------------------|
| 第1回 | 研究テーマの設定に関する指導（1） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第2回 | 研究テーマの設定に関する指導（2） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第3回 | 研究テーマの設定に関する指導（3） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第4回 | 研究テーマの設定に関する指導（4） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第5回 | 研究方法の習得に関する指導（1） | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第6回 | 研究方法の習得に関する指導（2） | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第7回 | 研究方法の習得に関する指導（3） | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第8回 | 研究方法の習得に関する指導（4） | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第9回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（1） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第10回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（2） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第11回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（3） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第12回 | 論文の執筆に関する指導（1） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |
| 第13回 | 論文の執筆に関する指導（2） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |
| 第14回 | 論文の執筆に関する指導（3） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各院生の研究の進捗に応じて指導教員が指示する。

【テキスト（教科書）】

指導教員が指定する。

【参考書】

必要に応じて指導教員が紹介する。

【成績評価の方法と基準】

上記の到達目標の達成度について指導教員が基準を設けて評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to guide the students to write a doctoral thesis.

SOC700E1 - 0102

博士論文指導 II A

専任教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆のための指導（博士後期課程2年次対象）

【到達目標】

指導教員の下で博士論文の完成へ向けて研究をおこなう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

指導教員が博士論文執筆のための指導をおこなう。履修者は、年度の初めに年次研究計画書を提出し、併行して、博士論文の文献レビュー研究、あるいは第一次情報収集の成果を中心とする査読付き論文の執筆を開始する。次に示す「授業計画」はあくまでも博士論文指導の例示的な計画であって、当然、各院生の研究の進捗に応じて指導教員ごとに異なった指導をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|------------------------|----------------------------|
| 第1回 | 研究テーマの設定に関する指導（1） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第2回 | 研究テーマの設定に関する指導（2） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第3回 | 研究テーマの設定に関する指導（3） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第4回 | 研究テーマの設定に関する指導（4） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第5回 | 研究方法の習得に関する指導（1） | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第6回 | 研究方法の習得に関する指導（2） | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第7回 | 研究方法の習得に関する指導（3） | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第8回 | 研究方法の習得に関する指導（4） | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第9回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（1） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第10回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（2） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第11回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（3） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第12回 | 論文の執筆に関する指導（1） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |
| 第13回 | 論文の執筆に関する指導（2） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |
| 第14回 | 論文の執筆に関する指導（3） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各院生の研究の進捗に応じて指導教員が指示する。

【テキスト（教科書）】

指導教員が指定する。

【参考書】

必要に応じて指導教員が紹介する。

【成績評価の方法と基準】

上記の到達目標の達成度について指導教員が基準を設けて評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to guide the students to write a doctoral thesis.

SOC700E1 - 0103

博士論文指導Ⅱ B

専任教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆のための指導（博士後期課程2年次対象）

【到達目標】

指導教員の下で博士論文の完成へ向けて研究をおこなう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

指導教員が博士論文執筆のための指導をおこなう。履修者は、博士論文の文献レビュー研究、あるいは第一次情報収集の成果を中心とする査読付き論文を、年度末までに完成させて投稿できるよう努力する。次に示す「授業計画」はあくまでも博士論文指導の例示的な計画であって、当然、各院生の研究の進捗に応じて指導教員ごとに異なった指導をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|------------------------|----------------------------|
| 第1回 | 研究テーマの設定に関する指導（1） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第2回 | 研究テーマの設定に関する指導（2） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第3回 | 研究テーマの設定に関する指導（3） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第4回 | 研究テーマの設定に関する指導（4） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第5回 | 研究方法の習得に関する指導（1） | 調査・研究方法および資料/データ収集法の習得 |
| 第6回 | 研究方法の習得に関する指導（2） | 調査・研究方法および資料/データ収集法の習得 |
| 第7回 | 研究方法の習得に関する指導（3） | 調査・研究方法および資料/データ収集法の習得 |
| 第8回 | 研究方法の習得に関する指導（4） | 調査・研究方法および資料/データ収集法の習得 |
| 第9回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（1） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第10回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（2） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第11回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（3） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第12回 | 論文の執筆に関する指導（1） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |
| 第13回 | 論文の執筆に関する指導（2） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |
| 第14回 | 論文の執筆に関する指導（3） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各院生の研究の進捗に応じて指導教員が指示する。

【テキスト（教科書）】

指導教員が指定する。

【参考書】

必要に応じて指導教員が紹介する。

【成績評価の方法と基準】

上記の到達目標の達成度について指導教員が基準を設けて評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to guide the students to write a doctoral thesis.

SOC700E1 - 0104

博士論文指導Ⅲ A

専任教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆のための指導（博士後期課程3年次対象）

【到達目標】

指導教員の下で博士論文の完成へ向けて研究をおこなう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

指導教員が博士論文執筆のための指導をおこなう。履修者は、年度の初めに年次研究計画書を提出するとともに、博士論文の最終構成を作成する。次に示す「授業計画」はあくまでも博士論文指導の例示的な計画であって、当然、各院生の研究の進捗に応じて指導教員ごとに異なった指導をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|------------------------|----------------------------|
| 第1回 | 研究テーマの設定に関する指導（1） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第2回 | 研究テーマの設定に関する指導（2） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第3回 | 研究テーマの設定に関する指導（3） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第4回 | 研究テーマの設定に関する指導（4） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第5回 | 研究方法の習得に関する指導（1） | 調査・研究方法および資料/データ収集法の習得 |
| 第6回 | 研究方法の習得に関する指導（2） | 調査・研究方法および資料/データ収集法の習得 |
| 第7回 | 研究方法の習得に関する指導（3） | 調査・研究方法および資料/データ収集法の習得 |
| 第8回 | 研究方法の習得に関する指導（4） | 調査・研究方法および資料/データ収集法の習得 |
| 第9回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（1） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第10回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（2） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第11回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（3） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第12回 | 論文の執筆に関する指導（1） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |
| 第13回 | 論文の執筆に関する指導（2） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |
| 第14回 | 論文の執筆に関する指導（3） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各院生の研究の進捗に応じて指導教員が指示する。

【テキスト（教科書）】

指導教員が指定する。

【参考書】

必要に応じて指導教員が紹介する。

【成績評価の方法と基準】

上記の到達目標の達成度について指導教員が基準を設けて評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to guide the students to write a doctoral thesis.

SOC700E1 - 0105

博士論文指導Ⅲ B

専任教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆のための指導（博士後期課程3年次対象）

【到達目標】

指導教員の下で博士論文の完成へ向けて研究をおこなう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

指導教員が博士論文執筆のための指導をおこなう。履修者は、博士論文の完成に向けて執筆をおこなう。次に示す「授業計画」はあくまでも博士論文指導の例示的な計画であって、当然、各院生の研究の進捗に応じて指導教員ごとに異なった指導をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|------------------------|----------------------------|
| 第1回 | 研究テーマの設定に関する指導（1） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第2回 | 研究テーマの設定に関する指導（2） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第3回 | 研究テーマの設定に関する指導（3） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第4回 | 研究テーマの設定に関する指導（4） | 研究課題の発見、先行研究の検討、理論枠組みの選択 |
| 第5回 | 研究方法の習得に関する指導（1） | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第6回 | 研究方法の習得に関する指導（2） | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第7回 | 研究方法の習得に関する指導（3） | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第8回 | 研究方法の習得に関する指導（4） | 調査・研究方法および資料／データ収集法の習得 |
| 第9回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（1） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第10回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（2） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第11回 | 研究構想に即した論文の構成に関する指導（3） | 提示する仮説の学術的意義の検討、効果的な論文の構成法 |
| 第12回 | 論文の執筆に関する指導（1） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |
| 第13回 | 論文の執筆に関する指導（2） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |
| 第14回 | 論文の執筆に関する指導（3） | 文章表現の適切さ、論旨の説得力についての検証 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各院生の研究の進捗に応じて指導教員が指示する。

【テキスト（教科書）】

指導教員が指定する。

【参考書】

必要に応じて指導教員が紹介する。

【成績評価の方法と基準】

上記の到達目標の達成度について指導教員が基準を設けて評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to guide the students to write a doctoral thesis.

SOC700E1 - 0200

社会学総合演習 A

専任教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程の学生が、査読付き学術雑誌等への投稿を視野に入れてまとめた研究論文を報告し、複数の教員や他の大学院生から助言や刺激を受け、研究論文執筆のスキルを高めることを目的としている。また、参加する院生がお互いの研究論文を検討することを通じて、研究論文執筆のスキルを相互に学ぶ機会とする。

【到達目標】

査読付きの学術雑誌への論文掲載や学会での研究発表に向けて研究論文を執筆し、その内容を報告し、フィードバックを得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

査読付き学術雑誌等への投稿を視野に入れて作成した研究論文を報告する「投稿論文検討会」を、7月中旬頃に開催する。履修学生は事前の所定期限（6月末を予定）までに、当日検討する研究論文を担当教員に提出すること。投稿論文検討会までの論文作成指導は指導教員が、それ以後の論文改善指導は「模擬査読」担当者がおこなう。履修対象は博士後期課程の大学院生であるが、それ以外の大学院生にも参加を奨励する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期集中

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-----------|------------|
| 第1回 | 論文作成指導（1） | 指導教員による |
| 第2回 | 論文作成指導（2） | 指導教員による |
| 第3回 | 論文作成指導（3） | 指導教員による |
| 第4回 | 論文作成指導（4） | 指導教員による |
| 第5回 | 論文作成指導（5） | 指導教員による |
| 第6回 | 投稿論文検討会 | 1 時限 |
| 第7回 | 投稿論文検討会 | 2 時限 |
| 第8回 | 投稿論文検討会 | 3 時限 |
| 第9回 | 投稿論文検討会 | 4 時限 |
| 第10回 | 投稿論文検討会 | 5 時限 |
| 第11回 | 論文改善指導（1） | 模擬査読担当者による |
| 第12回 | 論文改善指導（2） | 模擬査読担当者による |
| 第13回 | 論文改善指導（3） | 模擬査読担当者による |
| 第14回 | 論文改善指導（4） | 模擬査読担当者による |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究論文の事前提出期限までに論文を提出できるよう、各自計画的に研究・執筆を進める。演習後は、得られたコメントをもとに論点整理を行い、改善が必要な点については加筆修正を行い、研究論文の質の向上に努める。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

特になし

【成績評価の方法と基準】

総合演習用に提出された研究論文と当日の報告内容を総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【Outline and objectives】

The purpose of this seminar is to help doctoral students improve their research and writing skills for peer reviewed papers. Each participant is expected to give advice to other students as well as learn from the teaching staff's advice.

SOC700E1 - 0201

社会学総合演習 B

専任教員

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文執筆にむけて、博士後期課程の学生が自分の博士論文の構想を報告し、複数の教員や他の大学院生から助言や刺激を受け、研究を進めることを目的としている。また、参加する院生が相互にそれぞれの問題意識や研究方法から学ぶ機会とする。

【到達目標】

先行研究を踏まえ、自身の問題意識を明確化し、研究内容について理解を深め、研究のさらなる進展またはよりよい研究の成果にむけて検討を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

博士論文の構想を報告する「博論構想報告会」を1月下旬頃に開催する。履修学生は事前の所定期限（12月下旬を予定）までに、報告タイトルを担当教員に提出すること。博論構想報告会の前の博論構想指導、報告会後の博論執筆指導は、いずれも指導教員がおこなう。履修対象は博士後期課程の大学院生であるが、それ以外の大学院生にも参加を奨励する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期集中

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|------------|---------|
| 第1回 | 博論構想指導 (1) | 指導教員による |
| 第2回 | 博論構想指導 (2) | 指導教員による |
| 第3回 | 博論構想指導 (3) | 指導教員による |
| 第4回 | 博論構想指導 (4) | 指導教員による |
| 第5回 | 博論構想指導 (5) | 指導教員による |
| 第6回 | 博論構想報告会 | 1 時限 |
| 第7回 | 博論構想報告会 | 2 時限 |
| 第8回 | 博論構想報告会 | 3 時限 |
| 第9回 | 博論構想報告会 | 4 時限 |
| 第10回 | 博論構想報告会 | 5 時限 |
| 第11回 | 博論執筆指導 (1) | 指導教員による |
| 第12回 | 博論執筆指導 (2) | 指導教員による |
| 第13回 | 博論執筆指導 (3) | 指導教員による |
| 第14回 | 博論執筆指導 (4) | 指導教員による |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自分の博士論文において、どのような問題設定で、どのような資料を用いて、どのようなことを明らかにするのか、博士論文の全体の見通しについて、所定の時間におさまるような要領で報告できるよう、卒論構想報告会に向けて準備を行う。報告会後は、得られたコメントをもとに論点整理を行い、今後の研究の進展に役立てる。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

特になし

【成績評価の方法と基準】

博論構想報告会当日の内容を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【Outline and objectives】

The purpose of this seminar is to help doctoral students finish their Ph.D. dissertation. Each participant is expected to report his/her plan for the dissertation and improve it by advice from teaching staff and other students.

SOC500E1 - 0200

社会学研究 1

ジョナサン ブラウン

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

“Because speaking and writing are forms of action, and because symbols shape thought and action, rhetoric as the study of how symbols are used effectively is itself a source of power.”

-James A. Herrick, *The History and Theory of Rhetoric: An Introduction*
Together, we will explore the world of English rhetoric, the art of effective communication. Like Herrick, I believe that understanding how people communicate is empowering to both readers and creators of texts. In this class, we will examine the ways in which others communicate and will critically analyze the methods they use so we can judge the effectiveness of their arguments. As you learn what works and what doesn't work in creating an effective argument in English, you will focus on applying those lessons within your own writing so that you may become an effective producer of English texts yourself.

【到達目標】

- Summarizing/paraphrasing others' ideas.
- Reflecting and analyzing ideas.
- Responding to other's ideas.
- Reading critically.
- Understanding the components of an argument.
- Understanding the structure of an argument.
- Reasoning for or against a claim.
- Presenting ideas from external sources.
- Synthesizing multiple sources.
- Formulating and presenting an original argument.
- Supporting your argument with evidence.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

The primary focus of this course is on clarity, organization, rhetorical patterns, style, and overall good writing practices in academic English. Students will also be expected to complete readings provided by the instructor (from William Zinsser's *On Writing Well*) outside of class and be ready to discuss them together in groups and/or as a whole class. The essay writing in this class will utilize the process approach. Students will produce multiple drafts of each essay with each subsequent draft incorporating suggestions/revisions from classmates and/or the instructor.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|-----|-------------------------------|---|
| 第1回 | Course Guidance/Introductions | <ul style="list-style-type: none"> • Syllabus and course explanation • General essay structure • Rd. Jackie Robinson's <i>Free Minds and Hearts at Work</i> • <i>Free Minds and Hearts at Work</i> class discussion • Draft 1 |
| 第2回 | Summary & Response | <ul style="list-style-type: none"> • How to write a summary and response • Peer review - What kind of things should we look for in ours and our classmates' writing? • Rd. Zinsser Chs. 1-2 • Draft 2 |
| 第3回 | Summary & Response continued | <ul style="list-style-type: none"> • Discuss Zinsser Chs. 1-2 • Comma usage • Summary & Response Final Draft • Rd. Zinsser Chs. 3-4 |
| 第4回 | Critique Essay | <ul style="list-style-type: none"> • Discuss Zinsser Chs. 3-4 • Cutting clutter • Rd. Kaplan's <i>Cultural Thought Patterns in Inter-Cultural Education</i> • Find and read an article about contrastive and/or intercultural rhetoric • Introduce your article (summary and response) |

| | | |
|--------|--------------------------------|--|
| 第 5 回 | Critique Essay continued | <ul style="list-style-type: none"> What is a critique and how to write one Discuss Kaplan When to use passive/active voice Rd. Zinsser Chs. 5-7 Draft 1 |
| 第 6 回 | Critique Essay continued | <ul style="list-style-type: none"> Discuss Zinsser Chs. 5-7 Citing sources (APA format) Logos, Pathos, Ethos Draft 2 |
| 第 7 回 | Research Paper | <ul style="list-style-type: none"> Logical fallacies Final draft |
| 第 8 回 | Research Paper continued | <ul style="list-style-type: none"> Logical fallacies continued Organization of a research paper Rd. Zinsser Chs. 8-9 |
| 第 9 回 | Research Paper continued | <ul style="list-style-type: none"> Synthesizing sources Discuss Zinsser Chs. 8-9 Draft 1 |
| 第 10 回 | Research Paper continued | <ul style="list-style-type: none"> Peer Review Draft 2 |
| 第 11 回 | Research Paper continued | <ul style="list-style-type: none"> Peer Review Final Draft |
| 第 12 回 | Poster Presentation | <ul style="list-style-type: none"> Preparing a poster presentation |
| 第 13 回 | Poster Presentation continued | <ul style="list-style-type: none"> Work on poster presentations |
| 第 14 回 | Poster Presentations continued | <ul style="list-style-type: none"> Poster presentations |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Course readings; essay writing; presentation preparation

【テキスト（教科書）】

Materials provided by instructor.

【参考書】

English-Japanese and Japanese-English dictionary.

APA Style Manual

【成績評価の方法と基準】

Summary & Response Essay: 20%

Critique Essay: 25%

Research Essay: 25%

Poster Presentation: 20%

Class Discussions: 10%

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

ノート PC

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>英語学、言語学

<研究テーマ>作文、修辞学、対照分析、談話分析

<主要研究業績>

Using Rhetorical Structure Theory for contrastive analysis at the micro and macro levels of discourse (2019). 博士論文

Using Rhetorical Structure Theory for contrastive purposes: A pilot study (2018). OnCUE Journal, 11(1), 3-24. 論文

L2 learners and rhetorical strategies: Developments in metacognition (2017). CogLing7. 学会発表

(2017). CogLing7. 学会発表

(2017). CogLing7. 学会発表

(2017). CogLing7. 学会発表

【Outline and objectives】

1. Read texts critically and analyze the varied situations that motivate writers, the choices that writers make, and the effects of those choices on readers;

2. Analyze how writers employ content, structure, style, tone, and conventions appropriate to the demands of a particular audience, purpose, context, or culture;

3. Write persuasive arguments that articulate a clear, thoughtful position, deploy support and evidence appropriate to audience and purpose, and consider counterclaims and multiple points of view, including international and intercultural perspectives;

4. Respond constructively to drafts-in-progress, applying rhetorical concepts to revisions of your own and peers' writing;

5. Analyze multiple modes of communication and the ways in which a wide range of rhetorical elements (both written and visual) and cultural elements operate in the act of persuasion; and

6. Evaluate sources and integrate the ideas of others into your own writing (through paraphrase, summary, analysis, and evaluation).

SOC500E1 - 0201

社会学研究 2

村井 重樹

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ビエール・ブルデューの社会学理論・方法について、批判的な展開も視野に入れながら検討し、現代社会分析におけるその意義と可能性を探る。

【到達目標】

ブルデュー社会学の主要概念、理論枠組みや方法論について基本的な知識を習得し、それを自身の研究に活用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

文献講読を中心に進める。各回の担当者が文献内容の報告と論点提示を行い、それに基づいて全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期集中

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|--------------------|-----------------------------|
| 第 1 回 | イントロダクション | 授業内容の説明 |
| 第 2 回 | ブルデュー社会学を読み解く（1） | 『ディスタクシオン』（序文、第 1 章） |
| 第 3 回 | ブルデュー社会学を読み解く（2） | 『ディスタクシオン』（第 2 章） |
| 第 4 回 | ブルデュー社会学を読み解く（3） | 『ディスタクシオン』（第 3 章） |
| 第 5 回 | ブルデュー社会学を読み解く（4） | 『ディスタクシオン』（第 4 章） |
| 第 6 回 | ブルデュー社会学を読み解く（5） | 『ディスタクシオン』（第 5 章） |
| 第 7 回 | ブルデュー社会学を読み解く（6） | 『ディスタクシオン』（第 6 章、第 7 章） |
| 第 8 回 | ブルデュー社会学を読み解く（7） | 『ディスタクシオン』（第 8 章、結論） |
| 第 9 回 | ブルデュー社会学批判を読み解く（1） | 『複数的人間』（英語版序文、前口上、第 1 場） |
| 第 10 回 | ブルデュー社会学批判を読み解く（2） | 『複数的人間』（第 2 場） |
| 第 11 回 | ブルデュー社会学批判を読み解く（3） | 『複数的人間』（第 3 場、第 4 場） |
| 第 12 回 | ブルデュー社会学批判を読み解く（4） | 『複数的世界』（第 3 章） |
| 第 13 回 | ブルデュー社会学批判を読み解く（5） | 『文化・階級・卓越化』（序論、第 1 章、第 2 章） |
| 第 14 回 | 総括 | 全体のまとめと総合討論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指定された文献の該当箇所を事前に読んでくること。

【テキスト（教科書）】

P・ブルデュー（石井洋二郎訳）『ディスタクシオン I・II』藤原書店、1990 年

B・ライール（鈴木智之訳）『複数的人間』法政大学出版局、2013 年

B・ライール（村井重樹訳）『複数的世界』青弓社、2016 年

T・ベネットほか（磯直樹ほか訳）『文化・階級・卓越化』青弓社、2017 年

【参考書】

授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

各自の担当箇所の報告内容（70 %）と議論への参加度（30 %）に基づいて評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>理論社会学、文化社会学

<研究テーマ>文化的実践の社会学

<主要研究業績>

「分化した社会におけるハビトゥス——ライールのブルデュー批判を手がかりに」『日仏社会学会年報』（第 28 号、2017 年）

「ハビトゥスと文化的再生産」友枝敏雄・浜日出夫・山田真茂留編『社会学の力——最重要概念・命題集』（有斐閣、2017 年）

「食の実践と卓越化——ブルデュー社会学の視座とその展開」『三田社会学』（第 20 号、2015 年）

【Outline and objectives】

This course will consider Pierre Bourdieu's sociological theory.

【Outline and objectives】

This course aims to learn perspectives and methodologies for media politics. While the media environment changes radically, the significance of studying the relationship between politics and the media is increasing. By explaining the methodologies and concepts of critical media studies, this course presents some implications on contemporary theories and case studies.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、メディアを通じて社会や政治を学ぶ視座や方法論に関する理解を深めることを目的とする。メディア環境が大きく変化する一方で、政治とメディアとの関係性を研究することの意義はますます高まっている。そこで、この授業では、批判的コミュニケーション論の方法論や諸概念の解説を行いながら、理論と事例の今日的な課題を提示することにした。

【到達目標】

- ・批判的コミュニケーション論の意義について理解することができる。
- ・ニュース研究の方法論について理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

講義を中心に進めていくが、受講者のニーズがあればディスカッションや受講者の口頭発表なども適宜行うことにしたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

春学期集中

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|----------------------|---------------------------------|
| 第1回 | イントロダクション | ガイダンス |
| 第2回 | ニュース研究の基礎概念 | ニュースとは何か／ニュース生産のメカニズム／ニュース・バリュー |
| 第3回 | 批判的コミュニケーション論とは何か（1） | 批判的コミュニケーション論の基礎概念 |
| 第4回 | 批判的コミュニケーション論とは何か（2） | カルチュラル・スタディーズのオーディエンス論 |
| 第5回 | 批判的コミュニケーション論とは何か（3） | ヘゲモニー概念と「意味づけをめぐる政治」 |
| 第6回 | ニュースの言説分析（1） | 批判的言説分析の基礎 |
| 第7回 | ニュースの言説分析（2） | 水俣病事件報道を事例として |
| 第8回 | ニュースの言説分析（3） | 新自由主義的改革を事例として |
| 第9回 | メディア研究と政治理論（1） | 民主主義論との関係から |
| 第10回 | メディア研究と政治理論（2） | ポピュリズム論との関係から |
| 第11回 | メディア研究と政治理論（3） | クドリーのメディア理論との関係から |
| 第12回 | 民主主義とメディア（1） | 政治制度としてのメディア |
| 第13回 | 民主主義とメディア（2） | 脱原発運動との関係から |
| 第14回 | 民主主義とメディア（3） | 沖縄問題との関係から |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・授業で配布する資料（レジュメなど）を適宜読んでおく。
- ・参考書を読んでおく。

【テキスト（教科書）】

特になし（必要に応じ、レジュメ等を配布する）

【参考書】

山腰修三『コミュニケーションの政治社会学』ミネルヴァ書房、2012年。
ニック・クドリー『メディア・社会・世界』慶應義塾大学出版会、2018年。

【成績評価の方法と基準】

レポートに加え、授業中の参加の度合い、貢献度を考慮し、総合的に判断する。具体的な評価の配分は、レポート（50%）、授業中の参加の度合い（50%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

授業内のディスカッションや質疑応答などを通して、受講者の意見・問題関心を把握する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

メディア論、ジャーナリズム論、政治社会学

<研究テーマ>

メディアの政治理論、ニュースの言説分析

<主要研究業績>

山腰修三『コミュニケーションの政治社会学』ミネルヴァ書房、2012年。
山腰修三編著『戦後日本のメディアと原子力問題』ミネルヴァ書房、2017年。
ニック・クドリー著（山腰修三監訳）『メディア・社会・世界』慶應義塾大学出版会、2018年。

SOC500E1 - 0203

社会調査法 1

中筋 直哉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会学および政策科学の研究の実際場面で社会調査を活用するには、研究の目的および研究に適用する社会理論と有機的に結びつけたちで調査をデザインし、データを分析することが欠かせない。この科目では、社会学の調査研究の古典を複数講読することを通して、それら各々のユニークな問題関心とそこから導き出された独特の調査設計・データ分析法を学び、さらに履修者各自の問題関心に応じた調査デザイン・データ分析法を構想し、相互討論を通して洗練することを試みる。

【到達目標】

受講生各自の問題関心に基づく調査計画、およびその調査に基づく修士論文の執筆計画を立案できること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

講義と履修者による発表および討論。各回 2 時限の連続講義で、第 8 回のみ試験 1 時限

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期前半

| 回 | テーマ | 内容 |
|----|----------------------|------------------------------|
| 1 | 総論 1 | 社会学・政策科学と社会調査 |
| 2 | 総論 2 | 社会調査の諸類型 |
| 3 | 総論 3 | 社会調査の倫理と真正性 |
| 4 | フィールドワークの光と影 1 | B. マリノフスキ『西太平洋の遠洋航海者』をめぐって 1 |
| 5 | フィールドワークの光と影 2 | 同上 2 |
| 6 | 個人の歴史と社会の歴史を重ね合わせる 1 | A. クラインマン『八つの人生の物語』をめぐって 1 |
| 7 | 個人の歴史と社会の歴史を重ね合わせる 2 | 同上 2 |
| 8 | テキストデータの分解・再構築 1 | 小林直毅編『「水俣」の言説と表象』をめぐって 1 |
| 9 | テキストデータの分解・再構築 2 | 同上 2 |
| 10 | 社会関係を計量する 1 | C. フィッシャー『友人のあいだで暮らす』をめぐって 1 |
| 11 | 社会関係を計量する 2 | 同上 2 |
| 12 | 政策科学に貢献する社会調査 1 | 辻中豊ほか『現代日本の自治会・町内会』をめぐって 1 |
| 13 | 政策科学に貢献する社会調査 2 | 同上 2 |
| 14 | 総括的討論 | 各自の問題関心に基づく調査デザインの発表と相互討論 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自テキスト以外の関連文献を収集し、比較検討すること

【テキスト（教科書）】

上記授業計画の「内容」に記載

【参考書】

各回ごとに授業中に指示

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加 30 %、報告の内容評価 30 %、筆記試験 40 %。よく考えられた報告を行うことと、筆記試験において修士論文に相応しい調査計画を立案できていることがAの条件。

【学生の意見等からの気づき】

入手しやすい、近年の文献を取り上げる

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉地域社会学
〈研究テーマ〉地域社会の構造分析
〈主要研究業績〉『よくわかる都市社会学』（2013、ミネルヴァ書房）、『群衆の居場所』（2005、新曜社）

【Outline and objectives】

This lecture aims to study various relations sociological theory and method by reading and discussing classics of sociology.

SOC500E1 - 0204

社会調査法 2

斎藤 友里子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

分析結果（解釈ではない）は統計ソフトの扱い方を覚えれば「一応だせる」。ただし、分析手法や統計学に関する知識が欠如していれば、堂々と嘘をつくことになりかねない。また、データに基づき主張するには、実質的なテーマをどのように統計解析に落とし込むかが肝要となる。この授業では、モデルの基礎を数学的に学びつつ、実際にデータを用いて分析する。これにより、社会的な発想に導かれた計量分析の実際を知り、それを自ら行うための基本的な技術の修得をめざす。「発見すること」「理論を確かめること」と分析の関連——計量研究における分析視角がもつ重要性についても理解を深めたい。

【到達目標】

数理統計学の基礎をふまえながら、主に重回帰分析と因子分析の学習を通して、多変量解析の基本を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

多変量解析の基礎に関する講義と SPSS を用いた実習により、理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|--------|---------------------|---|
| 第 1 回 | イントロダクション | 社会学と多変量解析 |
| 第 2 回 | 散らばりの指標と推測統計の基礎知識 | 散らばりの指標に関する学習を通して統計学の表記法に慣れるとともに推測統計の考え方について概説する |
| 第 3 回 | 線形代数の基礎知識 | 線形代数の基礎について概説する |
| 第 4 回 | 多変量データとベクトル・行列 | 多変量データと線形代数の関係について論じる |
| 第 5 回 | 説明変数・目的変数と二変量重回帰モデル | 二変量重回帰モデルの考え方について解説する |
| 第 6 回 | 重回帰理論の数学モデル | 誤差項と回帰係数・切片について線形代数を用いて解説する |
| 第 7 回 | 重回帰分析の導入 | 重回帰分析の数学モデルの重回帰分析への拡張を行う |
| 第 8 回 | 最小二乗推定と多重共線性 | 重回帰モデルの推定方法の 1 つである OLS と、重回帰分析における多重共線性の問題について解説する |
| 第 9 回 | 偏回帰係数の検定とモデルの評価 | 偏回帰係数を中心としたモデルの解釈を学ぶ |
| 第 10 回 | 重回帰モデルの使用とモデルの改善 | モデルの改善・評価について解説する |
| 第 11 回 | 因子分析の数学モデル | 因子分析の数学的構造について解説する |
| 第 12 回 | 探索的因子分析の実際 | 探索的因子分析の事例を紹介する |
| 第 13 回 | 探索的因子分析と確認的因子分析 | 探索的因子分析との比較により、確認的因子分析の概略を学ぶ |
| 第 14 回 | 共分散構造分析およびその他の分析手法 | その他の多変量解析法について概説する |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回～第 4 回 線形代数と統計学に基礎的な表記の予習・復習
第 5 回～第 14 回 教材の復習と出された実習課題の遂行。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。教材を配布するほか、授業中に適宜指示する。

【参考書】

ボンシュテット&ノーキ『社会統計学』ハーベスト社、1990；ウォナコット&ウォナコット『統計学序説』培風館、1981；他授業中に適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

各自が設定したテーマについて、授業で取り上げた分析を使用して執筆されたレポートにより評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉数理社会学・理論社会学・社会意識論
〈研究テーマ〉共同性とフェアネスの関係、ジャスティスの社会学、公平評価の数理モデル。
〈主要研究業績〉
2011『現代の階層社会 第 3 巻 流動化の中の社会意識』（斎藤友里子・三隅一人編）東京大学出版会。

2011「『新自由主義の受容』は何により促されたかー市場化と価値意識」斎藤友里子・三隅一人編『現代の階層社会 第3巻 流動化の中の社会意識』東京大学出版会。

2011「不公平感の構造ー格差拡大と階層性」斎藤友里子・三隅一人編『現代の階層社会 第3巻 流動化の中の社会意識』東京大学出版会（大槻茂実との共著）。

【Outline and objectives】

You can get some "output" of a statistical application software once you learn how to use it. However, if you have no knowledge of statistical theory or method per se, there is quite a possibility that you end up lying about what you have found through the analysis. If you do not want this, you need to know how to fit your research question into the framework of statistical analysis. This course will offer an opportunity to learn how to pursue your research question, quantitatively.

SOC500E1 - 0205

社会調査法3

三井 さよ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

質的調査法の基本的理解と、その実践的力を身につけることを目的とする。まず、インタビューや参与観察などのフィールドワークや、ドキュメント分析などの質的調査法について、その発展の歴史を踏まえながら、現在の到達点について理解する。その上で、具体的に質的調査を行う上で重要な論点となりうることについて、実践的な観点から考察し、議論する。さらに、受講者自身の持つデータや、教員が仮に提供するデータをもとにワークショップを行い、具体的な手法を選び身につけるための手がかりを得るよう試みる。

【到達目標】

さまざまな質的調査法に関する基本的理解を踏まえたうえで、新聞・雑誌記事、資料文書、映像、放送、音楽などの質的データの分析法（内容分析等）を理解するとともに、その一部についての実践的な能力を習得すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

質的調査法についての歴史と具体的な手法に関する現在の到達点について解説した上で、実際の質的調査において直面する課題や問題について解説する。その上で、受講生のデータ（あるいは自身の関心がある領域の質的資料を任意に選んでもらう）を持ち寄り、具体的に分析するプロセスをワークショップ形式で経験させる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期後半

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-----------------|----------------------------|
| 第1回 | 質的調査とは何か | 量的調査との違い／調査倫理の問題 |
| 第2回 | 質的調査法の歴史と到達点1 | インタビュー／参与観察／ドキュメント分析／観察 |
| 第3回 | 質的調査法の歴史と到達点2 | エスノグラフィー／ライフヒストリー／GTA／会話分析 |
| 第4回 | 実践的課題1（資料を集める） | 質問とは何か／ラポールをめぐる論争／調査者の立ち位置 |
| 第5回 | 実践的課題2（資料を分析する） | 記録をつくる／テーマをたてる／データの特性を整理する |
| 第6回 | 実践的課題3（資料を記述する） | 書くとはどういうことか／調査倫理ふたたび |
| 第7回 | ワークショップ1 | データ・質的資料の持ち寄り |
| 第8回 | ワークショップ2 | 最初の感想とそこから見えるもの |
| 第9回 | ワークショップ3 | どう記録をつくるのか |
| 第10回 | ワークショップ4 | テーマをたてる |
| 第11回 | ワークショップ5 | データの特性を理解する |
| 第12回 | ワークショップ6 | 改めてテーマをたてる |
| 第13回 | ワークショップ7 | ふたたびデータの特性を考える |
| 第14回 | 総合討論 | 質的調査法の意義 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

ワークショップに参加するため、自身の関心を持つ領域における質的資料を準備し、その分析過程を各自で試み、レポートする。

【テキスト（教科書）】

岸政彦・石岡丈昇・丸山里美 2016『質的調査の方法』有斐閣

【参考書】

適宜授業中に指示する

【成績評価の方法と基準】

討議への参加（40%）、演習課題への取り組み（60%）

【学生の意見等からの気づき】

非該当

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>臨床社会学

<研究テーマ>ケアや支援の相互作用的分析

<主要研究業績> 2004『ケアの社会学：臨床現場との対話』勁草書房、2010『看護とケア：心揺り動かされる仕事とは』角川学芸出版、(共著)『支援 vol.1』～『支援 vol.7』生活書院

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students acquire the necessary skills and knowledge needed to achieve a performance in their qualitative survey.

SOC500E1 - 0206

社会学原典研究 1

徳安 彰

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

宗教社会学の古典であるピーター・L・バーガーの『聖なる天蓋』をテキストにして、原典講読を行う。原典の講読をととして、宗教の社会的な捉え方と近代社会における宗教のあり方についての理解を深める。

【到達目標】

原典講読を通して、社会的な宗教の捉え方の基礎を理解できるようになる。それと同時に、近現代社会における宗教のあり方について、みずから社会的に考え、理解することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

受講者が、原典テキストの各章を担当してレジュメを作成し、内容を報告する。報告にもとづいて、受講者全員で質疑応答や討議を行う。また必要に応じて、派生的なテーマについても、受講者が学習と報告を行い、全体の討議に資するようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-----------|---------------------------|
| 第1回 | イントロダクション | ピーター・バーガーと宗教社会学の導 入的概説 |
| 第2回 | 講読(1) | 第1章前半 |
| 第3回 | 講読(2) | 第1章後半 |
| 第4回 | 講読(3) | 第2章前半 |
| 第5回 | 講読(4) | 第2章後半 |
| 第6回 | 講読(5) | 第3章前半 |
| 第7回 | 講読(6) | 第3章後半 |
| 第8回 | 講読(7) | 第4章前半 |
| 第9回 | 講読(8) | 第4章後半 |
| 第10回 | 講読(9) | 第5章前半 |
| 第11回 | 講読(10) | 第5章後半 |
| 第12回 | 講読(11) | 第6章 |
| 第13回 | 講読(12) | 第7章+補論 |
| 第14回 | まとめ | 全員による総括的討議 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

原典テキストの講読部分を事前に熟読し、理解を深めるとともに、不明点や派生的な関心点を明確にして授業に臨むこと。また授業後は、復習的にテキストを再読し、十分な理解が得られるようにすること。さらに派生的なテーマについても積極的に学習すること。

【テキスト（教科書）】

ピーター・L・バーガー『聖なる天蓋』ちくま学芸文庫（2018年）

【参考書】

とくに指定はせず、必要に応じて授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（70%）：テキストの担当部分の報告の質、派生的なテーマについての報告の質、および各回の討議への参加・貢献度によって評価する。
レポート（30%）：原典講読にもとづく課題レポートの内容によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

テキストの講読の仕方を指導することによって、受講生のテキスト理解が深まるようにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会システム理論
<研究テーマ>グローバル化の中の社会システム
<主要研究業績>学術研究データベースを参照

【Outline and objectives】

We read "The Sacred Canopy: Elements of Sociological Theory of Religion" (by Peter L. Berger) chapter by chapter. We focus on the sociological understanding of religion and the position and situation of religion(s) in the modern society.

SOC500E1 - 0207

社会学原典研究 2

小林 直毅

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「生権力」だけにはとどまらず、『臨床医学の誕生』や『知の考古学』などの著作となって現れた Michel Foucault の思想を源流とする Medical Sociology の成果と課題を、この分野の基本的論文を読み解くことで考察する。

【到達目標】

20世紀後半以降の社会学の思想的展開とその優れた実践的成果のひとつとして、Medical Sociology を「生権力」「身体」「言説」「知」「近代」「文化」「政治」「メディア」といった多角的視点から理解し、考察できるようになることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

Bryan S. Turner が序文を寄せた Alan Petersen and Robin Bunton (eds.) (1997) *Foucault, Health and Medicine*, Routledge. に取められた論文を講読する。毎回の授業では、参加者が各自の関心に応じて論文を分担してそれぞれの内容をレジュメを準備して報告する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

春学期

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-------------------|---|
| 第1回 | イントロダクション | 社会学思想の成り立ちを考える。 |
| 第2回 | M. フーコーの思想と社会学(1) | Bryan S Turner, "From Governmentality to risk, some reflections on Foucault's contribution to medical sociology" を読む。 |
| 第3回 | M. フーコーの思想と社会学(2) | Robin Bunton and Alan Petersen, "Introduction: Foucault's medicine" を読む。 |
| 第4回 | M. フーコーの思想と社会学(3) | David Armstrong, "Foucault and the sociology of health and illness: a prismatic reading" を読む。 |
| 第5回 | M. フーコーの思想と社会学(4) | Nick J. Fox, "Is there life after Foucault? Texts, frames and differends" を読む。 |
| 第6回 | 中間総括(1) | これまでの報告と議論を振り返って、全員でディスカッション。 |
| 第7回 | 健康と医療をめぐる言説(1) | David McCallum, "Mental health, criminality and the human sciences" を読む。 |
| 第8回 | 健康と医療をめぐる言説(2) | Daborah Tyler "At risk of maladjustment: the problem of child mental health" を読む。 |
| 第9回 | 健康と医療をめぐる言説(3) | Deborah Lupton, "Foucault and the medicalisation critique" を読む。 |
| 第10回 | 中間総括(2) | これまでの報告と議論を振り返って、全員でディスカッション。 |
| 第11回 | 身体、自己(1) | Denis Gastaldo, "In health education good for you? Re-thinking health education through the concept bio-power" を読む。 |
| 第12回 | 身体、自己(2) | Jennifer Harding "Bodies at risk: sex, surveillance and hormone replacement therapy" を読む。 |
| 第13回 | 身体、自己(3) | Liz Eckermann, "Foucault, embodiment and gendered subjectivities: the case of voluntary self-starvation" を読む。 |
| 第14回 | 総括討論 | 社会学の思想と実践を考える。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

分担報告の有無にかかわらず、テキストは必ず精読して、議論のための論点のメモを準備する。

【テキスト（教科書）】

Alan Petersen and Robin Bunton (eds.) (1997) *Foucault, Health and Medicine*, Routledge.

【参考書】

Bryan S. Turner (2008) *The Body and Society: Explorations in Social Theory, Third Edition*, Sage Publications.
Deborah Lupton (2012) *Medicine as Culture: Illness, Disease and the Body, Third Edition*, Sage Publications.

【成績評価の方法と基準】

分担報告、ディスカッション（70％）、「中間総括」、「総括討論」における発表（30％）の達成度で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

メディア文化研究

<研究テーマ>

メディア／アーカイブ研究、水俣病事件報道研究

<主要研究業績>

『メディアテキストの冒険』（世界思想社、2003年）

『テレビはどう見られてきたのか』（共編著、せりか書房、2003年）

『水俣学研究序説』（共著、藤原書店、2004年）

『水俣学講義【第2集】』（共著、日本評論社、2005年）

『テレビニュースの社会学』（共著、世界思想社、2006年）

『「水俣」の言説と表象』（編著、藤原書店、2007年）

『テレビジョン解体』（共著、慶應義塾大学出版会、2007年）

『ポピュラーTV』（共著、風塵社、2009年）

『放送番組で読み解く社会的記憶—ジャーナリズム・リテラシー教育

への活用—』（共著、日外アソシエーツ、2012年）

『メディア・リテラシーの現在—公害／環境問題から読み解く』（共著、ナカニシヤ出版、2013年）

『ニュース空間の社会学—不安と危機をめぐる現代メディア論』（共著、世界思想社、2014年）

『原発震災のテレビアーカイブ』（編著、法政大学出版局、2018年）

【Outline and objectives】

Graduate students will be able to read and understand the basic literature of medical sociology originating from Foucault's thought.

